

ロード・オブ・ザ・キング ～偽ジャック、王者へ の道～

ナナス

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

偽ジャックが取り合えず真のキングを目指すお話し。

目

次

| | | | | | | | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------|-------|
| 第一話 | 第二話 | 第三話 | 第四話 | 第五話 | 第六話 | 第七話 | 第八話 | 第九話 | 第十話 | 第十一話 | プロローグ |
| 1 | 4 | 13 | 31 | 43 | 58 | 66 | 76 | 88 | 104 | 122 | 135 |

| | | | | | | | | | | | | |
|------|------|------|------|------|------|------|------|------|-------|-------|-------|-----|
| 第十二話 | 第十三話 | 第十四話 | 第十五話 | 第十六話 | 第十七話 | 第十八話 | 第十九話 | 第二十話 | 第二十一話 | 第二十三話 | 第二十四話 | |
| 149 | 165 | 174 | 188 | 199 | 220 | 230 | 256 | 263 | 270 | 279 | 291 | 304 |

第二十五話

第二十六話

第二十七話

第二十八話

第二十九話

第三十話

第三十一話

411 395 378 369 357 341 321

プロローグ

ネオ童実野シティー沿岸部、シティーとサテライトを結ぶネオダイダロスブリッジが見える寂れた工場地帯に一人の男がいた。

金髪に少し褐色の肌に鋭い目付きに赤色の目、灰色の服を着ている
男の近くには、灰色のモノサイクルタイプのハイブリット型のD・ホイールが存在して
いた。

「あれから随分時間が経つたものだな・・・早く見つけなれば。」



俺は五ヶ月前によく分からん白い服装の連中に作り出され、WRGPが開催されるネ
オ童実野シティーに集まつて来ているD・ホイラー達と戦いサー・キットの完成を速めろ
と俺は命令を受けデツキとD・ホイールを受け取り世界を巡った。

何？ 命令を無視して世界を巡つても大丈夫なのかだと、俺はキングだ誰かの命令を

聞き動く様な人間では無い！

自らの意思で動き、考え、自らの心のままに動くそれが俺だ！

だが、今の俺は全てが偽りでしかない、姿、デツキ、D・ホイール、人格をコピーした偽者だ・・・だからこそ！ 俺はWRGPで優勝し世界に俺の強さを俺がキングで有る事を俺が俺で有る事を示す必要が有るのだ！

その為に世界を巡り、俺の仲間に相応しいデュエリストを探したが・・・俺の求める程の人材を見つける事は出来なかつた。

だが、新たな力を得る事は出来た新たな力をえたスター・ダストに邪神を倒し更なる高みへと登つた俺のレッド・デーモンズ世界を巡つてえた物は此ぐらいだな。

そして、一ヶ月後に行われるWRGPの予選の為にネオ童実野シティーに帰つて来たものの、今だにメンバーは見付からず仕舞い・・・いつその事この俺が一人三役をこなすかキングの演技力を持つてすれば不可能では無いだが、流石にライディングデュエル中はD・ホイールに乗らなければならぬいため、ピットに残りの二人が居なければ怪しまれてしまう・・・

果たして残り三十日程度で、俺は見つけられるのだろうか求める人材を・・・

そんな事を考えて要ると、ふと視界の端に人影が見えた。

何気なくそちらを振り向くと、そこには赤い帽子を被り、赤いジャケットを纏い左腕には金色のデュエルディスクを着けた付けた、歳は俺とさほど変わらないでであろう男が地面に落ちていたカードを拾っていた。カードを拾っている光景など、さほど珍しくはない遊星などは拾ったカードでデッキを構築したほどだからな。

だが・・・何故だ

俺は奴から目が離せない・・・

俺の中の何かが言っている、奴は強いと、奴はカメラマンに向いていると・・・そして、俺は自分でもわからないうちに奴に近づき

「貴様、俺とデュエルしろ。」

デュエルを申し込んでいた。

第一話

今俺のは赤い帽子の男もと言い、コナミと言う男とデュエルをしようとしている。

俺が突然デュエルを申し込んだのにも関わらず、その申し出に即座に頷き既にデュエルデイスクを構えている。

「ふん、突然デュエルを申し込んだ詫びだ、先行は貴様に譲つてやろう。」

その言葉を聞いてか、深く帽子を被つてしているために見えないが、その瞳がより一層鋭くなり闘志を燃やしているのがわかる。

「（成る程・・・貴様は既に準備は出来ていると言う訳か、ならば）

デュエルデイスクのデッキトップに手を置き。

「デュエルだ！」

コナミ

LP4000

偽ジャック

LP4000

「ドロー」

手札 5 → 6

「手札から、おろかな埋葬を発動しデツキからレベル・ステイラーを墓地へ送る。」

おろかな埋葬

【魔法】

自分のデツキからモンスター1体を選択して墓地へ送る。

手札 6 → 5

「更に、手札からキラートマトを攻撃表示で召喚する。」

フィールドに顔の有るトマトが現れる、しかし何故かトマトの顔の印象のせいでハロウインのカボチャに見えてしまう。

キラー・トマト 閻

☆4

【植物族・効果】

攻 1400

守 1100

このカードが戦闘によつて破壊され墓地へ送られた時、自分のデツキから攻撃力15

00以下の闇属性モンスター1体を自分フィールド上に表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

手札5↓4

フィールド 1

「そして、カードを三枚伏せてターンエンド。」

手札1

フィールド1

魔法・トラップ3

墓地へ落としたのはレベル・ステイラーにフィールドには攻撃表示のキラートマトか、攻撃を誘っているなこれは。

攻撃した所を伏せカードによる反撃かそれともデツキから壁となるモンスターを呼び寄せるのかだが、奴の手札は一枚、あの伏せカードは恐らく手札を補充する物の可能性が高いが、それともブラフかどちらにせよ――――

「粉碎するまでだ！俺のターン！ドロー！」

手札5↓6

ドローしたカードも含め面白い手札だ

「俺は、手札からサイバー・ドラゴンを特殊召喚する」

フィールドに白い装甲の機械で出来たドラゴンが現れた。

サイバー・ドラゴン 光

☆5

【機械族・効果】

攻2100

守1600

相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、このカードは手札から特殊召喚できる。

手札6↓5

「更に俺は手札からデルタフライを召喚する。」

サイバー・ドラゴンと比べ小さな両腕が羽のドラゴンが現れる。

デルタフライ 風

☆3

【ドラゴン族・チューナー】

攻1500

守 900

「ターレンに1度、このカード以外の自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択してレベルを1つ上げる事ができる。」

「いぐそ、デルタフライで攻撃。」

フィールドのデルタフライが空高く舞い上がり、キラートマト目掛け加速し頭から突撃していく次の瞬間にはキラートマトのを貫いていた。

コナミ

LP40000→3900

そして、貫かれたキラートマトは爆発を起こしその内身を周辺に撒き散らしていた、そのせいでコナミは果肉や汁で真っ赤な汁で全身を赤く染めていたソリットビジョンだと言うのに不憫な奴だ。

俺はサイバー・ドラゴンが前にいたために被害は無かつたが、そのせいでサイバー・ドラゴンには果肉や汁が顔や体等に掛かり、恨めしそうに此方に顔を向けていた。

「キラートマトが破壊され墓地に送られた事により、効果を発動。デツキからプチトマボーを攻撃表示で召喚する。」

フィールドに顔がプチトマトの袖の長い服を着た小さなモンスターが二体現れた。

プチトマボー闇

☆2

【植物族・チューナー】

攻 700

守 400

このカードが戦闘によつて破壊され墓地へ送られた時、「デツキから「トマボー」と名のついたモンスターを2体まで特殊召喚できる。このターン、この効果で特殊召喚したモンスターはシンクロ素材にできない。

サイバー・ドラゴンが居るにも関わらず、攻撃力の低くプチトマボーを召喚するとはな。

此処で攻撃をすれば次のターンでシンクロ召喚もしくはアドバンス召喚の為の素材が奴のフィールドに揃うか、だが奴がこのカードを出したと言う事は破壊されるのを持つての事なのだろう、破壊されてこそ真価を發揮するカードだからなアレは。

「ならば、俺は更にサイバー・ドラゴンでプチトマボーに攻撃する。」

未だに顔や体に果肉や汁等にが付いている、サイバー・ドラゴンが鬱憤を晴らすかの様にプチトマボーに向かいエネルギーを口に溜めている、それも何時もよりも長くだ。

攻撃力は2100と変わらないはずなのだが、まるでリミッター解除を発動した時のように口元のエネルギーは巨大になり、それを見ているプチトマボーザの二体は体を抱き合って震えていた。

そして、限界まで溜めたので有ろうエネルギーがサイバー・ドラゴンの口から放たれる、全てを飲み込む様な巨大なエネルギーがプチトマボーザを呑み込み十数秒エネルギーが途切れる事は無かつた。

漸くサイバー・ドラゴンの攻撃が終わりを向かえ、相手フィールドを見てみるとプチトマボーザ跡形も無く消え去り何故かサイバー・ドラゴンが攻撃した所に大きな穴が空いていた。

コナミ

LP3900→2500

「プチトマボーザが破壊され墓地に送られた事で効果を発動、デッキからトマボーザとプチトマボーザを守備表示で特殊召喚する。」

フィールドに檻に閉じ込められもう何もかも諦めている表情の頭がトマトの二頭身のモンスターが現れ、その横にプチトマボーザが召喚された。

「そして、血の代償を発動する。」

血の代償

【罠・永続罠】

500ライフポイントを払う事で、モンスター1体を通常召喚する。この効果は自分

分のメインフェイズ時及び相手のバトルフェイズ時にのみ発動できる。

「500ポイントライフを払い、モンスターをセット。」

コナミ

LP2500→2000

手札1→0

このタイミングでモンスターを伏せるか、だがコレで奴の手札は0だ、だがあの伏せカードがあのモンスターなら……。

「一体の攻撃が終えた事で、バトルフェイズを終了しメインフェイズ2、レベル5サイバー・ドラゴンにレベル3デルタフライをチュウニング！」

デルタフライが空を飛びその姿を緑色の三つのリングへと変わり、サイバー・ドラゴンがその緑色のリングの中心を通よう高く跳ねる。

そして、空中でより一層輝く。

「シンクロ召喚！ 現れろギガンテック・ファイター！」

空中からフィールドへと、凄まじい音を発てながら着地する。

全身をまるで鎧の様に鍛え抜かれた筋肉に覆われ、身体の所々に青い宝石の様な物が埋め込まれ白い巨人が自らの筋肉を披露するようポーズを取りながら、フィールドに降臨した。

ギガンテック・ファイター

闇

☆8

【戦士族・シンクロ／効果】

攻2800

守1000

チユーナー+チユーナー以外のモンスター1体以上

このカードの攻撃力は、お互いの墓地の戦士族モンスターの数×100ポイントアップする。

このカードが戦闘によつて破壊され墓地へ送られた時、自分または相手の墓地の戦士族モンスター1体を選択し、自分フィールド上に特殊召喚できる。

「そして、俺はカードを三枚伏せターンエンドだ。」

第二話

コナミ

LP2000

手札0

フィールド トマボー、プチトマボー、セットモンスター一枚
魔法・トラップ 血の代償、伏せカード二枚

偽ジャック

LP4000

手札 一枚

フィールド ギガンテック・ファイター

魔法・罠 伏せカード三枚

「ドロー」

手札0→1

ドローをしたカードを見て奴の表情が僅にだが変わるのが見える。

「セットしていたモンスター、メタモルポットを攻撃表示に変更する。」

フィールドに古びた壺が現れ、壺が此方に倒れ込み壺の中道が見える大きな一つ目と笑つて居るよう口角を上げ歯並びの良い綺麗な歯がズラリと見える。

メタモルポット 地

☆2

【岩石族・効果】

| | |
|---|-----|
| 攻 | 700 |
| 守 | 600 |

リバース：お互いの手札を全て捨てる。その後、お互いはそれぞれ自分のデッキからカードを5枚ドローする。

「そして、メタモルポットのリバース効果に対し血の代償を効果を発動500ポイントライフを払い手札からモンスターを通常召喚する。」

LP 2000→1500

「フィールド上のメタモルポット、トマボ一、プチトマボ一三体をリリースし、現れる神獸王バルバロス。」

フィールドに存在する、三体が光の粒子へと変わり次の瞬間。

右手には矛が赤いランスを左腕には盾を持つた、顔がライオン上半身は人の体下半身は四足歩行の獣の身体を持つたモンスターが現れて雄叫びを擧げる

手札1→0

ファイールド3→1

神獣王バルバロス 地

☆8

【獣戦士族・効果】

攻3000

守1200

このカードはリリースなしで通常召喚できる。

この方法で通常召喚したこのカードの元々の攻撃力は1900になる。

また、このカードはモンスター3体をリリースして召喚できる。

この方法で召喚に成功した時、相手ファイールド上のカードを全て破壊する。

「メタモルポットの効果によりお互いの手札を全て捨て、その後お互いはカードを五枚ドローする。」

コナミ

手札 0 → 5

偽ジャック

手札 1 → 0 → 5

成る程、メタモルポットの効果で手札を五枚補充更に攻撃力の低いメタモルポットは即座にリリースしバルバロスの効果を発動させるか。

このまま効果が発動すれば俺のフィールドは全て破壊され、奴は補充された手札から攻撃力1000以上のモンスターを出せば俺のライフは0になるか。

「神獣王バルバロスの効果を発動、モンスター三体をリリースしたことにより相手フィールド上に存在するカードを全て破壊する。」

バルバロスの持つているランスが超高速回転する、それに伴い周囲の風がランスの回転に巻き込まれる様に纏わり付き、凄まじいまでの暴風へ変わる。

そして、バルバロスから放たれる強力な一撃

周囲の物を全て巻き込みながら進む破壊の渦が迫りくる。

「せん！　トラップ発動！　スターライト・コード、自分フィールド上のカードが二枚以上破壊される効果が発動した時、その効果を無効にし破壊する！　バルバロスの効果

を無効にし破壊する！」　スターライト・ロード

【罠】

自分フィールド上のカードを2枚以上破壊する効果が発動した時に発動できる。その効果を無効にし破壊する。

その後、「スターダスト・ドラゴン」1体をエクストラデッキから特殊召喚できる。迫りくる破壊の渦が俺のフィールド手前で光輝く壁が現れ、バルバロスから放たれ一撃を阻み攻撃を跳ね返す。

バルバロスは跳ね返された自らの攻撃により呑み込まれ破壊された。

フィールド1↓0

「更に、エクストラデッキからスターダスト・ドラゴンを特殊召喚する、現れろスターダスト・ドラゴン！」

光輝く壁が、天空へ伸びる一本の道へと変わりその道を白いドラゴンが翔昇り、そして、フィールドに純白の翼を広げた白いドラゴンが舞い降りる。

フィールド1↓2

魔法・罠3↓2

スターダスト・ドラゴン 風

☆8

【ドラゴン族・シンクロ／効果】

攻2500

守2000

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

「フィールド上のカードを破壊する効果」を持つ魔法・罠・効果モンスターの効果が発動した時、このカードをリリースして発動できる。その発動を無効にし破壊する。

この効果を適用したターンのエンドフェイズ時、この効果を発動するためにリリースしたこのカードを墓地から特殊召喚できる。

「ふん、バルバロスその効果は確かに強力だ、だが残念だつたな貴様のカードは不発に終わつたな。」

「伏せカードの、メタル・リフレクト・スライム発動」

フィールドに金属で出来たスライムが現れる

フィールド0→1

魔法・罠3→2

メタル・リフレクト・スライム

【罠・永続】

このカードは発動後モンスターカード（水族・水・星10・攻0／守3000）となり、自分のモンスターカードゾーンに守備表示で特殊召喚する。

このカードは攻撃する事ができない。（このカードは罠カードとしても扱う）

「墓地のレベル・ステイーラの効果を発動、フィールドのメタル・リフレクト・スライムのレベルを一つ下げフィールドに守備表示特で殊召喚する。」

フィールドに背中に大きな星マークを持つたてんとう虫が現れた。

フィールド1↓2

レベル・ステイーラー 閻

☆1

【昆虫族・効果】

攻撃力 600

守備力 0

このカードが墓地に存在する場合、自分フィールド上のレベル5以上のモンスター1

体を選択して発動できる。

選択したモンスターのレベルを1つ下げ、このカードを墓地から特殊召喚する。

このカードはアドバンス召喚以外のためにはリリースできない。

「更に伏せカードの地獄の暴走召喚を発動、レベル・ステイーラを選択する。」

地獄の暴走召喚

【魔法・速攻】

相手フィールド上に表側表示でモンスターが存在し、自分フィールド上に攻撃力1500以下のモンスター1体が特殊召喚に成功した時に発動する事ができる。

その特殊召喚したモンスターと同名モンスターを自分の手札・デッキ・墓地から全て攻撃表示で特殊召喚する。

相手は相手自身のフィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択し、そのモンスターと同名モンスターを相手自身の手札・デッキ・墓地から全て特殊召喚する。

フィールド1↓4

魔法・罠2↓1

「俺のフィールドに存在するのはシンクロモンスターよつて、地獄の暴走召喚の効果は適用されないか。」

「手札から冥界の宝札を発動」

冥界の宝札

【魔法・永続】

「2体以上の生け贋を必要とする生け贋召喚に成功した時、デツキからカードを2枚ドローする。」

手札5→4

「更に手札から薔薇の刻印を発動、自分の墓地に存在する植物族モンスター、キラートマト除外しスターダスト・ドラゴンのコントロールを得る。」

薔薇の刻印

【魔法・装備】

自分の墓地の植物族モンスター1体をゲームから除外して発動できる。

このカードを装備した相手モンスター1体のコントロールを得る。

自分のエンドフェイズ時、装備モンスターのコントロールを相手に移す。

自分のスタンバイフェイズ時、装備モンスターのコントロールを得る。

手札4→3

「攻撃力の高いギガンテック・ファイターでは無く、スターダストを選ぶか……だがこの瞬間、トラップ発動！ バスター・モード！ スターダスト・ドラゴンをリリースしデツキからスターダスト・ドラゴン／バスターを特殊召喚する。」

スター・ダスト・ドラゴンが足元から極大の光の柱に包まれ、光が止むとそこには腕や足や胴などに装甲を纏つたスター・ダスト・ドラゴン／バスターがいた。

スター・ダスト・ドラゴン／バスター 風

☆10

【ドラゴン族・効果】

攻3000

守2500

このカードは通常召喚できない。

「バスター・モード」の効果及びこのカードの効果でのみ特殊召喚する事ができる。

魔法・罠・効果モンスターの効果が発動した時、このカードをリリースする事でその発動を無効にし破壊する。

この効果を適用したターンのエンドフェイズ時、この効果を発動するためにリリースされ墓地に存在するこのカードを、自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

また、フィールド上に存在するこのカードが破壊された時、自分の墓地に存在する「スター・ダスト・ドラゴン」1体を特殊召喚する事ができる。

フィールド2→2

魔法・罠3→2

「自分の墓地に闇属性が三体の場合このカードを手札から特殊召喚し事が出来る。」

ダーク・アームド・ドラゴンを攻撃表示で特殊召喚する。」

フィールドに身体中に刃物が付いた黒いドラゴンが現れた

ダーク・アームド・ドラゴン 闇

☆7

【ドラゴン族・効果】

攻2800

守1000

このカードは通常召喚できない。

自分の墓地の闇属性モンスターが3体の場合のみ特殊召喚できる。

自分のメインフェイズ時に自分の墓地の闇属性モンスター1体をゲームから除外する事で、フィールド上のカード1枚を選択して破壊する。

手札3→2

ダーク・アームド・ドラゴンか効果は厄介だが俺のフィールドにはスターダストがいる、効果を発動しようものなら破壊する迄の事だ。

「手札から禁じられた聖杯を発動、スターダスト・ドラゴン／バスターを選択」

禁じられた聖杯

【魔法・速攻】

フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動できる。

エンドフェイズ時まで、選択したモンスターの攻撃力は400ポイントアップし、効果は無効化される。

手札2↓1

成る程、スターダストの能力を封じその後、ダーク・アームド・ドラゴンの能力で破壊が目的かギガンテック・ファイターも戦闘破壊で無ければ蘇生効果は発動は出来

「だが、甘い！ スターダスト・ドラゴン／バスターの効果を発動！ このカードをリ

リースする事により魔法・罠・効果モンスターの効果無効にし破壊する。」

スターダスト・ドラゴン／バスターが光輝き、光の粒子へと変わり禁じられた聖杯の効果を無効に破壊する。

フィールド2↓1

だが此れで破壊効果を防ぐ物は無くなつたかた。

「ダーク・アームド・ドラゴンの効果を発動、墓地から闇属性モンスターを除外しフィールド上のカードを破壊する。墓地からプチトマボーを除外し此方側からみて右側のカードを破壊する。」

此方側みて右側、つまり俺の左のカードか

ダーク・アームド・ドラゴンが腕を振るい、腕に付いていた刃が此方目掛け飛び伏せカードに突き刺さり破壊される。

「（プライドの咆哮をやられたか。）」

「更に、プチトマボーを除外して効果を発動。もう一つの伏せカードを破壊」

反対側の腕が振られ、飛んでくる刃が伏せカードを破壊する

「スクリーン・オブ・レッドが破壊されたか」

「最後に、トマボーを除外しギガンテック・ファイターを破壊する。」

ダーク・アームド・ドラゴンが飛び上がり空中で縦に凄まじい回転をしながら、目の前の敵目掛け襲いかかる。

それに対し、ギガンテック・ファイターがその鋼の肉体を持つて迎撃の右ストレートが繰り出しが

拳が回転に触れた瞬間、拳は消え去り殴りに行つた腕も切り刻まれそして、次の瞬間に

にはギガンテック・ファイターは跡形も無く無惨にバラバラになつていた・・・

これで俺のフィールドを守る物は何もないか

I — T H E W O R L D を召喚

フィールドに上半身だけの機械で出来た様なモンスターが現れた

手札 1 → 0

フィールド 4 → 3

「そして、冥界の宝札の効果を発動『ツキから一枚ドロー。更にアルカナフォースXX I — T H E W O R L D の効果を発動』

手札 0 → 2

フィールドの中心にソリットビジョンによるコインが現れ、コインが跳ね上がる。

アルカナフォースXX I — T H E W O R L D か、表が出た場合は俺のターンは確実にスキップされるだろう、裏が出た場合はドローステップ時に墓地の一番上のカードを手札に加えるだが、一番のカードはギガンテック・ファイター余り意味は無い。

そして、空中を待つていたコインが地面へと落ち数度跳ね、その動きを止める。

止まつたコインの表になつているのは―――

裏だつた。

「ふ、どおやら運命の女神は俺を見放してはいなうだな。」

「コインの裏側が出た事によりアルカナフォースXXI—THE WORLDの効果が発動。相手はドローフエイズ時に墓地の一番上のカードを手札に加える。そして、メタル・リフレクト・ライスのレベルを一つ下げて墓地からレベル・ステイーラを特殊召喚。」

フイールドに背中に大きな星のマークがあるてんとう虫のモンスターが現れる。

フイールド4→5

「更に血の代償を発動500ポイントライフを払い二体のレベル・ステイーラをリリースして、手札から火之迦具土を召喚。」

フイールドに炎で出来た髪を持ち鍛え上げられた肉体を持つ漢のモンスターが現れる。
火之迦具土 炎

☆8

【炎族・スピリット】

攻2800

守2900

このカードは特殊召喚できない。

召喚・リバースしたターンのエンドフェイズ時に持ち主の手札に戻る。また、このカードが相手ライフに戦闘ダメージを与えた時に発動する。次のターンのドローフェイズのドロー前に相手は手札を全て捨てる。

LP1500→1000

手札2↓1

フィールド5→4

「冥界の宝札の効果を発動、二枚ドロー」

手札1→3

奴の戦闘ダメージを受けたら次のドローフェイズには、今持っている手札を破棄されるダメージは受けられないな。

「バトル、火之迦具土で攻撃。」

火之迦具の腕に炎が灯り、此方を殴り掛かってくる。

「だが、早々に殺られはせん。 手札からバトルフェーダー特殊召喚し、バトルフェイズを終了する。」

バトルフェーダー 閣

☆1

【悪魔族・効果】

| | |
|---|---|
| 攻 | 0 |
| 守 | 0 |

相手モンスターの直接攻撃宣言時に発動できる。

このカードを手札から特殊召喚し、バトルフェイズを終了する。
この効果で特殊召喚したこのカードは、フィールド上から離れた場合ゲームから除外される。

手札 5↓4

フィールド 0↓1

火之迦具土の攻撃が止まり、自分のフィールドへと戻っていく。

「カードを一枚伏せてターンエンド、そして火之迦具土は手札に戻る。」

火之迦具土の全身が炎に包まれ、フィールドから手札へと戻る。

手札 3↓2↓3

フィールド 4↓3

魔法・罠 1↓2

「此方も、エンドフェイズ時スター・ダスト・ドラゴン／バスターの効果が発動、我が
フィールドに再び舞い戻れ。」

フィールドに光の粒子が集まり、ドラゴンの形を作り出し腕や足や胴などに装甲を
纏つた白いドラゴンが現れる。

フィールド1↓2

第三話

コナミ

L P 1 0 0 0

手札 3

フィールド ダーク・アームド・ドラゴン メタル・リフレクト・スライス アルカ
ナフォース X X I — T H E W O R L D

魔法・罠 血の代償 瞬間の宝札 伏せカード一枚

偽ジャック

L P 4 0 0 0

手札 4

フィールド スターダスト・ドラゴン／バスター バトルフェード

魔法・罠 0

奴のフィールドには攻撃力2700のダーク・アームド・ドラゴン、攻撃力3100
のアルカナフォース X X I — T H E W O R L D、守備力3000のメタル・リフレク
ト・スライスが入る

今の俺の手札では、奴のフィールドのモンスターを全て破壊する事は出来ない、奴のモンスター全てを破壊する為にはあのカードを引く必要がある。

「全てはこのドローに掛かっていると言う訳か・・・俺のターン！　ドロー！」

「アルカナフォースXXI—THE WORLDの効果を発動、相手のドローフェイズ時に相手は墓地の一番上のカードを手札に加える。」

「（攻撃力の高い奴をこの場で破壊しておきたいが・・・）俺の墓地の一番上のカードはギガンテック・ファイターだ、手札には加えられんエクストラへと戻る。」

手札4↓5

俺は、ドローしたカードを確認する。

「ふつ、俺は手札から手札抹殺を発動だ！　互いに手札を捨て、捨てた枚数ドローする。」

手札抹殺

【魔法】

お互いの手札を全て捨て、それぞれ自分のデッキから捨てた枚数分のカードをドローする。

四枚の手札を捨てる、此れで墓地にあのカードを送れた後はアレを引くことが出来れば。

デツキから四枚のカードを引く。

「来たか。」

「俺は墓地の、サイバードラゴンと手札抹殺で墓地に送られたダーク・リゾーネーターを除外し、手札からカオス・ソーサラーを特殊召喚する。」

フィールドに白い光の玉と黒い光の玉が現れ、空中に漂っていると其所に全身が薄暗い色の魔術師のようなモンスターが現れた。

カオス・ソーサラー 閻

☆6

【魔法使い族・効果】

攻2300

守2000

このカードは通常召喚できない。

自分の墓地の光属性と闇属性のモンスターを1体ずつゲームから除外した場合に特殊召喚できる。

1ターンに1度、フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択してゲー

ムから除外できる。

この効果を発動するターン、このカードは攻撃できない。

手札 4↓3

フィールド 2↓3

「そして、カオス・ソーサラーの効果を発動！　一ターンに一度、表側表示で存在する相手のモンスター一体をゲームから除外する！　俺が除外するカードはアルカナフォースXXI—THE WORLDだ！」

カオス・ソーサラーの腕に白い光と黒い光が灯り、その二つの光をアルカナフォースXXIに目掛け放つ、黒い光と白い光がアルカナフォースXXIにぶつかると黒と白の光が激しく光ながら混ざりあいその体を包み混んで行き、フィールドからその姿が消えす。

フィールド 3↓2

「この効果を使用したターン、カオス・ソーサラーは攻撃する事は出来なくなる。そして、手札を一枚デッキの上に戻し墓地からゾンビキャリアをフィールドに特殊召喚する。」

フィールドに腕や足のパートがそれぞれ違う、腐ったモンスターが現れる。

手札 3↓2

フィールド3→4

「行くぞ！」 レベル6カオス・ソーサラーにレベル2ゾンビキャリアをチューニング！ ゾンビキャリアが緑色のリングへと変わり空中飛んでいき、そのリングを通様にカオス・ソーサラーも飛び上がる。

「シンクロ召喚！ 現れろスターダスト・ドラゴン！」

空中で二つのリングを通過すると、カオス・ソーサラーを中心に柱状の光が発生し光が止むと。

純白の翼を広げた白いドラゴンがフィールドに舞い降りた。

フィールド4→3

「更に俺は手札からチエーン・リゾネーターを召喚する、そして自分フィールドにシンクロモンスターが存在する場合デッキから、「リゾネーター」と名の付いたモンスターを特殊召喚する。俺はデッキからフレア・リゾネーターを特殊召喚する。」

フィールドに、二本の角の様な物が付いた兜の様な物を被り黒い衣装を纏い、両手に道具を持ち背中の後ろに黒いチエーンが丸い形で繋がっているモンスターが現れる。

フィールド3→4

チエーン・リゾネーター 光

☆1

【悪魔族・チューナー】

攻 100
守 100

このカードが召喚に成功した時、フィールド上にシンクロモンスターが表側表示で存在する場合、自分のデッキから「リゾネーター」と名のついたモンスター1体を特殊召喚する事ができる。

フィールドにいるチエーン・リゾネーターが両手の道具を叩き合わせ、フィールド音がなり響くと炎が現れその形を変えていく。

その見た目はチエーン・リゾネーターと殆ど変わらず背中にチエーンではなく炎を背負った、フレアリゾネーターが現れた。

フィールド4↓5

フレア・リゾネーター 炎

☆3

【悪魔族・チューナー】

攻 300
守 1300

このカードをシンクロ素材としたシンクロモンスターの攻撃力は300ポイントアップする。

「俺は更に、レベル1バトルフェーダーにレベル1チエーン・リゾネーターをチューニング！」

チエーン・リゾネーターが緑色のリングとなり空へと昇り、其所にバトルフェーダーが緑色のリングを通過すると柱状の光が発生し光が止まると。

フィールドにF1のレーシングカーに手足を付けた様なモンスターが現れる。

フィールド5↓4

フォーミュラ・シンクロン 光

☆2

【機械族・シンクロン・チュナー】

攻 200

守1500

チューナー+チューナー以外のモンスター1体

このカードがシンクロ召喚に成功した時、自分のデッキからカードを1枚ドローする事ができる。

また、相手のメインフェイズ時、自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードをシンクロ素材としてシンクロ召喚をする事ができる。

「そして、フォーミュラ・シンクロロンを召喚に成功したことでデッキから一枚ドローする。」

手2↓3

「此れで準備は整つた、見せてやろう貴様にシンクロロン召喚を超えたシンクロロン召喚を！ 俺はレベル8スターダスト・ドラゴンにレベル2フォーミュラ・シンクロロンをチューニング！」

フォーミュラ・シンクロロンが緑色のリングとなり空中へと舞い上がる。

スターダスト・ドラゴンが空中のリングを目指し飛び上がり、リングを二つ通過する。

「アクセル・シンクロ！ 現れろシユーティング・スター・ドラゴン！」

柱状の極大の光が発生し当たり一面を照らし出し光が止まる。

フィールドに一陣の風が吹き抜け

そして、フィールドの上空に、背中の翼はドラゴンの羽と言うよりも飛行機の翼の様になり、全身がよりスマートになつたスターダスト・ドラゴンの面影が残る純白のドラ

ゴンが存在していた。

フィールド4↓3

シユーティング・スター・ドラゴン 風

☆10

【ドラゴン族・シンクロン・効果】攻3300

守2500

シンクロモンスターのチューナー1体+「スターダスト・ドラゴン」

以下の効果をそれぞれ1ターンに1度ずつ使用できる。

- 自分のデッキの上からカードを5枚めくる。

このターンこのカードはその中のチューナーの数まで1度のバトルフェイズ中に攻撃する事ができる。

その後めくったカードをデッキに戻してシャツフルする。

- フィールド上のカードを破壊する効果が発動した時、その効果を無効にし破壊する事ができる。

- 相手モンスターの攻撃宣言時、このカードをゲームから除外し、相手モンスター1

体の攻撃を無効にする事ができる。

エンドフェイズ時、この効果で除外したこのカードを特殊召喚する。

「シユーティング・スター・ドラゴンの効果を発動！ 自分のデツキの上から五枚めくなり、その中のチューナーの数だけ攻撃をする事が出来る、めくつたカードはその後デツキに戻しシャツフルする。

行くぞ！ まず一枚目、魔法カード、コール・リゾネーター。二枚目、チューナーモンスター、レッド・ノヴァ。三枚目、魔法カード、死者蘇生。四枚目、チューナーモンスター、インフルーエンス・ドラゴン。五枚目、チューナーモンスター、救世竜セイヴァー・ドラゴン。よつて俺のシユーティング・スター・ドラゴンは三回の攻撃が可能！」

「バトルだ！ シユーティング・スター・ドラゴンでダーク・アーム・ドラゴンに攻撃！」
シユーティング・スター・ドラゴンがフィールドから更に高く飛び上がる、その途中で三つに分身しその内の一體が地上に居るダーク・アーム・ドラゴン目掛け一直線に凄まじ速度で突撃していく。

そして、ダーク・アーム・ドラゴンは抵抗する間もなく貫かれ、破壊された。

LP 1000→400

フィールド2→1

「更に、メタル・リフレクト・スライムに攻撃！」

空中で待機していた一体が攻撃態勢に入り、速度を増しながらメタル・リフレクト・ライムに向かい突撃する。

強固な装甲で守られたスライムであつてもその速度から繰り出される威力の攻撃にはその装甲も役に立たず、破壊される。

フィールド1→0

「これで最後だ！ シューティング・スター・ドラゴンでダイレクトアタック！」

空中に残っていた最後一体が、より高く飛び上がりコナミ目掛けより速くより強く、速度を増しながら突撃していき。

そして、シューティング・スター・ドラゴンの攻撃はコナミに防がれる事無くそのライフを削つた。

LP400→0

相手のライフを0にしたことで、ソリットビジョンが徐々に消え始める。

「俺の勝ちだな。 贠けた貴様は俺と一緒にWRGPに参加して貰うぞ、拒否権は無い！」

「なに？ 元から拒否するきは無いだと。 ふん、ならば俺に付いて来い。 WRGPの

予選まで後少しありさつさと残りの一人を見付けるぞ！」

こうして俺は、コナミと出逢いこの後出逢うもう一人と共にWRGPを駆け上がつていくのだつた。

第四話

ネオ童実野シティ、とある工場区に白いフードを被り、右目には∞のマークのある仮面の様な物を着け白い服装着た一人の青年がいた。
「ゴーストの量産と機能の向上も順調か・・・」

眼前に広がる無数の機体を見つめ呟く

「後もう少しか・・・」



俺は、裏舞台から表舞台へとその活動を移動し間もなくの事だ、ある事だ。

それは起こつた・・・

まさか

ルチアーノの悪戯で

タライを頭に落とされ・・・

ブロツク去っていた記憶

アポリアの事やアンチノミー、パラドックス、ゾーンの事をおもいだしてしまっては。本来ならば、俺達三人が合体しなければ本来の姿にはなれない。

そして、アポリアになる事でブロツクされていた記憶は解除される。
だが俺はタライの衝撃で思い出てしまつた・・・

そのせいで俺達を造り出した、ゾーンは元々その命を尽きるのを防ぐために延命措置を施してはいるがそれもそろそろ限界を迎える事を思い出してしまった。だからこそWRGPを開催しサーキットを完成させアーククレイドル出現させ、ネオ童実野シティに落としネオ童実野シティごとモーメントを破壊する計画になつた、そうゾーンがその命を尽きる前に彼は自らの命を賭けこの世からモーメントを消そうとしている・・・アポリアの記憶がある俺は分かる
だが・・・

ネオ童実野シティにアーククレイドルをぶつけ、モーメントを消し去つたとしても、
破滅の未来は変わらないだろう・・・

裏舞台から干渉をしてきて分かつた事がある。

確かに俺達は歴史を改変してきたが、その中で消えない物もある事が分かつた。
それがモーメントだ

今までコツコツと歴史の修正力が働かない様にモーメントを消し去ろうと裏から動

いていたが、何度潰しても似たような物が出来モーメントは生まれる。

ふ、可笑しな話だろ俺達がその気になつて破壊や情報を操作すれば歴史からモーメント等無くなるはずだ。

それにも関わらず今だモーメントは健在している。

もしも歴史の修正力を無視し根本を絶つような事をすれば元に戻ろうとする力によりバラドックスの様な目に会う。

そう俺達は歴史を確かに改変してきただがそれは、出発地点AをBやCに変えただけでゴール地点は何も変わつてはいない。

ゾーンも薄々は気付いて要るのだろう、ゼロ・リバースよりも規模も犠牲も大きな惨劇を起こしたとしても消えないと言う事を。

確かに人々の記憶にはこの事は刻まれる、モーメントを使い繰り返せば破滅の未来が訪れる事もある。

だが、人とは痛みを忘れる。

当事者出は無い人間は、時間が経てば忘れ、きっとまたシンクロ召喚をモーメントの力を求め出す・・・

そして、あの未来は訪れてしまうのだろう。

あの破滅の未来にさせない為にはモーメントの力やシンクロ召喚を無理矢理に無くそうとするのでは無く、そう誰かが正しい方向へと導く事が重要なのだと思う・・・

そう、ゾーンが自らのを改造し不動 遊星となり人々を導こうとした様に・・・

今ならまだ間に合う此処の時代には本物の不動 遊星が要る。

彼に望み託し賭けるのも一つの手段なのだろう。

だから、この時代の不動 遊星がどれ程の物か調べる為にはゴーストをぶつけた、確かに強かつた・・・だがまだ人々を導くには足りない、覚悟が強さがそんな事では世界を救えない。

だが、分かつた事もあるこの時代にはアンチノミーが要る事だ、今はブルーノと名乗り記憶を封じている様だが不動 遊星と共に居ると言う事が。

ホセやルチアーノは気付いてはいない記憶が戻った俺だけが謎のD・ホイーラーの正体を知っている。

最初に出会った時はアンチノミーは俺にデュエルを挑んできた、俺に気付く様子は無かつた。

だがゾーンがアンチノミーを過去に送り出した次点で俺達の事を教えないのは可笑しい。

だが、ゾーンがアンチノミーに俺達とは別の任務をさせているとしたら？
記憶を封じ、生前使っていたシンクロデッキを使わせてまで何を…と思つたが、考
えてみれば簡単な事だ。

アンチノミーはシンクロ召喚を使う、更にシンクロモンスターとシンクロモンスター
を使つたアクセルシンクロを行える。

アクセルシンクロは不動 遊星—— 僕達の世界のだが使えたと記録がある。

だが此方の不動 遊星はまだ使える様子は無い…

計画を実行するのならば、ぶつかるで有ろう不動 遊星にはアクセルシンクロを使え
ない方が倒しやすいに決まつていて。

そう不動 遊星がアクセルシンクロ、シンクロ召喚の新たな可能性を見たので有れば
いづれは其処に到達する可能性がある。

そんな事になれば此方の計画にも支障が出る可能性が出てくる筈だ。

逸れにも関わらずゾーンはアンチノミーを俺達とは敵対させ、アンチノミーは遊星に
アクセルシンクロをデュエルで見せた。

いづれ遊星はアクセルシンクロを使える様になるだろう、何故ゾーンがそんな事をし
たのかそれはまだ、ゾーンは心の何処かにまだ希望を願つているからなのだと俺は思
う。

不動 遊星に新たな可能性を見出だしたいのだと。
モーメントを、人の心を正しい方向へと導いて欲しいからなのだと。

だが、ゾーンには不動 遊星を見届けるだけの時間はもう無い。

俺はゾーンの願い通りにアーククレイドルをこの街に落とすべきなのか、彼の僅かに願う希望を叶えるべきなのか・・・

俺は―――― どうすればいいんだ。

また、俺は仲間を失うのか――――



◆
俺達は3つの絶望から造られた。
ルチアーノは両親を目の前で失つた絶望。

ホセは愛さえいらなくなつた絶望。

俺の元となつた絶望は、仲間（とも）を失つた絶望。

そして、俺の仲間（とも）であるゾーンはアーヴィングを落とそうとしている。心の奥底には僅かな不動 遊星に対する希望を求めながら・・・

ゾーンは、アーヴィングを落としモーメントごと街を破壊し破滅の未来が回避でききたか未来に確認しに行く筈だ。

だが、それで未来が変わつていなかつたら・・・

彼は今までの行いが間違つていたのかと、多くの命を犠牲にしたのは間違いだつたのかと悔やみながら更に絶望し苦しむのだろう。

そして、絶望の中彼は死んでしまうのだろう。
だが、俺はゾーンにそんな風にはなつて欲しくはない、最期は希望を持つて笑つて貰いたい。

俺の人生は絶望だらけだつた希望など忘れかけていた、だが仲間（とも）と出合い世界を元に戻そうと希望ができた、その途中でアンチノミーやパラドックスが倒れ最後にアポリアである俺も倒れた。

最期にゾーンに希望を託して。

そうだ俺達は確かに絶望の中にいた、だが最期は絶望しながら死んでいった訳ではない。

アンチノミー、パラドックスも希望を持ちながら死んでいった。

必ず破滅した世界を元に戻そうと希望を託し。

だからゾーンには希望を、心の奥底にはある僅かな希望を諦め無いで欲しい。

だが、ゾーンには時間が少ないとからこそアーククレイドルを落とす強行策にでた。

そう、アンチノミー、パラドックス、アポリアのゾーン自らの希望を願いを叶える為に。

彼は託された希望を叶える為に今回の事を行うのだろう、彼が倒れたら彼は希望を託せる人間はもうあの未来には居ない。

だからこそ焦っているのだろう、自分が倒れたらあの未来を変える事が出来ないと、託された希望を叶えられない。

悩み苦悩し焦り、この道を選ばせてしまったのだろう。

先に倒れてしまつた俺達のせいでもある、彼を一人にしてしまつたのだから。

例え名前と記憶を引き継いだ俺達がいたが、それはゾーンからしたら本物ではない似ているロボットだ。

だが、それでも

俺は

ゾーンには死んで欲しくはない

そうだ、俺はゾーンには死んで欲しくはない。

これ以上仲間（とも）を失いたくはない。

ゾーンの今の意思に反する事になつたとしても、止めてみせる。

アーククレイドルは落とさせない、ゾーンに会うために呼びだす。

今俺ではゾーンに会うことは出来ない、アポリアになる事が出来ればゾーンに会えるだろうが、アポリアに戻つてしまつた場合今俺の記憶やこの思いはただの記録となる。

そうならない為にアポリアに成るためには、ホセヤルチアーノを機能停止前までダメージを与える必要がある。

そうすれば主導権はこちらが握れる、だが俺一人では厳しいだろう。

誰かの力を借りる必要がある、だが一体誰に力を借りる？

不動 遊星か？ いや此方とは敵対関係にある厳しいだろう。

アンチノミーは、どういう命令を他に受けているか解らない以上は危険か・・・

これ以上考へても、平行線をたどりそうだ。

今日も名目上不動 遊星達の監視に行くとするか。

青年は白い服そうを脱ぎ捨て、黒い執事服の様な格好に黒い髪を上げた姿になつた。



そして、とあるカフエに青年はいた。

その動きは一切の無駄が無く、拳動一つ一つが正に完璧と言えるだろう。
まるで機械の様な正確さだ。

「おい、バリスター。ブルーアイズマウンテンを一つ頼む。」

「畏まりました、アトラス様。」

・・・一応、始めに言つておくがこれもれつきとした監視だ。

一日中ストーカーの様に不動 遊星達の住んでいる処に張り付いている訳にはいかない、そんなことをしたらセキリティを呼ばれてしまうからな。だから直ぐ横のこのカフェで働いている。

怪しまれないように、WRGP出場を応援する一般市民として不動 遊星に接触し、頑張つて下さいと差し入れ等を持つていき。

今では家の中に入れるほど仲良く馴れた、そのお掛けで今の現状が事細かに解る様になれた。

気分転換にはもつてこいだ、カフェの仕事も、情報集めも。

そして、あつと言う間に時間が過ぎさりカフェの仕事を終え、仮の家へと足を運ぶ。

その途中―――

「(付けられているな・・・)」

カフエから離れ俺が一人になつた、ときからついて来ている。
一人、いや二人か。

一体誰だ？

何度かイチャモンを付けてきたチンピラを退治したことがあるが奴等か？

此処では、機皇帝は使えない監視カメラがある。

あの路地に行けば・・・

走る、数メートルある路地を目指し。

後ろの二人もそれにあわせて走り出したようだ。

路地に入り、追い掛けてくるで有ろう二人を待ち構える。

其所に現れたのは―――

何時もの白い服そうを黒く染めた、赤い目のジャック・アトラスと赤い帽子を深く被り赤いジャケットを着た青年がいた。

「……アトラス様私に何か御用でしようか、後ろを憑けてくるなど一体……」
昼間にブルーアイズマウンテンを飲んで居た時とは別人の様だな。
服装と言い、赤い目と言い、その気迫と言い一体何があつた……
うん？ 赤い目だと、確か半年か其処ら前に赤い目をしたジャック・アトラスの偽者
を造つた筈だが、まさかこいつ……

「おい、貴様俺とデュエルしろ！」

そして、此が俺とジャック、コナミの初めての出会いだつた。

第五話

コナミとのデュエルを終え早くも一週間が経ち俺は現在、コナミの家に住んでいる。

本来ならキングであるこの俺が、この様な小さな家に住むのはあれだが此方にも事情がある、この町には俺のオリジナルのジャック・アトラスが居る。

シティやサテライト等で宿をとつた場合、俺の情報が漏れた場合面倒だセキリティや特にオリジナルにな。

オリジナルに張れた場合、「このジャック・アトラスの名を語る偽者などこの俺が自ら倒してやろう！」等と言い探し出す可能性がある。

オリジナルを倒す事は俺にとって難しくも何ともないが、ただ騒ぎになるのが厄介だと言える。

WRGP予選まで日数がある、まだメンバーを探している途中で騒ぎになるのは面倒だ。それと、D・ホールの調整やWRGPに向けての俺の衣装作りなどコナミに任せている為、作業が何れ程進んだのか確かめる為にもこの家に居る必要があるのだ。

だがそれもコナミが多才なためこの一週間の内に俺の求める衣装を完成させ、D・ホイールも既に以前よりも走りの切れやスピード、コーナリング、最高時速になるまでの時間が改善され更に今はD・ホイールのカラーリングを変えている最中だ。

話を聞くとまだまだその気になればD・ホイールの性能を全面的に上げる事が可能だそうだ、それを聞いた俺は「なら！ 全力を尽くせ！ 形を変えないのなら何処までも性能を上げても構わん！」 それで今はコナミは俺のD・ホイールを改造中だ、完成した時が楽しみだ。

それと、今WRGPのメンバーを探していると言つたがもうメンバーにする一人は既に目を付けている。

奴から感じる強さはコナミにも匹敵する強さだ。

明日には一通りD・ホイールの改造は終わる、コナミと共に奴の処へと向かうとしよう。

「おい！ コナミ起きろ！ 貴様は何時まで寝ているつもりだ！ この俺が起こしてい
るのだ起きろ！」

コナミと知り合いわかつた事がある、こいつは寝たらひたすら寝る、しかも起きたら
起きたで飯など食べずにカードを弄る男だ。

だが、そんな不規則な生活はこのキングで有るジャック・アトラスが許さん！
毎日キツチリバランスの取れた食事を朝、昼、夜と食べさせ。健康の為の運動も毎日
させ、デュエルの為の筋力を付ける事も忘れずにさせ。

睡眠時間も毎日7～8時間とするようにさせ夜更かしなどさせん！

「む、起きたかコナミ……おい！ 二度寝をするな！ さつさと目を開けて起きろ！」

俺が起こしていると言うのに二度寝をしようとするとはこいつは……

「……漸く起きたか、起きたのな歯を磨いて顔を洗つてこい。 朝食は既に用意してい
る冷めない内に食べろ。」

いまだ目を半分程閉じているが、ベットから起きトボトボと洗面所の有る場所へと部
屋を出ていった。

こいつは、俺がこの家に住むまでカップ麺やインスタント食品を食べて暮らしてい
た、それも食事のバランスなど考えずにな。

それを目の当たりにした俺は、即座にカップ麺やインスタント食品をオリジナルの住む家にファン名義で送り付け、ネットを使い調理用の道具を揃え食材を取り寄せた。本来ならばこの俺自信の目で道具を揃る事や、食材の吟味などをしたかつたが今は仕方がない我慢しよう。

そして、今は俺が食事のバランスの事や飽きが来ないように様々な料理を三食作つている。

そんな事を考え食事を用意した下の階へ移動すると、コナミが幾分かスッキリとした顔で食事の為に席に座つていた。

「コナミ食事をしながらで良いから俺の話しを聴け。 今日の夕方は残りのWRGP出場のメンバーをスカウトに行く、貴様はどうする夕方になる前にはD・ホイールの改造など一通りは終わるのだと、一応聞いておくが、着いてくるか?」

俺の問いに答える為だろう、朝食を頬張りながらモゴモゴと何かを言つている。

「俺の問い合わせに直ぐに答えるのは好ましいが、口の中の物が無くなつてからでかまわん。 . . そうか貴様も着いてくるか、何? デュエル出来るのかだと始めにデュエルするるのはこの俺だ、貴様はその次にしろ。」

そして時間は過ぎ———

「そろそろ時間か・・・」

何時もの服装ではなく、それを黒くした様な服に着替え赤く染まり始める街並みを眺めながら呟く。

「コナミそろそろ行くぞ準備は出来たか・・・おい、何故貴様はD・ハイールを出している。」

隣には、今まで見てきた物の中でも凄まじの一言に尽きる規格外のD・ハイールに乗り込はろうとするコナミの姿があつた。

「D・ハイールで行かないのかだと? 馬鹿めそんな物で走つたら否応なしに人の目を集め。今はまだその時では無い、何、WRGPが始まつたら存分暴れれば良い。」

その言葉を聞いてか、乗るのを渋々と言つた感じに乗るのを止めていた。

「貴様と俺の脚ならば、直ぐに尽くさ。だが、行く前に一つ言うべきことが有る、一目と監視カメラには付かない様に移動するついてこい。」

その言葉と共に、大地を蹴り駆け抜けた――

駆け出した速度は最早人間の出せる物を越え、まるでD・ホイールの様な速さだ。

そして、大地を――― 道路を――― 家を――― 壁を――― 屋根
を――― ビルを――― 走り抜ける。

十数分後――

「見えるか、黒い執事服を着ている奴が俺のスカウト対象だ。 ふつ、貴様にも分かるか
奴の強さが。」

俺達が居るのは、奴から離れた数百メートル離れたビルの上に居る。

奴に気付かれない為にも、此ぐらいの距離は取つていた方が良いだろう、だが奴が一
流のデエリスト、一流の執事ならこの距離でも気付かれている可能性はある。

「ム、奴が動いた、追いかけるぞコナミ！」

奴をおいかけるに、ビルを飛び降り壁を蹴り近くのビルや、屋根、を飛び移りながら移動する。

奴との距離が数十メートルまで近付くと、奴は路地へと走り出した。
「やはり気付いていたか。」

逃げられる訳には行かないため、更に速度を上げ追いかける。
だが、その考えは杞憂に終わつた路地を曲がると其所には奴が此方を向き待ち構えていた。

「・・・アトラス様私に何か御用でしようか、後ろを憑けてくるなど一体・・・
どうやら、奴は俺をオリジナルと勘違いしている様だな・・・
だが、そんな事より

「おい、貴様俺とデュエルしろ！」

「・・・デュエルですか？ 私がアトラス様とですか？」

「そうだ俺とデュエルだ！ それと貴様が言うアトラス様と俺は別人だ、俺の名前を呼ぶとしたら、ジャック、偽ジャック、キング ジャックどれでも好きな物で呼ぶがいい。」
「・・・ではジャック様と呼ばせて頂きます。」

捻りの無い普通の解答か、まあいいだろう

「ジャック様は何故私とデュエルをしたいのでしょうか？」

「ふ、そんな事か。ならば教えてやろう貴様をWRGPに誘うためだ！ 貴様を見た時に分かつた貴様は強いと、だからこそWRGPに出場する俺のメンバーに貴様を加える、デュエルに勝つてな！」

「（…）いつ、見ただけで強さがわかるだと？ そんな機能は付けてなかつたはず…」
では、ジャック様もしも、私が勝つた場合はどの様な事を考えているのでしょうか？」
この俺を目の前にしながら、勝つ場合か、面白い。

「貴様が勝つた場合は、貴様の好きにするがいい。俺の叶えられる範囲の願いなら叶えてやる。」

「（俺の願いがこいつに叶えられるとは思えん…いや待て、これは使えるかもしけん。）
では、私も全力で戦わせ貰います。」

「そうで無くては面白く無い。」

「デュエルスタートだ！」

第六話

今俺は、謎の執事——もといシドと言う名前の執事とコナミと共にデュエル出来る場所へと移動している。

「デュエルスタートだ！」と言つてお気ながら俺はその発言の後に気付いた、俺達が居た路地はスタンディングデュエルをするのは問題は無かつた、だがソリットビジョンを映し出すには少し狭い事にだ。

だから俺達は

今路地を歩きながら広い場所に移動をしてる、因みに案内をしているのはシドだ。
そして、歩くこと数分。

俺達は誰もいない開けた空間に歩き着いていた。

「ジャック様、この場所は如何でしようか。」

「確かにこの場所ならば、ソリットビジョンも問題なく映し出せるな。それに監視カメラも人の目も無いとは良い場所だ。」

此処なら問題は無いな、存分戦える

「ではシドよ、デュエルを始めるぞ。先行は貴様に譲つてやろう、準備はいいか。」

「ジャック様、此方の準備は大丈夫で御座います。デュエルの先行有り難く頂戴致します。」

「ほう、速いな先程まで俺の隣に居たと言うのに既に俺と向かい合わせになるよう移動したか。」

それに先程までデュエルディスクなど持つていなかつたと言うのに腕には、執事服と同じ色のデュエルディスクを着けている。

「ふつ、ではデュエルスタートだ！」

シド

LP 4000

手札5枚

偽ジャック

LP 4000

手札5枚

「では私の先行、ドロー」

手札5→6

「(奴のデツキがこの数カ月でどう変わったかは、解らないが様子をみるとしよう。) 私は手札からE-エマージエンシーコールを発動、デツキからE-HERO エアーマンを手札に加えます。」

E-エマージエンシーコール

【通常】

デツキから「E-HERO」モンスター1体を手札に加える。

「私は手札から、E-HERO アナザー・ネオスを攻撃表示で召喚」

フィールドに背丈が子供程度の全身を銀色のスーツを着たHEROが現れた。
「カードを二枚伏せターンを終了します。」

E-HERO アナザー・ネオス 光

☆4

【戦士族・デュアル】

攻1900

守1300

このカードはフィールド・墓地に存在する限り、通常モンスターとして扱う。

フィールドの通常モンスター扱いのこのカードを通常召喚としてもう一度召喚できる。

その場合このカードは効果モンスター扱いとなり以下の効果を得る。
このカードがモンスターゾーンに存在する限り、カード名を「E·HERO ネオス」として扱う。

シド

手札 6→3

フィールド 1

魔法・罠 2

エマージェンシーコール、エアーマン、アナザー・ネオス、奴のアナザー・ネオス、奴のデツキはHEROデツキか？

奴のフィールドにはアナザー・ネオスに伏せカードが二枚か、あの伏せは恐らく破壊を防ぐもしくはHEROをデツキから呼び寄せるカード等だろう。

今の俺の手札には、単体で奴のアナザー・ネオスに勝てるカードは無い。

シンクロ召喚しか無いが、HEROの融合モンスターは優秀なカードが多いならば。

「俺のターンドローー！」

偽ジャック

手札 5 → 6

「俺は手札からコール・リゾネーターを発動、デッキからチエーン・リゾネーターを手札に加える！ そして、手札からバイス・ドラゴンを攻撃表示で特殊召喚する。」

フィールドに全身が紫色で翼膜が緑色の二足歩行のドラゴンが現れた。

バイス・ドラゴン 閻

☆5

【ドラゴン族・効果】

攻 2000

守 2400

相手フィールドにモンスターが存在し、自分フィールドにモンスターが存在しない場合、このカードは手札から特殊召喚できる。

この方法で特殊召喚したこのカードの元々の攻撃力・守備力は半分になる。

手札 6 → 5

フィールド 0 → 1

「更に俺は、手札からトラスト・ガーディアンを攻撃表示で召喚する！」

フィールドに、両脇に小さな羽が付いた少し縦長の兜を着け、背中にも薄い赤い色の羽を持つち青い衣装を着た小さな天使が現れた。

トラスト・ガーディアン 光

☆3

【天使族・チューナー】

攻 0

守 800

このカードをシンクロ素材とする場合、レベル7以上のシンクロモンスターのシンクロ召喚にしか使用できない。

このカードをシンクロ素材としたシンクロモンスターは、1ターンに一度だけ戦闘では破壊されない。

この効果を適用したダメージステップ終了時、そのシンクロモンスターの攻撃力・守備力は400ポイントダウンする。

手札 5↓4

フィールド 1↓2

「俺は、レベル5のバイス・ドラゴンにレベル3のトラスト・ガーディアンをチューニング！」

トラスト・ガーディアンが3つの列なつた緑色のリングになり空へと昇っていく、列

なつたりングを目指しバイス・ドラゴンが空を飛び、3つのリングを通過するトリングを貫く様に縦に光の柱が現れる。

「王者の決断、今赤く滾る炎を宿す、真紅の刃となる！熱き波濤を超え、現れよ！シンクロ召喚！炎の鬼神、《クリムゾン・ブレーダー》！」

光が消えると其所には、両手に長い両刃の剣を持ち紅い鎧に身を包んだ細身の剣士が現れた。

クリムゾン・ブレーダー 炎

☆8

【戦士族・シンクロ／効果】

攻2800

守2600

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

このカードが戦闘によつて相手モンスターを破壊し墓地へ送つた時、次の相手ターン、相手はレベル5以上のモンスターを召喚・特殊召喚する事ができない。

フィールド2→1

「バトルだ！ クリムゾン・ブレーダーで、アナザー・ネオスに攻撃！ レッドマーダー！ （さあ、この攻撃どう受ける！）」

「オリジナルの様に、パワーだけの馬鹿では無いようだな。だが問題は無い。」

両手の刀身に炎が灯り、敵に目掛け斬りかかる。

左の剣で左腰辺りから、炎を纏つた斬撃が斜めに右肩まで切り裂き。

右の剣で左肩から斜めに炎を纏つた斬撃が右腰を切り裂き、その体をX字に切り裂かれアナザー・ネオスは爆散した。

「戦闘によつて相手モンスターを破壊し墓地へ送つた事により、次のターン貴様はレベル5以上のモンスターを召喚・特殊召喚する事ができない。」

シド

LP 4000 → 3100

フィールド 1 → 0

「厄介な効果ですね。ですが私のフィールド場のモンスターが戦闘により破壊された事により、罠発動、ヒーロー・シグナル。私はデッキからE・HERO シャドー・ミストを守備表示で特殊召喚します。」

ヒーロー・シグナル

【罠】

自分フィールドのモンスターが戦闘で破壊され墓地へ送られた時に発動できる。

手札・デッキからレベル4以下の「E・HERO」モンスター1体を特殊召喚する。

フィールドに、白い仮面の様な顔をし全身を黒いスーツ、頭、胴、肩、腕や脚等に黒い装甲を着け、頭の後ろから青黒い長い髪を靡かせたHEROが現れた。

E・HERO シャドー・ミスト 開

☆4

【戦士族・効果】

攻1000

守1500

「E・HERO シャドー・ミスト」は1ターンに1度、いずれか1つしか使用できない。このカードが特殊召喚に成功した場合に発動できる。

デッキから「チエンジ」速攻魔法カード1枚を手札に加える。

このカードが墓地へ送られた場合に発動できる。

デッキから「E・HERO シャドー・ミスト」以外の「HERO」モンスター1体を手札に加える。

「そして、私はデッキからマスク・チエンジを手札に加えます。」

フィールド0→1

手札3→4

魔法・罠2→1

シャドー・ミストを特殊し手札にマスク・チエンジを加えたか、次のターン本来なら奴を特殊召喚するのだろうが、次のターン奴はレベル5以上のモンスターは特殊召喚は出来ない。

さあ、どお出でくる。

「俺は、カードを二枚伏せターンを終了する。」

手札 $4 \downarrow 2$

フィールド1

魔法・罠 $0 \downarrow 2$

第七話

シド

LP 3100

手札 4

フィールド E・HERO シャドー・ミスト

魔法・罠 1

「私のターン、ドロー。」

手札 4→5

「(このターン俺は、レベル5以上のモンスターを召喚・特殊召喚は出来ない、手札のマスク・チエンジもこのターンは意味が無いか、問題は無い。)」

「私は手札から、E・HERO エアーマンを攻撃表示で召喚します。」

フィールドに、下半身は白い装甲と青色の靴を履き、上半身は青色の肌に両腕には青色の籠手、胸や肩を守るように青色の装甲を着け背中には、三角の翼にプロペラが着いた様なHEROが現れた。

手札 5→4

フィールド1→2

E・HERO エアーマン 風

☆4

【戦士族・効果】

攻1800

守300

このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、以下の効果から1つを選択して発動できる。

このカード以外の自分フィールドの「HERO」モンスターの数まで、フィールドの魔法・罠カードを選んで破壊する。

デッキから「HERO」モンスター1体を手札に加える。

「そして私は、エアーマンの召喚時効果を発動します。このカード以外の自分フィールドの「HERO」モンスターの数まで、フィールドの魔法・罠カードを選んで破壊します。私はジャック様の左側の伏せカードを破壊します。」

エアーマンの翼のプロペラが高速回転し、プロペラから竜巻の様な暴風が発生し伏せカードを破壊する。

偽ジャック

魔法・罠 2↓1

伏せカードを警戒し破壊に来たか。 破壊されたのはスクリーン・オブ・レッド、だが問題は無いな。

「私は、カードを一枚伏せターンを終了します。(次のターン、面白い物を見せてやる偽ジャック。)」

手札 4↓3

フィールド シャドー・ミスト エアーマン 2

魔法・罠 1↓2

「俺のターン! ドロー!」

手札 2↓3

奴の伏せカードはやはり、マスク・チエンジの可能性は高いな。

このターンで、エアーマンにマスク・チエンジを使えば破壊耐性を持つM・HEROを召喚出来る。

シャドー・ミストを破壊出来たとして奴はデッキからHEROをサーチ、次のターン、レベル5以上の召喚を出来なくしたとしても破壊耐性持ちが要れば1ターン等楽に持ちこたえられるだろう。

だが、やはり特殊召喚は封じて起きたいか。

「バトルだ！ クリムゾン・ブレーダーでE・HERO シヤドー・ミストを攻撃！ レッドマーダー！」

クリムゾン・ブレーダーの両腕の剣の刀身が燃え上がり、相手フィールドに居るシャドー・ミスト目掛け斬り掛かる。

「この瞬間、私は伏せカードを発動します。」

「（来たか！）」

「私は―――――― 速攻魔法、超融合を発動します。」

超融合 魔

【速攻】

手札を1枚捨てて発動できる。

自分・相手フィールド上から融合モンスター1カードによつて決められた融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体を融合召喚扱いとしてエクストラデッキから特殊召喚する。

このカードの発動に対して魔法・罠・効果モンスターの効果は発動できない。

「私は手札を一枚捨て、効果を発動します。 私のフィールドのE・HERO シャドー・ミストとジャック様のフィールドのクリムゾン・ブレーダーを選び融合致します。」

両腕の剣を振り抜こうとした時、突然クリムゾン・ブレーダーとシャドー・ミストの間の空間に穴が開き、クリムゾン・ブレーダーは咄嗟に回避行動をとろうとしたが、空間に開いた穴から出る謎の力により抵抗虚しく、吸い込まれていく。

クリムゾン・ブレーダーが吸い込まれた反対側からシャドー・ミストが勢いよく穴へと飛び込んで行く。

「E・HERO シャドー・ミストとクリムゾン・ブレーダーを融合し、私はE・HERO ノヴァマスターを融合召喚。」

そして、穴が光輝くと次の瞬間――――――

全てを焼き尽くすかの様な灼熱の炎がフィールドに広がる。

その灼熱の炎の中心には灼熱の炎に負けないほどの色をし、炎を模したかの様な鎧を纏い、紅蓮のマントを靡かせたHEROが存在していた。

E・HERO ノヴァマスター 炎

☆8

【戦士族・融合／効果】

攻 2 6 0 0

守 2 1 0 0

「E・HERO」モンスター+炎属性モンスター

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードが戦闘で相手モンスターを破壊した場合に発動する。

自分はデッキから1枚ドローする。

「そして、私は超融合で墓地へ送られたE・HERO シャドー・ミストの効果を発動します。デッキから「E・HERO シャドー・ミスト」以外の「HERO」モンスター1体を手札に加えます。私はデッキから E・HERO オーシャンを手札に加えます。」

偽ジャック

フィールド 1↓0

シド

手札 3↓2↓3

フィールド E・HERO ノヴァマスター E・HERO エアーマン

魔法・罠 2↓1

「（超・・・融合だと？）何だあのカードは、俺のデータベースには無いカードだ、あれは一体・・・）・・・俺はターンエンドだ。」

魔法・罠 1↓2

「私のターン、ドロー。」

手札 3↓4

「（驚いたのはほんの一瞬か、もう少しオリジナルの様な大きなリアクションを期待していたのだがな。）私は手札から、E・HERO オーシャンを攻撃表示で召喚します。」

フィールドに、水色の体を持ち頭にモヒカンの様な水色のヒレが付き、手には槍の先端が三日月型の槍の持つたHEROが現れた。

E・HERO オーシャン 水

☆4

【戦士族・効果】

攻1500

守1200

1ターンに1度、自分スタンバイフェイズに自分のフィールド・墓地の「HERO」モンスター1体を対象として発動できる。

その自分の「HERO」モンスターを持ち主の手札に戻す。

手札 4→3

フィールド 2→3

「(やはり、あの伏せカードが気になるな・・・ ブラフと言う可能性もあるが。) 私は手札から

、魔法カード、マスク・チエンジを発動、E・HERO オーシャンを指定します。」
マスク・チエンジ 魔

【速攻】

自分フィールドの「HERO」モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを墓地へ送り、そのモンスターと同じ属性の「M・HERO」モンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する。

フィールドに存在する、E・HERO オーシャンの顔に光るマスクの様な物が現れ、その姿を変えていく。

水という漢字を少しデフォルメした様な模様をマスク、胴体、ベルトに付け、青い色

の装甲とスーツを纏い、右手には銃を持つHEROが現れた。

M・HERO アシッド 水

☆8

【戦士族・融合／効果】

攻2600

守2100

このカードは「マスク・チエンジ」の効果でのみ特殊召喚できる。

このカードが特殊召喚に成功した時、相手フィールド上の魔法・罠カードを全て破壊し、相手フィールド上の全てのモンスターの攻撃力は300ポイントダウンする。

「M・HERO アシッドの効果を発動します。相手フィールド上の魔法・罠カードを全て破壊します、モンスターが居ないためもう1つの効果は発動しません。」

アシッドの持つ銃が、伏せカードに狙いを定めビームの様な物が発射される。

「貴様なら、破壊に来ると思っていたぞ！ M・HERO アシッドが特殊召喚された事により罠発動！ 激流葬！ フィールド上のモンスターを全て破壊する！」

激流葬

【罠】

モンスターが召喚・反転召喚・特殊召喚された時に発動できる。

フィールド上のモンスターを全て破壊する。

フィールドに全て飲み込む様な激流が発生しフィールドのモンスターを巻き込み破壊する。

偽ジャック

罠 $1 \downarrow 0$

シド

手札 $3 \downarrow 2$

フィールド $3 \downarrow 0$

「おや？ 伏せカードは激流葬でしたか。 これは素直にフルアタックにしておくべきでしたね。」

HERO達が消え失せたフィールドを見ながら、呴くがその言葉には焦りの色のはみられない。

「(表情や声からは焦りの色は伺えない、逆転出来ると言う事か)」

「私は、伏せていた罠を発動します。 リビングデッドの呼び声を発動し、墓地からE・HERO シャドー・ミストを攻撃表示で特殊召喚をします。」

リビングデッドの呼び声 罪

【永続】

自分の墓地のモンスター1体を対象としてこのカードを発動できる。

そのモンスターを攻撃表示で特殊召喚する。

このカードがフィールドから離れた時にそのモンスターは破壊される。
そのモンスターが破壊された時にこのカードは破壊される。

フィールドに、叫び声が響くと黒い装甲とスーツを着け青黒い髪のHEROが現れた。

フィールド 0→1

「E·HERO シャドー・ミストの効果を発動します。このカードが特殊召喚に成功した場合、デッキから「チエンジ」と名の付いた速攻魔法を1枚を手札に加えます。私はデッキからマスク・チエンジを手札に加えます」

手札 2→3

「そして、私はシャドー・ミストでジャック様にダイレクアタックを行います。」
フィールドに居るシャドー・ミストがその名の如く、霧に変わり空気中に霧散してい

きフィールドから消えると、次の瞬間、偽ジャックの足下の影から黒い影が飛び出し偽ジャックを攻撃した。

偽ジャック

LP 40000→3000

「私はカードを一枚伏せターンを修了します。」

手札 3↓2

フィールド E・HERO シャドーミスト 1

魔法・罠 リビングデッドの呼び声 1↓2

第八話

偽ジャック

LP 3000

手札 3

フィールド 0

魔法・罠 0

「俺のターン！ ドロー！」

手札 3↓4

奴のフィールドには、E・HEROシャドー・ミストが一体に伏せカードが一枚、奴の手札にはマスク・チエンジが二枚、高確率でマスク・チエンジの可能性は有るか。

その場合は、M・HERO ダークロウ 攻撃力こそ低いものの効果はやつかいだな、だが

「どんな物だろうと粉碎するまでだ！ 俺は、手札から死者蘇生を発動！ 墓地から蘇れ！ クリムゾン・ブレーダー！」

フィールドのモンスターゾーンの1つに光が差し、紅い鎧を纏つた二刀流の細身の剣

士が光が差した地面から飛び出しフィールドに着地する。

手札 4→3

フィールド 0→1

「（クリムゾン・ブレーダーか、また召喚妨害か）」

「更に俺は、手札からシンクロ・チエンジを発動！ 自分フィールド上の表側表示で存在するシンクロモンスター1体を除外し、そのモンスターと同じレベルのシンクロモンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する！ 俺はクリムゾン・ブレーダーを除外し、同じレベルのレッド・デーモンズ・ドラゴンを特殊召喚する！」

シンクロ・チエンジ 魔

【通常】

自分フィールド上に表側表示で存在するシンクロモンスター1体を除外して発動する。

そのモンスターと同じレベルのシンクロモンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する。この効果で特殊召喚した効果モンスターの効果は無効化される。

「現れる！ 我が魂！ レッド・デーモンズ・ドラゴン！」

クリムゾン・ブレーダーが、空へと飛び上がりその姿を赤い8つの列なつたリングへ

と変わる。

そして、赤いリングを貫く様に光の柱が発生し光が晴れると頭に3つの角を生やした赤と黒の悪魔を模したかの様な、ドラゴンがフィールドに舞い降りる。

レッド・デーモンズ・ドラゴン 閻

☆8

【ドラゴン族・シンクロ／効果】

攻3000

守2000

チユーナー+チユーナー以外のモンスター1体以上

このカードが相手フィールド上に守備表示で存在するモンスターを攻撃した場合、そのダメージ計算後に相手フィールド上に守備表示で存在するモンスターを全て破壊する。

自分のエンドフェイズ時にこのカードがフィールド上に表側表示で存在する場合、このカード以外のこのターン攻撃宣言をしていない自分フィールド上のモンスターを全て破壊する。

手札 3↓2

フィールド 1↓1

「シンクロ・エンジで召喚されたシンクロモンスターは、効果を発動する事は出来ない。よって俺のレッド・デーモンズの効果は無効化されている。」

「なんだ？ クリムゾン・ブレーダーの効果よりも攻撃力を選んだというのか？」

「俺は、手札からチエーン・リゾネーターを攻撃表示で召喚！」
フィールドに、角の付いた兜に両腕には音叉を待ち背中にチエーンが丸く付いた悪魔が現れた。

「チエーン・リゾネーターの効果を発動！ フィールドにシンクロモンスターが居ることによりデッキから「リゾネーター」と名の付いたモンスターを一体、特殊召喚する。
俺はデッキからダーク・リゾネーターを攻撃表示で特殊召喚する！」

チエーン・リゾネーターが音叉を鳴らすと、フィールドにチエーン・リゾネーターの背中の装飾が違う見た目が殆ど同じのモンスターが現れた。

手札 2↓1

フィールド 1↓2↓3

「(リゾネーターを出して何をするきだ？)」

「見せてやろうシド！ これが俺の切り札だ！」

「切り札だと？ チューナー2体に、シンクロモンスター1体で何を・・・」

「レベル8のレッド・デーモンズ・ドラゴンにレベル3ダーク・リゾネーターとレベル1チエーン・リゾネーターを、ダブルチューニング！」

「（シンクロモンスター1体とチューナーモンスター2体使つたシンクロだとでも言うのか！？）

フィールドの、リゾネーター達がその姿を燃え盛る真っ赤な4つの列なつたリングへと変わり空へと昇っていく。

「王者と悪魔、今ここに交わる！ 荒ぶる魂よ、天地創造の叫びをあげよ！」

そして、4つの燃え盛るリングの中へとレッド・デーモンズ・ドラゴンが飛び込むと、レッド・デーモンズを中心に4つリングが縦横無尽に回転をし、より一層激しく炎が燃え上がり炎が散る

「シンクロ召喚！ 出でよ！ 紅蓮の悪魔！ 《スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン》！」

フィールドに、レッド・デーモンズ・ドラゴンよりも赤い深紅の色をし四枚の翼を持った、ドラゴンが舞い降りる。

スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン 間

☆12

【ドラゴン族・シンクロ／効果】

攻3500

守3000

チューナー2体+「レッド・デーモンズ・ドラゴン」

このカードの攻撃力は、自分の墓地に存在するチューナーの数×500。ポイントアツプする。

このカードは相手の魔法・罠・効果モンスターの効果では破壊されない。

また、相手モンスターの攻撃宣言時、このカードをゲームから除外し、相手モンスター1体の攻撃を無効にする事ができる。

エンドフェイズ時、この効果で除外したこのカードを特殊召喚する。

フィールド 3→1

「そして、スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンの攻撃力は、墓地に存在するチューナーモンスターの数×500。ポイントアツプする！ よつて俺のスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンは1500。ポイントアツプし、攻撃力は5000になる！」

フィールドに存在する、スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンに紅いオーラの様な物が現れ、雄叫びを上げる。

「（何だ・・・このカード!?）・・・ダブルチューニングですか・・・まさかその様な方

法に、この様なモンスターが存在して居ようとは驚きです。」

「邪神を倒して手に入れた世界で唯一のカードだ。その力を存分に味わえ行くぞ、シド。バトルだ！ スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンでE・HERO シャドー・ミストに攻撃！ バーニング ソウル！」

スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンが空へと飛び上がり、手足や翼や尻尾の先端などを折り直線的な形態に変形し炎を纏い相手フィールドにいるシャドー・ミスト目掛け襲い掛かる。

（スカーレッド・ノヴァの攻撃力は5000、シャドー・ミストの攻撃力は1000此が決まれば俺の勝ちだな、だか貴様は此所では終わらないのだろ、シド。）

「私は、伏せていた罠を発動します。 フローラル・シールド、相手モンスターの攻撃を無効にし私はカードを一枚ドローします。」

フローラル・シールド 罠

【通常】

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。

相手モンスター1体の攻撃を無効にし、自分のデッキからカードを一枚ドローする。

手札 2↓3

シャドー・ミスト目掛け攻撃を仕掛けていたスカーレッド・ノヴァは、突然現れた花

にぶつかり攻撃の勢いが無くなり攻撃を中止した。

「ほう。マスク・チエンジだと思っていたが違った様だな。5000の攻撃力もこれでは意味が無いな。」

「こんな事になるのでしたら、マスク・チエンジも伏せておけば良かったと今更ながら思つております。そうすればダーク・ロウの効果でカードは墓地へは送られ無かつたのですから。」

「過ぎた事を悔やんでも仕方がない。これから挽回すれば良い事だ。俺はターンを終了だ。」

手札 1

フィールド 1 スカーレット・ノヴァ・ドラゴン

魔法・罠 0

「私のターン、ドロー。」

手札、3→4

「（ダブルチューニングに攻撃力5000のシンクロモンスターには驚いたが、何とかなつたな。それにこの二枚のドローカード逆転は可能だな）私は手札から使者蘇生を発動します。墓地からE・HERO エアーマンを攻撃表示で特殊召喚します。」

フィールドのモンスターゾーンの1つに光が差し、光が差した地面から勢いよく三角の翼を持つ上半身が青色で下半身が白色のHEROが飛び出した。

「そして、私はE・HERO エアーマンの効果を発動します。私はデッキから「HERO」と名の付いたモンスター1体を手札に加える事が出来ます。私はデッキからE・HERO スパークマンを手札に加えます。」

手札 4↓3↓4

フィールド 1↓2

「そして、私は手札からE・HERO スパークマンを攻撃表示で召喚します。」

フィールドに、青いスーツに金色の装甲を纏つた雷操るHEROが現れた。

手札 4↓3

フィールド 2↓3

奴の手札には今の所マスク・チエンジが二枚有ること確かだ、そしてフィールドには闇、風、光属性のHEROがいる、ダーク ロウ、カミカゼ、光牙。

ダーク ロウならドロー妨害に除害効果、光牙なら攻撃力ダウン、カミカゼなら攻撃制限かどれも面倒だな。

「私は、手札からマスク・チエンジを発動します。私はE・HERO シャドー・ミストを選び、M・HERO ダーク ロウを攻撃表示で特殊召喚じす。」

フィールドにいる、シャドー・ミストの顔に光マスクが現れ、その姿を変えていく。黒いスーツに黒い装甲に、頭には動物をモチーフにした黒いマスクを被り、両肩と胸部にも黒い動物の顔が着い黒いHEROが現れた。

M・HERO ダーク・ロウ 閻

☆6

【戦士族・融合／効果】

攻2400

守1800

このカードは「マスク・チエンジ」の効果でのみ特殊召喚できる。

このカードがモンスターゾーンに存在する限り、相手の墓地へ送られるカードは墓地へは行かず除外される。

1ターンに1度、相手がドローフェイズ以外でデッキからカードを手札に加えた場合に発動できる。

相手の手札をランダムに1枚選んで除外する。

手札 3→2

まずはダーク ロウかこれで俺はドローしたとしても除害確定か、次は来るとしたら光牙か。

「E・HERO シャドー・ミストが墓地に送られた事により効果を発動。 デツキから「E・HERO シャドー・ミスト」以外の「HERO」と名の付いたモンスター1体を手札に加えます。 私はデツキから E・HERO ワイルドマンを手札に加えます。」

手札 2→3

「更に私は手札からマスク・チエンジを発動、 E・HERO エアーマンを選び私はM・HERO カミカゼを攻撃表示で特殊召喚します。」

フィールドのE・HERO エアーマンの顔に光マスクが現れ、 その姿を変えていく。 純白のマントを纏かせた緑色のスーツと装甲を纏つたHEROが現れた。

M・HERO カミカゼ 風

☆8

【戦士族・融合／効果】

攻2700

守1900

このカードは「マスク・チエンジ」の効果でのみ特殊召喚できる。 このカードは戦闘では破壊されない。

このカードがモンスターゾーンに存在する限り、 相手はバトルフェイズにモンスター

1体でしか攻撃できない。

このカードが戦闘で相手モンスターを破壊し墓地へ送った時に発動できる。

自分はデッキから1枚ドローする

手札 3→2

此所でカミカゼだと、攻撃制限と破壊耐性が有るが俺のスカーレットは破壊出来ない、どういう事だ。

「そして、私は手札からマスク・チャージを発動。 墓地から、マスク・チエンジとE・HERO エアーマンを手札に加えます。」

マスク・チャージ 魔

【通常】

自分の墓地の、「HERO」と名の付いたモンスター1体と「チエンジ」と名の付いた速攻魔法カード1枚を対象として発動できる。そのカードを手札に加える。

手札 2→1→3

「私は墓地から加えたマスク・チエンジを発動、E・HERO スパークマンを選びM・HERO 光牙を攻撃表示で特殊召喚します。」

フィールドのE・HERO スパークマンの顔に光るマスクが現れその姿を変えていく。

た。 黄色の光輝くスーツと装甲を纏い両腕には鋭い剣の様な物が着いたHEROが現れ

M・HERO 光牙 光
☆8

【戦士族・融合／効果】

攻2500

守1800

このカードは「マスク・チェンジ」の効果でのみ特殊召喚できる。

このカードの攻撃力は相手フィールドのモンスターの数×500アップする。
1ターンに1度、自分の墓地の「HERO」モンスター1体を除外し、フィールドの表側表示モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターの攻撃力はターン終了時まで、この効果を発動するために除外したモンスターの攻撃力分ダウントする。

この効果は相手ターンでも発動できる。

なるほど手札にマスク・チャージがあつたのか。

それにもしても、前のターンに三体のHEROを破壊したと言うのにこのターンで三体のM・HEROを揃えるとはな、しかし三体のM・HEROがフィールドに揃うと壯観

だな。

「M・HERO 光牙の攻撃力は相手フィールドのモンスターの数×500アップします。 ジャック様のフィールドにはスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンが一体、よつて光牙の攻撃力は3000になります。 更に私は光牙の効果を発動、自分の墓地の「HERO」と名の付いたモンスター1体を除外し、フィールドの表側表示モンスター1体の攻撃力をターン終了時まで、この効果を発動するために除外したモンスターの攻撃力分ダウンさせます。 私は墓地のM・HERO アシッドを除外しスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンの攻撃力を2800ポイントダウンさせます。」

フィールドのM・HERO 光牙の体が光輝きフィールドを照らす。

そして、その光を受けたスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンは力が抜けるかのように地面へと着地する。

スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン

攻撃力 5000→2200

「では、バトルステップ。 M・HERO 光牙でスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンに攻撃をおこないます。」

フィールドの光牙の両腕に付いている鋭い剣が光を纏いその形を巨大な光の剣へ変

わり、スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンを斬り裂こうと剣を震う。

「そう簡単には、俺のスカーレッドは破壊せん！　スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンの効果を発動！　相手モンスターの攻撃宣言時、このカードをゲームから除外し、相手モンスター1体の攻撃を無効にする事がする！そして、エンドフェイズ時、この効果で除外したこのカードを特殊召喚する！」

「ですが、私のフィールドにはまだモンスターが存在しています。私はM・HERO
ダーク　ロウでジャック様にダイレクトアタックを行います。」

フィールドのM・HERO　ダーク　ロウが吼える。
大地を蹴り、その身に黒いオーラを発しながら攻撃を仕掛ける。

「（2体の攻撃を受ければ俺の負けか・・・）だが、俺はまだ負けん！　俺は手札からバトルフェイダーの効果を発動！　相手モンスターの直接攻撃宣言時に発動し、このカードを手札から特殊召喚し、バトルフェイズを終了する！」

手札　1→0

「届きませんでしたか、しかし、スカーレッドの効果を更に解つただけでも収穫は有りま

した。私はこれでターンを終了します。」

「この瞬間！除外されていたスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンをフィールドに攻撃表示で特殊召喚をする！」

フィールドの空に炎が現れ、炎が集まり炎が弾けるとそこには真紅のドラゴンが現れる。

シド

L P 3 1 0 0

手札 2

フィールド 3

M · HERO ダーク 口ウ

M · HERO カミカゼ

M · H

E R O 光牙

第九話

偽ジャック

L P 3 0 0 0

手札 0

フィールド 2 スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン

バトルフェダー

魔法・罠 0

奴のフィールドには、三体の M・H E R O がいる攻撃制限、ドロー妨害に攻撃力のダメージか、このターン奴は墓地の E・H E R O ノヴァマスターを除外し俺のスカーレッドの攻撃力を2600下げるのだろう。

攻撃力が下がり、2400になつてしまつては相討ちしか出来ない。

このドローカードによつてこのデュエルの流れが決まる。

「俺のターン！ ドロー！」

手札 0 → 1

このカードは？

「ふつ、シド貴様は占いを信じるか。」

「占いですか？（占いか、俺には信じる余裕も時間も無かつたものだな。） いいえ、私はそう言つた物には余り。」

「そうか、まあ俺も他人が決めた物に従うのは気にくはないが。 今日は貴様の仕事が終えるまで時間が合つたからな、夕食の支度やデツキの調整等で時間を消費したがそれでも時間が余つてしまつた。」

まあ 他にも掃除や洗濯、庭の手入れ等していたがな。

「それで、俺は時間を潰す為にテレビを着けた。 その時にカード占いの番組がやつていてな、『キングなあなたは、今日はこのカードを入れるとラッキーなのさゝ』と言つてな、キングと言われてはこの俺が黙つているわけには行くまい。 そして俺はそのカードをデツキに入れた。」

「成る程、ジャツク様はそのカードを引いたわけですね。」

「そう言う事だ。 そして、この勝負を勝利へと導くカード、それがこれだ！ 俺はバルフエダーをリリースし、サルベージ・ウォリアーを攻撃表示で召喚！」

フィールドのバトルフェイターが光の粒子になり消えると、変わりに背中の左右にフックが着いたチエーンを持つ青い肌の巨漢があらわれた。

サルベージ・ウォリアー 水

☆5

【戦士族・効果】

攻1900

守1600

このカードがアドバンス召喚に成功した時、手札または自分の墓地からチューナー1体を特殊召喚する事ができる。

手札 1→0

フィールド 2→3

「サルベージ・ウォリアーの効果を発動！ アドバンス召喚に成功した時、手札または自分の墓地からチューナー1体を特殊召喚する！ 俺は墓地からダーク・リゾネーターを攻撃表示で特殊召喚！」

フィールドのサルベージ・ウォリアーが、地面へとフック付きのチエーンを投げると水を入れたかの様に抵抗も無く地面へと潜つていき、数秒後。

勢いよく、地面からチエーンを引き抜くと角の付いた兜を被り音叉を持つた悪魔がフックに引っ掛けつっていた。

「そして俺は、レベル5サルベージ・ウォリアーにレベル3ダーク・リゾネーターをチューニング！」

フィールドのサルベージ・ウォリアーがフツクに引っ掛けかっていたダーク・リゾネーターを空へと投げると緑色の三つの列なつたリングへと変わり、そのリングの中へとサルベージ・ウォリアーが飛び込んでいく。

「シンクロ召喚！ 現れろ！ 魔王龍 ベエルゼ！」

三つのリングを貫く様に、光の柱が現れ光が消えると其処には。

赤黒い色をし、体には蠅を思わせる顔があり背中から2つのドラゴンの頭が伸びた禍々しいドラゴンが現れた。

魔王龍 ベエルゼ 閻

☆8

【ドラゴン族・シンクロ／効果】

攻3000

守3000

闇属性チユーナー+チユーナー以外のモンスター1体以上

このカードは戦闘及びカードの効果では破壊されない。

また、このカードの戦闘または相手のカードの効果によつて自分がダメージを受けた時に発動する。

このカードの攻撃力は、そのダメージの数値分アップする。

「（何だ、あのカードは・・・）ですが、ジャック様M・HERO ダーク 口ウの効果によりサルベージ・ウォリアーとダーク・リゾネーターは墓地へは送られず除外されます。」

フィールド 3→2

「これで俺のスカーレッドの攻撃力は4500になつたが問題は無い！ バトルだ！」

「私はM・HERO 光牙の効果を発動します。

私は墓地のE・HERO ノヴァマスターを除外しスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンの攻撃力を2600ポイントダウンさせます。」

スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン

4500→1900

「魔王龍 ベエルゼドM・HERO ダーク 口ウに攻撃！」

ベエルゼの持つ2つのドラゴンの顔から禍々しい破壊の炎が放たれ、ダーク 口ウを
フィールドから消し去った。

シド

LP 3100→2500

フィールド 3→2

「ターンエンドだ。」

「(魔王龍 ベエルゼ攻撃力3000だが効果は解らないか。) 私のターン、ドロー。」
手札 2→3

「(ドローしたのは、モンスターカードか・・・運が無いなだが)
私は手札からE・HERO エアーマンを攻撃表示で召喚します。」

フィールドに三角形の翼を持つ上半身が青、下半身が白のHEROが現れた。

「E・HERO エアーマンの効果を発動、デツキから「HERO」と名の付いたモンスター1体を手札に加えます、私はデツキからE・HERO キヤプテン・ゴールドを手札に加えます。」

キヤプテン・ゴールドかなら、あのフィールド魔法を手札に加えるのだろうな。

「私は、手札のE·HERO キヤプテン・ゴールドを墓地へ捨て、私はデツキから「摩天楼－スカイスクリイパー」を1枚を手札に加えます。」

手札 3↓2↓3

フィールド 2↓3

「そして、私は手札からフィールド魔法、摩天楼スカイ・クレー。パーを発動します。」

フィールドに次々と高層ビルが現れ、HERO達がビルの上へいつの間にか移動していた。

摩天楼 スカイスクリイパー 魔

「フィールド」

「E·HERO」と名のつくモンスターが攻撃する時、攻撃モンスターの攻撃力が攻撃対象モンスターの攻撃力よりも低い場合、攻撃モンスターの攻撃力はダメージ計算時のみ1000ポイントアップする。

手札 3↓2

フィールド魔法 1

「私は、M·HERO 光牙の効果を発動。 私は墓地のM·HERO

ダーク 口ウを

除外しその攻撃力2400ポイン、スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンの攻撃力をダウンさせます。」

フィールドの光牙の体が光輝き、フィールドを照らし出しスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンが力が抜ける様に地面へと着地する。

スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン

攻撃力 4500↓2100

「では、バトルステップ。私はE・HERO エアーマンでスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンに攻撃をおこないます。」

フィールドの高層ビルから飛び上がり、体を高速で回転させまるでドリルの様に此方目掛け攻撃を繰り出す。

「（成る程、エアーマンの攻撃力は現在1800だが、フィールド魔法の効果で1000アップし2800となれば俺のスカーレッドは破壊されるか）だが、やらせん！ 俺はスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンの効果を発動！ このカードを除外し相手モンスターの攻撃を無効にする！」

フィールドのスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンの体が炎へと変わりエアーマンの攻撃をすり抜ける。

「私は、更にM・HERO 光牙で魔王龍 ベエルゼに攻撃します。」

フィールドの高層ビルからM・HERO 光牙が力強くビルを蹴り空を翔ぶ。空中で、その体を輝かせながら攻撃を仕掛ける。

それに対し、魔王の名を持つ龍は2つのドラゴンの顔から禍々しい炎を吐き、迎え撃つ。

光輝く光牙に2つの炎が激突する、だが、光牙の輝きが増すと炎を打ち消し両腕の剣が巨大な光の剣へと変わり

次の瞬間―――

魔王龍 ベエルゼを光の剣が両断する。

偽ジャック

LP30000→2500

「（魔王龍 ベエルゼ 名前と見かけ倒しだけのモンスターだつたのか？ まあいい、この攻撃で俺の勝ちだ） 私は、M・HERO カミカゼでジャック様にダイレクト…！」

何も存在しないはずの、偽ジャックのフィールドに禍々しいまでのオーラが発生していた。

「（何だ、奴のフィールドは…）」

「魔王龍 ベエルゼは戦闘及びカードの効果では破壊されない、また、このカードの戦闘

または相手のカードの効果によつて自分がダメージを受けた時に発動する。このカードの攻撃力は、そのダメージの数値分アップする、そして俺の魔王龍 ベエルゼの攻撃力は3500となる。』

禍々しいオーラがその姿を変え、魔王の名を持つ龍へと姿をかえる。

魔王龍 ベエルゼ

攻撃力 30000→3500

「なつ!?（戦闘及びカードの効果では破壊されないと、それに攻撃力をダメージの数値分アップするだと、インチキ効果も大概にしろよな!）・・・私はターンを終了します。』

手札 3

フィールド 3

フィールド魔法 1

「俺のターン！ ドロー！」

手札 0→1

「（良いカードがドロー出来たな。） 俺はこのままバトルだ！

「（チツ、どちらにせよ破壊されるか） 私はM・H E R O 光牙の効果を発動、墓地から

E・HERO アナザー・ネオスを除外し、スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンの攻撃力を
を1900ポイントダウンさせます。」

スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン

4500→2600

「魔王龍 ベエルゼでM・HERO 光牙を攻撃！」

フィールドのベエルゼから禍々しいオーラが発生し、光牙目掛け地面から次から次へ
と黒い炎が立ち昇り

光牙を黒い炎が飲みこみ、消し去る

フィールド 3→2

「俺の魔王龍 ベエルゼは戦闘では破壊されないため光牙のみ破壊する。俺はカードを
一枚伏せ、ターンエンドだ。」

手札 1→0

魔法・罠 0→1

「私のターン、ドロー」

手札 2→3

「融合か、俺の手札とフィールドにはエアーマン、ワイルドマン、レディ・オブ・ファ

イアか、守備表示にすればターンを乗り越えられるが……）私は手札から融合を発動、私はフィールドのE・HERO エアーマンと手札のE・HERO ワイルドマンで融合をおこないます。」

融合 魔

【通常】

自分の手札・フィールドから、融合モンスター1カードによつて決められた融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をエクストラデッキから融合召喚する。

フィールドに黒い幻影の様な物が幾つもの発生する

「私は、V・HERO アドレイションを攻撃表示で特殊召喚を致します。」

フィールドの幻影が一つに纏まり其所には

黒い衣装に黒いマスクや黒い鎧を纏つた幻影のHEROが現れた。

V・HERO アドレイション 閻

☆8

【戦士族・融合／効果】攻2800

守2100

「HERO」と名のついたモンスター×2

1ターンに1度、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体と、このカード以外の自分フィールド上に表側表示で存在する

「HERO」と名のついたモンスター1体を選択して発動する。

選択した相手モンスターの攻撃力・守備力はエンドフェイズ時まで、選択した自分のモンスターの攻撃力分ダウンする。

「私はV・HERO アドレイションの効果を発動、1ターンに1度、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体と、このカード以外の自分フィールド上に表側表示で存在する「HERO」と名のついたモンスター1体を選択して発動、選択した相手モンスターの攻撃力・守備力はエンドフェイズ時まで、選択した自分のモンスターの攻撃力分ダウンします。私はM・HERO カミカゼを選択し魔王龍 ベエルゼの攻撃力を2700ポイントダウンさせます。」

フィールドのV・HERO アドレイションが無数の黒い幻影を操り魔王龍を黒い幻影が埋め尽くす。

魔王龍 ベエルゼ

3500→800

「更に私は、手札からE・HERO レディ・オブ・ファイアを攻撃表示で召喚します。」
フィールドに白い衣装に、炎を思わせるマークがついたオレンジ髪の女性のHERO
が現れた。

E・HERO レディ・オブ・ファイア 炎

☆4

【炎族・効果】

攻1300
守1000

自分のターンのエンドフェイズ時、自分フィールド上に表側表示で存在する「E・H
ERO」と名のついたモンスターの数×200ポイントダメージを相手ライフに与え
る。

「(レディ・オブ・ファイアか、成る程面白い。)」

「バトルステップ、私はV・HERO アドレイションで魔王龍 ベエルゼに攻撃しま
す。」

フィールドの、V・HERO アドレイションが無数の幻影を生み出し幻影と共に攻
撃を仕掛ける。

偽ジャック

2500→700

「だが、俺の魔王龍 ベエルゼ戦闘では破壊されない更に受けたダメージ分攻撃力を上げる、よってベエルゼの攻撃力は2800になる。」

魔王龍 ベエルゼから黒いオーラが立ち昇りその力が上がつていき雰囲気が変わる。

魔王龍 ベエルゼ

1000→2800

「私はターンを終了します。この時E・HERO レディ・オブ・ファイアの効果が発動、自分のターンのエンドフェイズ時、自分フィールド上に表側表示で存在する「E・HERO」と名のついたモンスターの数×200ポイントダメージを相手ライフに与えます、私のフィールドにはE・HERO レディ・オブ・ファイアの1体存在します。よつてジャック様に200ポイントのダメージを与えます。」

レディ・オブ・ファイアの体から炎が立ち昇り、その炎が偽ジャックを包みこみダメージを与える。

偽ジャック

700→500

「効果ダメージを受けた事で、魔王龍 ベエルゼはその攻撃力を上げる。」

魔王龍 ベエルゼから黒いオーラが発生しパワーが上がる。

魔王龍 ベエルゼ

2800→3000

「そして、V·HERO アドレイションの効果はターン終了時に解除され、魔王龍 ベエルゼの攻撃力はダウンした数値分アップします。」

ベエルゼが声を上げ高らかに吠え

そして、その体により一層黒いオーラが発生する。

魔王龍 ベエルゼ

3000→5700

「残念です、届きませんでしたか。」

「だが、誇れ俺にここまでダメージを与えたのだからな。俺のターン！ ドロー！」

手札 0→1

「さあ、食らうが良い王者の一撃を！ スカーレット・ノヴァ・ドラゴンでE·HERO レディ・オブ・ファイアに攻撃！ バーニング・ソウル！」

フィールドのスカーレット・ノヴァ・ドラゴンが炎を纏いながら空へと飛び上がり、翼、手足、尻尾を折り直線的な形態に変形し炎を纏いながらE·HERO レディ・オ

ブ・ファイアに激突し、跡形もなく消し去った。

シド

L P 2 5 0 0 → 0

L P が 0 になつた事によりソリットビジョンが徐々に消え始める。

「私の敗けですか、残念です。」

「だが、誇れ貴様は強かつたぞ。 シド約束どおり、俺達と共にWRGPに参加してもらうぞ。」

「分かりました。 私の様な物でよろしければ宜しくお願ひします。」

互いのデュエルディスクの動きが止まり、ソリットビジョンが完全に消える。

「所でシド貴様、俺に勝つていたら何を願つていたのだ？」

「？ 私が勝つていたらですか？ 私の願いは、面白そうでしたので私もジャック様のチームに加えて頂こうかと思つておりました。」

「貴様も、元より断る気は無かつたと言う事か。」

「ジャック様、私からも1つ質問宜しいでしょうか？」

「何だ、今の俺は何でも答えてやるぞ。」

「有り難う御座います。あの魔王龍 ベエルゼと言うシンンクロカードは一体何なのでしょうか？ 私は始めて見たのですが。」

「ああ、あのカードがあれは邪神の手下の紅蓮の悪魔とか言う奴が、邪神を倒したら後、数枚のカードに変化したの物だ。」

「（数枚のカード、まだ他にも持つていると言う事か。） そうでしたか、質問に答えて頂き有り難う御座います。」

「では、シド俺達は家に帰るが此が俺達の家の場所だ。後、これが俺の電話番号とアドレスだ何か連絡が有るならかけてこい。」

「分かりました、ジャック様。 私はこれから別件が有るので一足先に帰らせて貰います。」

「ああ、ではな。」

そして、シドは目の前から音もなく一瞬のうちに姿を消し何処かへと移動していた。

「さあ、メンバーは揃つた。 大会が待ち遠しいものだな。」

第十話

シドをチームメンバーにするためのデュエルをし、見事にチームに入れる事に成功しあれから1週間が経っていた。



WRGP開催まで残り2週間程か、チームメンバーは俺、コナミ、シドの3人で出場するが、大会に出場するに当たつて俺は重要な事を忘れていた。

それは――――――

「チームの名前を決めていなかつた事をだ！」

コナミの家のリビングに俺の声が響き渡る

だが、この家の家主である赤い帽子がトレードマークのデュエルバカのコナミはテーブルでデツキを調整していく無反応。

黒い髪に黒い執事服の一流の執事兼デュエリストのシドはトリシユラプリンに合うコーヒーを優雅に煎れている最中で反応はない。

「チーム名だぞ！　チーム名！　優勝する次ぐらいに重要な事ではないか！　何故貴様等は反応が無いのだ！」

そう、大会に出るにあたつてチーム名は重大だ。

キングであるこの俺が作ったチームなのだからなおさら重大だ！

余り印象的で無いのは却下、だからと言つて派手過ぎるのも却下、俺が一人で決めてもよかつたのだが

コナミやシドの意見も聴かなければ、彼奴らもチーム名を考えているかも知れないと想い、チームリーダーらしく聴いてみたのに何故だ！　何故こんなにも反応が無いのだ！

「ジャック様、コーヒーが入りましたので御召し上がり下さい。」

「む、ああ、頂こうか。」

俺の話いや考えがヒートアップするまえに、見計らつたかの様に丁度良いタイミングでコーヒーを出すとは流石だな、シド。

「しかし、シド貴様が淹れたコーヒーは旨いとしか言えないな、無駄に言葉で飾る氣にも

ならんほどにな。」

「畏れ入ります。」

「ここまで旨いコーヒーを淹れられ、デュエルも強く執事としても一流。惜しいものだな、此れでフリーだつたのなら俺が雇っているところなのだが残念ながら、シドは現在他の人間に雇われていると言うから残念だ、非情に・・・」

「ところで、シド貴様はチーム名は何か良い物はあるか?」

「私ですか? 私はこのチームを作つたのはジャック様なのですからジャック様が御決めに為られれば良いかと思うのですが。」

「コナミ貴様は、何かあるか?」

カードを弄つていた腕を止め、此方を向き発言した。

「デュエル出来れば何でもいい。」

何時もだが、話し合いをするとコナミは考えず、シドは俺の発言を優先する。

此れでは話し合いの意味が無いな・・・

「解つていたことだがな、では俺が決めるぞ異存は無いな。」

「(コクリ)」

「はい、私は異存は有りません。」

ふつ、では俺の考え付いたこのキングである俺、そしてチームに相応しい名前をこいつらに披露してやろう！

「では、発表するぞ、俺が決めたチーム名は――――」

「チーム・ザ・キングだ！」

リビングに本日二度目となる、俺の叫び声が響き渡る。

そして、静寂が訪れる

誰も言葉を発しづ、呼吸の音、時計の秒針の動く音、心臓の鼓動すら聞こえるほどリビングは静まり還った――――

『・・・・・（唖然）』

まさに、この俺が率いるに相応しいチーム名だな。

地味すぎず、派手過ぎず、印象的でまさにキングである俺に相応しい名前だ！

「・・・（考える事を放棄、デツキを調整する）」

「・・・流石は、ジャック様素晴らしいチーム名でござりますね。（チツ、こんな事になるなら意見しておくべきだつたか。）」

コナミやシドに一瞬の間が合つたが、あれで有ろう。

俺の考えたチーム名の素晴らしに感動を受けたからに違いない。

けつして、チーム名がアレ過ぎて固まっていたわけでは無いと信じているぞ！



そして俺がチームの名前を決めてから数日後、とある事件が起こつた。

俺が何時もの様に、コナミに買い出しをさせてているトリシューラプリンを冷蔵庫から

取り出し食べていた時だ。

「む？（なんだ、このトリシユーラプリンは何時ものよりも格段に美味しいだと!?）」

そう、俺が食べたトリシユーラプリンは何時も食べているよりも美味く感じたのだ。なぜ美味しいのか理由はよくは解らないが俺はそのトリシユーラプリンを食べ続けた。

そう、これが事件の発端だった――――――

俺が、何時もよりも美味しいトリシユーラプリンを食べ続けていた時だった。

コナミやシドがデュエルを終え、リビングに入つて来た時だ
コナミが俺を見て、突然固まつたのだ。

「？　どおかしたのかコナミ突然動きを停めて、俺とのデュエルがしたいのなら、俺がトリシユーラプリンを食べ終えてからにしろ。」

だが、コナミはそんな事じや無いと顔振り、震える指で俺が食べているトリシユーラプリンを指を差した。

「？　このトリシユーラプリンがどおかしたのか？　これなら先程、冷蔵庫から取り出した物だまだ他にも冷蔵庫に入っているから安心しろ。」

だがコナミは突然、俺に詰め寄つて來た。

「おい、どおしたコナミ。　トリシユーラプリンならまだ冷蔵庫にあると言つてゐるだろう。」

俺の言葉を聴いてもまだ、落ち着きを取り戻さないコナミ。
一体何だと言うのだ、俺にはわからん。

「ジャック様、コナミ様が怒られている理由はジャック様がお食べにならされている、その
満足トリシユーラプリンのせいだと。」

コナミが俺に詰め寄つてゐる反対側から、いつの間にか近付いたシドが俺に発言して
いた

「満足トリシユーラプリン？　何だそれは。」

「では説明を、満足トリシユーラプリンとは、トリシユーラプリンとは別に1日、1～3
個限定で販売されている超レア物のスイーツで御座います。」

なるほど、俺はその満足トリシユーラプリンを食べてしまい、そして、コナミはそれ
に対し怒つてゐる訳か・・・
ここで1つ疑問ができた。

「なぜコナミが、入手困難な満足トリシューラプリンを手に入れたのだ？」

疑問だ、まあこいつなら知り合いなど多いだろうし貰ったと言う可能性があるが。

「それはですねジャック様、先日たまたま早く起きたコナミ様が、早く起きた次いでに満足トリシューラプリンを買いに行き、見事に初回で手に入れて來たものです。」

なるほど、先日朝早くからコナミが家を出だのはそう言つた理由が合つたのか・・・
「分かつた、コナミ、不注意とは言え俺がお前の物を食べてしまつたのだ。俺が満足トリシューラプリンを買つて來てやる、だから落ち着け。」

俺の言葉で、ようやく静かになるコナミ。

ふつ、コナミが初回で買えたものだ、なら俺も買えるだろうからな。

「安心しろコナミ、キングである俺は嘘はつかん満足トリシューラプリンは俺が必ず買つて來てやる！」

キングである俺は嘘はつかん！ そして約束は必ず守る！ 何故なら俺がキングだからだ！

「ジャック様・・・よろしいですか？」

「何だ？ シド、そんな小声で？」

「いえ、満足トリシューラプリンは本当に入手が困難な物ですから、コナミ様の様に初回

で手に入れるは難しいかと・・・」

シドが心配するとは、其れほどの物なのか。

「満足トリシリューラプリンを求め毎日数百人の列が出来、一番早く列に並べたからと言つて買える物では無く、整理券を配られその整理券の番号で、その番号が呼ばれば満足トリシリューラプリンを買えるのです。」

ふむ、確かに数百人並び番号がランダムかななか難しそうだが・・・

「この俺の運を舐めるなよ、シド。コナミが初回で行けたのだ、俺もやつてやる。」

「ですが、ジャック様。満足トリシリューラプリンを求め、山に入り修行するもの、死神魂を売るもの、闇の力を手に入れるもの、整理券を書き換えるもの、運命をねじ曲げるものもいると言うのでお気お付け下さい。」

ふつ、なかなか面白そうではないか、そいつらを蹴散らし俺が必ず満足トリシリューラプリンを手に入れる！



そして、翌日、俺は店が開店する五時間前から並ぼうと店を目指し歩いていた。今日は平日、あまりまだ並んでいないだらうと思い店に近付くと――――

其所には、既に百人近くの人数が並んでいた。

その百人近くの列には、不思議な力を持つ者の気配を感じとれる。

一番わかり易い奴は、奴だろう、鎌を持ちロープを着た死神の様な物が背中に張り付いた人間だらうな。

そんな事を考えながら列の最後尾に、並ぶとダンディライオンの格好をした人間に番号が書かれた紙を渡された。

「104か・・・」

開店まで、まだ時間があるな此所で待つとするか何たかだが五時間程度だ、仕込みの掛かる料理だと思えば五時間などあつというまだらう。

五時間後

あれから、時間が経ちもうすぐに店が開店する時間だ。
平日の10時だと、言うのに俺の後ろにはかなりの人数が並んでいる五百人は越えて
いるな。

そして、遂に時間がきたのだろう。

今日の満足トリシユーラプリンの販売個数と番号が発表された。

満足トリシユーラプリン

購入者番号

3

・3

・104
840

どおやらコナミとの約束は、無事にはたてそうだな。
と俺は初めは思つていた、次の瞬間事態は急変する。

俺のいる数十人前の方からだろう

『リ・コントラクト・ユニバース！』

そんな声が聞こえたと思つたら、俺の持つていた整理券がまるで再構築されるかの様に違う番号が書かれた整理券へと変わつていた。

成る程これがシドの言つてた書き換えると言う事か。

「どおやら、俺は甘く見ていた様だな満足トリシユーラプリンを・・・」

番号が104から39に変わつた紙を強く握りしめながら呟く。

「だが、次は必ず俺が手に入れる。」

そう、俺は一人誓いを新たに呟くのだつた。

た
・
・
・
そして、WRGPが始まるまでの間毎日通い続けたがこの日以来当たる事は無かつ

第十一話

WRGPが始まり、俺達チーム・ザ・キングは予選を楽々勝利し本選Aブロックに参加する事になった。

なに？ 予選の描写はどうしたのかだと。

あんな物は、俺が出るまでも無くコナミが一人で片付けてた其だけ解れば十分で有ろう。

決して、俺の出番が来ることを楽しみにしていたのにコナミが全勝してしまい、ライディング・デュエルが出来なかつたから、描写していいわけでは無い！

だが、どおしても知りたいと言うのなら教えてやろう、このキングであるこの俺に感謝するのだな W R G P 予選内容

第一試合

コナミ先攻を取り、手札から「ワン・フォー・ワン」を発動し手札から「レベル・ステイーラ」を捨てデッキから「レベル・ステイーラ」を召喚。

手札からフィールド魔法「死皇帝の陵墓」を発動しライフポイント2000を払い手札から「アルカナフォース XXI The World」を召喚、その後コナミはコイントスをした結果・・・表を出した。

そして、「アルカナフォース XXI The World」のレベルを1つ下げ墓地の「レベル・ステイーラ」を特殊召喚。

まあ、後は解るだろう。この後、起ころうであろう惨劇が。

エンドフェイズに「アルカナフォース XXI The World」の効果が発動し、フィールドの「レベル・ステイーラ」2体を墓地へ送り相手ターンをスキップ相手は何も出来ず、ターンを終了。

次のターン、コナミは「アルカナフォース XXI The World」のレベル

を下げ墓地から「レベル・ステイーラ」を2体特殊召喚。

そして、手札から「冥界の宝札」を発動し

手札から、「The Supremacy Sun」を召喚、「冥界の宝札」の効果が発動し2枚ドロー。

「The Supremacy Sun」のレベルを下げ、墓地から「レベル・ステイラ」を2体特殊召喚。

バトルステップ「アルカナフォースXXITHeworld」と「The Supremacy Sun」で相手ライフを蹴散らし、エンドフェイズ2体のレベル・ステイラを墓地へ送り相手ターンをスキップ。

交代した相手は何も出来ずにターンを終了。

また、コナミターンになり、「TheSupremacySun」のレベルを2つ下げ、墓地から「レベル・ステイーラ」を2体特殊召喚。

バトルステップ、「アルカナフォースXXITHeworld」と「TheSupremacySun」でまたもや、ライフを蹴散らす。

そして、エンドフェイズに2体の「レベル・ステイーラ」を墓地へ送り相手ターンをスキップ。

またもや、交代した相手は何も出来ずにターンを終了。

そして、最後の相手も「アルカナフォースXXITheWorld」と「TheSupremeAcrysun」のレベルを1つずつ下げ、墓地から「レベル・ステイーラ」を特殊召喚。

バトルステップ「アルカナフォースXXITheWorld」と「TheSupremeAcrysun」で攻撃し、相手ライフを蹴散らした・・・

・・・これが所謂、ずっと俺のターンと言う奴なのだろうな。

相手も災難だとしか言えないな、コナミのデッキで数有るコンボの中でも凶悪な物を食らうのだからな。

そのコンボを食らつたせいで相手チームは、デッキから五枚のカードを引きD・ホールでコースを走つただけでWRGP予選が終わつた、食らいたくは無いものだこのコンボ。

数日挟んだ、次の試合もコナミが先鋒を務め相手を散々な目に会わせていたな。

敵のモンスターのコントロールを奪い、アドバンス召喚や、シンクロ召喚
敵フィールドの一掃、魔法・罠の発動を無効や伏せカードの破壊。

そして、コナミは最上級モンスターでひたすら相手を殴つていたな。

◆
Aブロック本選では、俺がデュエル出来ると良いのだがな・・・
コナミを倒しシドを倒すか・・・死に物狂いでデュエルしろ敵チーム、俺がライディ
ングデュエルをするために！

とある場所のとある白い空間に白い格好をした3人がいた。

その内の1人、背丈から言えば青年だろうと思わしき人物は今後の事を考えていた。

明後日のWRGP本選を終えれば、次の戦いは、Bブロックを勝ち抜いたチーム5D.
Sとの決勝のみか・・・

明後日の試合は恐らく、いや確実に俺達が勝つ
だが、それでは俺がジャックのチームに入つて戦つている意味が無くなる
ホセヤルチアーノがいるこの時に上手く事を運ばせなくては・・・

俺が、今後のための事を考えていた時だ。俺よりも大柄で髪を生やした爺、ホセが口を開いた。「プラシドよ、何故お前は勝つてな行動ばかりをとつておるのだ。」

ふん、またホセの説教か、勝つてな行動などかなりの数を仕出かしているからどれの事を指しているのか解らん。

だが、ホセが俺の行動をこの場で指摘してくれるのは有難いな。

そして、ホセの説教を軽く聞き流しながら俺の求める言葉が出て来るの待ち続け
その時は来た――――――

「特にプラシドよ、何故お前はWRGPに出場しているのだ。」

来たか、この言葉を俺は待っていたんだよ。

「ふん、別に構いはしないだろ機皇帝は使用していない。それにサークリットを出現させるために一役買つているのだからな。（主にコナミがな。）」「

上手く、ホセを乗せられるかこれからが問題だな

「サークリットの完成には役にたつてはいるが、それとこれとでは別の問題だ。最終的に、我々がWRGP決勝を戦う予定だつたはず、何故無駄にWRGPに参加をしてい

る。」

「ふつ、そんな事か。 決まっているだろ俺が不動 遊星と戦うためだ。」

「不動 遊星と戦うためだと？ 何故だ、そんな回りくどい事をせずとも我々は決勝戦に5D.sと戦うのだぞ。」

「違うな、俺が戦いたいのは不動 遊星だ！ ニートやカラスと戦いたい訳ではない！」

まあ実際の所は、戦つても良いのだがここは不動 遊星の名前を出した方が其らしいだろう。

「チーム・ニューワールドとして出場した場合、俺は先鋒、不動 遊星は大将だ。 2人抜きをして戦った場合は俺が不利 だからこそ俺は別なチームで参加した、それだけだ。」

「だが、プラシドよ 我々がWRGP決勝戦を行うのは決定事項だ。」

ホセの作戦では、そうなのだろうな歴史を改竄し決勝戦を戦い相手を倒す、シンクロキラーである機皇帝を使い。

そして、サーキットを完全な物とする。

「お前が、幾ら他のチームでデュエルしようと歴史を改竄し決勝では我々チーム・ニュー

ワールドとチーム・5D・sが戦う、無駄な事だ。」

「だが、ホセ。俺が其をさせると思つてゐるのか。」

「ここからは、五分五分の賭けだな。」

「・・・プラシドよ、お前は邪魔をすると言うのか？」

「ああ、邪魔をさせて貰うぞ俺が戦うためにな。 明後日の試合は俺達が勝ち、そのままチーム・5D・sと戦う邪魔はさせん。」

こうは、言つているもののホセとルチアーノが2人係りで動かされると厳しいのだが
な。

だから、無理矢理にでも落とし所を持つてくる。

「俺を従わせたかつたら、デュエルで勝つて従わせろ。 どおせ明後日の試合は勝つ（コ
ナミがな）。 なら、歴史を改竄して明後日の試合はチーム・ニューワールドとチーム・
ザ・キングが戦い勝つた方の意見を通す此で良いだろう。」

我ながら、無理矢理な話しのもつて行き方だな、だが、彼奴が食い付いてくるはずだ。
「プラシドよ、お前は我々と戦うと言うのか。」

「ああ、邪魔をしてくるのなら俺も邪魔をしてやるだが、戦うと言うのなら勝敗に従つてやる。」

「むう・・・」

ホセは今、どちらが計画に支障が無いかを考えている筈だ。

邪魔をされるか、デュエルで勝つかそのどちらを・・・

だが、その時だつた今まで暇そうに話を聞いていた小柄な体形の1人が声を発した。

「良いじやんかホセ。 プラシドは何か知らないけど僕らと戦いたいみたい何だから戦つてやればさー。」

やはり、話しに加わつて来たカルチアーノ。

「そんで持つて、あのチーム・ザ・キングだつけあんな名前のチーム」とプラシドを倒しちゃえば良いじやんか、キヒヤツヒヤツヒヤ!!」

相変わらずの、口調にテンションだるチアーノ、だが、お前が話しに加わってくれるのは此方してはむしろ好都合だ。

「だそうだ、ホセ。 俺も貴様の邪魔をするよりもデュエルの方がやり易い、多数決だとするならデュエルに二票だな。」

「てか、やっぱプラシド戦うき満々なんじやんかよー」

「言つただろう邪魔をするよりも楽だとな。」

「楽ねー、まあいいや、今は何企んでるか解らないけどさー、ぶ潰しちゃえば良いことだしさキヒヤツヒヤツヒヤ!!」

さて、ルチアーノは乗ってきたがホセはどうでて来るかだな

俺の邪魔が来るのを解つて決勝に行くか、機皇帝を使い勝ちに来るか・・・

「・・・良かろう、プラシドよお前の意見に乗つてやろう。 明後日の試合はチーム・ニユーワールドとチーム・ザ・キングでBブロック最後の戦いを行うとしよう。」

乗つてきたかこれで、俺の目標の1つは達成できたな

「ただし、プラシドよ貴様の持つ機皇帝ワイゼルのデツキは渡して貰うぞ。」

俺のデツキを渡せか、俺の変わりに先鋒に持たせる気だな ゴースト辺りだろ持たせ
るとしたら

まあ良いだろう、元々使つてはいないのだからな。

「わかった。受け取れホセ。」

ホセへと投げつけられたデツキはばらける事なく、纏まつたまた空中を飛びホセが受

◆
け止める。

「・・・中身を確認したが本物の様だなだな。」

「ふん、今この場で偽物を渡し何になる。」

「では、ルチアーノよ明後日は我々チーム・ニューワールドとプラシドがいるチーム・ザ・キングが戦うが異論は無いな。」

「無いよそんなの、様はプラシドをぶ潰しちやつて良いって事だろキヒヤツヒヤツヒヤ

!!

その後、ホセが勝った時の事や敗けた時の事、今後の方針等を話し俺達の話し合いは終了した。

「後は、ジャックとの交渉だけか・・・」

明後日は対にBブロック最後の試合か、これに勝てば決勝でチーム5D・sとの戦いが出来る。

此所まで俺達は危うい所など無い程順調に勝ち進んで来たが、1つだけ不満がある・・・

それは――――

俺の出番が無いことだ！

その理由は単純だ、コナミが勝ちすぎている事だ！　予選と言い、この本選と言いほとんどがコナミが戦っている、そして勝っている。

コナミを先鋒にしてしまったのも有るが、ライフが尽き交代したのは、本選で一度だけだ。

交代したらしたで、シドのHEROデッキが猛威を振るい俺の出番を悉く奪つていく・・・

下手をすると、俺は決勝戦での出番も危うい・・・

俺がWRGPの出番を真剣に考えていた時だ

「ジャック様、少しお話しが有ります。」

シドに声をかけられた、その瞳には何かしらの決意が見えた。

「何だシドかどおした。」

「突然のお話しで申し訳無いのですが、明後日の試合 私を大将に交代させていたたげ
ないでしょうか。」

何を言うのかと思つたら、順番の交代の要求か。

明後日の試合は俺達ならば勝つ事が出来る、だがシドは俺との順番を交代を求めて來
るか・・・

何かしら明後日の試合は何かがおこると言う事か、それともただシドが俺を試合に出
そと順番を変えようとしているのか。

だが、シドの目を見れば解る事だが何かしらの決意をした目

つまり、明後日の試合は何かがおこる可能性がある。

そして、シドはその何かを知つて いるだからこそ俺との交代を求めて來た

俺を前に出して來たと言う事は、シドは自分が戦う前に敵を倒したいのだろう、その

理由は良くは解らないが。

本来なら俺は、この要求を聞きはしない何故ならキングだから大将は譲らん！
だが・・・この要求は俺にとつてのチャンスでもある、そう

敵チームと俺が戦えるチャンスが出来るのだからな！

「ふつ、良かろうシド明後日の試合俺と順番を交代してやろう！」

これで、WRGP初のデュエルが出来る！

・・・まあ、コナミが勝ち続けなければの話だがな・・・

「ジャック様有難う御座います。（何故かは知らんが、上手い具合に話しが進んだな
ジャックなら、もつと、こう、ふざけるな！ とか言いそうなのだからな・・まあいい）」
「だが、シド一つ言つておくぞ、貴様が何を知り何を企んでいるが知らんが、俺がデュエ
ルする以上大将戦までは回さん。 そしてキングである俺のデュエルを大将としてそ
の目に焼き付けていろ。」

「解りましたジャック様、私はデュエルをこの目にしかと見届け焼き付けます。」

「それでいい、だから貴様は安心して見ていろ、どの様な敵だろうと俺が勝つところをな
！」

明後日の試合に何が起ころうと勝つただ其れだけだ。

第十二話

あれから時間が経ち俺達はAブロツク最後の試合、チーム・ブラツクバロンとの試合・・・だつたのだが、どおいう訳かチーム・ニューワールドとか言うチームに戦う相手が替わっていた。

「まあ、そんな事は兎も角・・・コナミ取り合えず、勝つてこい。」

出来れば、俺の出番を作れとは口が裂けても言えない・・・



今日は、Bブロツク最後の試合、対戦チームが代わっていたがデュエル出来るのなら別に問題は無い。

デツキ、D・ホイール共に調整は完璧、問題ない・・・早くデュエルがしたい。
チーム・ニューワールドの先鋒は白い衣装を着た顔に∞の仮面を着けた銀髪

「ちつ、俺の最初の相手は貴様の様な虫けらが相手か、まあいいこいつを倒せばオリジナ
ルと戦えるのだからな。」

どおやら口が悪い様だ

お互い、D・ホイールをスタート位置へと動かしスタートを待つ。
実況や観客の声が五月蠅いぐらい聴こえてくる。

そして、スタートランプが点灯しスタートを告げるブザーが鳴り響く
それと同時に互いにD・ホイールを一気に最高時速へと加速させる
第一コーナーを先に取り先攻を取るために。

どおやら、敵の・・・パシ・・・リドだつけ？ 名前が思い出せない。
相手のD・ホイールも相当調整や機体性能が良いらしく、今の所接戦・・・いや、此
方の方が少し速い

コーナーを取るのは厳しいか・・・
その時だ、行きなり横から強い衝撃を受けた。

走りの途中で不自然な衝撃、そう横を並走しているパシリド？ からタックルをされた。

それも結構な威力だった。

第一コーナーを取る前にこんな激しいタックルつてありだつたけ？

「安心しろ！ 此ぐらいの行為では反則にならない様にルールは書き換えたからな！」

第一コーナーは貰つたぞ！」

タックルのせいで、此方の動きが少し遅くなつた事で第一コーナーを先に曲がられ先攻を取られた。

「先攻は頂いた！ 俺の相手が虫けらだろうと俺は容赦せん！ オリジナルを倒す前に貴様を潰す！」

そう言うと、コーナーで少し減速したD・ホイールの速度を加速させコースを走りだし

そして――――――

「見せてやる、これが俺の真の姿だ！」

色々と物理法則にケンカを売るかの様に、D・ホイールから空中へと跳ぶ

この時、空気抵抗とかはどおしたと言いたいぐらい高速で走るD・ホイールと同じに空中を同じに速度で跳んでいた。

その時が訪れた、パシリード？　が空中を飛びながら下半身を変型させ、パシリード？　が変型させた下半身を下を走っているD・ホイールの先端に合体した・・・ケンタウルス？

「これが俺の真の姿だ！　この姿になつたからには貴様を完全に潰す！」

少し疑問なのだが、D・ホイールと合体したらデュエルが強くなるのだろうか？　デュエルにはあまりに関係無いと思えるな・・・

「いくぞ俺のターン、ドロー」

偽プラシド

LP 4000

手札 5→6

先攻は取られた、まあ何とかなるだろう。

「俺は手札からワイズコアを攻撃表示で召喚する。」

フィールドに、全体を白い色をし赤色のラインが入った卵型のモンスターが現れ、上下に卵が開き黄金の内側と中心部に小さな光る球体現れる

ワイズ・コア 閻

☆1

【機械族・効果】

| | |
|---|---|
| 攻 | 0 |
| 守 | 0 |

このカードは1ターンに1度だけ、戦闘では破壊されない。

このカードがカードの効果によつて破壊された時、自分フィールド上に存在するモンスターを全て破壊する。

その後、自分のデッキ・手札・墓地から「機皇帝ワイゼル∞」「ワイゼルT」「ワイゼルA」「ワイゼルG」「ワイゼルC」をそれぞれ1体特殊召喚する。

手札 6→5

フィールド 0→1

「俺は、手札からカオス・ブラストを発動。俺は自分フィールドのワイズ・コアを破壊

俺は自分フィールドのワイズ・コアを破壊

する!』

カオス・ブラスト 魔

【通常】

自分のデツキからレベル1機械族モンスター3体を墓地へ送つて発動する。

フィールド上に表側表示で存在するレベル4以下のモンスター1体を選択して破壊する。

手札 5↓4

フィールド 1↓0

フィールドの、ワイズ・コアがカオス・ブラストで発動した黒い竜巻の様な物で原型が無くなる程、バラバラに破壊される。

「ワイズ・コアがカードの効果で破壊されたことにより、自分フィールド上に存在するモンスターを全て破壊する、その後、自分のデツキ・手札・墓地から「機皇帝ワイゼル∞」「ワイゼルT」「ワイゼルA」「ワイゼルG」「ワイゼルC」をそれぞれ1体特殊召喚する!」

墓地に三枚送り、デツキから五枚、一気に八枚のデツキ圧縮

そして、フィールドに5体のモンスターを特殊召喚か・・・アドバンス召喚に便利そうだな。

「俺はデツキから、機皇帝ワイゼル∞を攻撃表示で特殊召喚」

フィールドに∞のマークを持つ白い色の楕円形の機械のモンスターが現れた

機皇帝ワイゼル∞ 閩

☆1

【機械族・効果】

| | |
|---|---|
| 攻 | 0 |
| 守 | 0 |

このカードの攻撃力・守備力は、このカード以外の自分フィールド上に表側表示で存在する「ワイゼル」・「グランエル」・「スキエル」と名のついたモンスターの攻撃力分アップする。

このカードは相手のカードの効果の対象にならない。

1ターンに1度、相手フィールド上に表側表示で存在するシンクロモンスターを装備カード扱いとしてこのカードに1体のみ装備することができる。

このカードの攻撃力は、この効果で装備したモンスターの攻撃力分アップする。

「機皇帝」と名のついたモンスターは自分フィールド上に1体しか表側表示で存在できない。

「更にワイゼルT」

フィールドに、白い色の装甲しコブラを短くした様な機械のモンスターが現れた

ワイゼルT 閻

☆1

【機械族・効果】

攻 500

守 0 フィールド上に「機皇帝」と名のついたモンスターが表側表示で存在しない場合、このカードを破壊する。

「ワイゼルA」

フィールドに、白い装甲の鋭い楕円形の形をし刃が付いた機械のモンスターが現れた

ワイゼルA 閻

☆1

【機械族・効果】

守 0
攻 1200

フィールド上に「機皇帝」と名のついたモンスターが表側表示で存在しない場合、このカードを破壊する。

「ワイゼルG」

フィールドに、てんとう虫を思わせる白い装甲の機械のモンスターが現れた。

「ワイゼルG 閻

☆1

【機械族・効果】

攻 0

守 1 2 0 0

フィールド上に「機皇帝」と名のついたモンスターが表側表示で存在しない場合、このカードを破壊する。

自分フィールド上に存在するモンスターが攻撃対象に選択された時、このカードに攻撃対象を変更する事ができる。

「ワイゼルC」

フィールドに、白い装甲をし鳥をモチーフにした様な機械のモンスターが現れた

「ワイゼルC 閻

☆1

【機械族・効果】

攻 800
守 600

フィールド上に「機皇帝」と名のついたモンスターが表側表示で存在しない場合、このカードを破壊する。

このカードは相手のカードの効果では破壊されない。

フィールドに五体のレベル1モンスターを特殊召喚か・・・でも攻撃力は合計しても2500、効果は解らないけど。

「俺の機皇帝ワイゼルを唯のレベル1のモンスターだと思つたら大間違いだ！見せてやる機皇帝の真の姿を！ 合体しろ機皇帝ワイゼル∞！」

フィールドの、五体の機体のモンスターが∞のマークを持つ機体を中心には組み合つていく。

ワイゼルGが変型し右腕になり

ワイゼルAが変型し左腕になり

ワイゼルCが変型し下半身になりワイゼルTが頭部部分になり

巨大な白い装甲のロボットへと変わる

フィールド 0→5

「機皇帝は唯のモンスターではない5つのパーティからなるモンスターだ！ 更にフィールドのワイゼルAし手札からワイゼルA3を攻撃表示で特殊召喚」

フィールドの機皇帝ワイゼルAの左腕となっていたワイゼルAが切り離され、緑色をしたエネルギーを発するとその姿を白鳥をモチーフにしたかの様な姿へとかわり、更にその姿を変型させ左腕となり合体する。

ワイゼルA3 閻

☆3

【機械族・効果】

攻1600

守 0

このカードは自分フィールド上に存在する「ワイゼルA」1体をリリースし、手札から特殊召喚する事ができる。

フィールド上に「機皇帝」と名のついたモンスターが表側表示で存在しない場合、このカードを破壊する。

自分フィールド上に存在する「機皇帝」と名のついたモンスターが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦

闘ダメージを与える。

手札 4↓3

「ワイゼルGをリリースし、手札からワイゼルG3を守備表示で特殊召喚」

フィールドの、右腕をしていたワイゼルGが切り離され緑色のエネルギーを発するとその姿をかえ、カタツムリをモチーフにした様な姿へとかわると、直ぐに変型し右腕となる合体する。

ワイゼルG3

☆3

【機械族・効果】

攻 0

守 2000

このカードは自分フィールド上に存在する「ワイゼルG」1体をリリースし、手札から特殊召喚する事ができる。

フィールド上に「機皇帝」と名のついたモンスターが表側表示で存在しない場合、このカードを破壊する。

自分フィールド上に存在するモンスターが攻撃対象に選択された時、このカードに攻

撃対象を変更する事ができる。

このカードは1ターンに1度だけ戦闘では破壊されない。

手札 3→2

「ワイゼルTをリリースし、手札からワイゼルT3を攻撃表示で特殊召喚。」

フィールドの、ワイゼルTが切り離され緑色のエネルギーを発すると、その姿をかえ兎に小さな羽をつけたかの様な姿へとかわり、頭部へと合体する

ワイゼルT3

☆3

【機械族・効果】

攻 600
守 0

このカードは自分フィールド上に存在する「ワイゼルT」1体をリリースし、手札から特殊召喚する事ができる。

フィールド上に「機皇帝」と名のついたモンスターが表側表示で存在しない場合、このカードを破壊する。

1ターンに1度、相手の魔法・罠カードの発動を無効にし破壊する事ができる。

「フィールドに、脚と胴体以外のパーツが強化され存在感が更に増した巨大なロボットが現れた。

「ついでだ、手札から永続魔法 一族の結束を発動。俺の墓地には機械族だけ、俺のフィールドのモンスター全ては800ポイント攻撃力をアップだ！」

一族の結束 魔†

【永続】

自分の墓地の全てのモンスターの元々の種族が同じ場合、自分フィールドのその種族のモンスターの攻撃力は800アップする。

手札
1↓0

機皇帝ワイゼル∞ 0↓800↓70000

ワイゼルT3 600↓1400

ワイゼルA3 1600↓2400

ワイゼルG3 0↓800

ワイゼルC 800↓1600

「そして、機皇帝ワイゼル∞の攻撃力・守備力は、このカード以外の自分フィールド上に表側表示で存在する「ワイゼル」・「グランエル」・「スキエル」と名のついたモンスター

の攻撃力分アップする！ 更に一族の結束と合わせ俺のワイゼルの攻撃力・守備力は7000となる！」

フィールドの合体した機皇帝ワイゼル∞の全身に、強大なエネルギーの様な物を纏いエネルギーを辺り一面に撒き散らす。

「ハハハハ、もはや俺のワイゼルを倒せる者などいない！ どおせ貴様は俺に倒されるのだから、教えてやる。 ワイゼルA3の効果は貫通ダメージを与え、ワイゼルG3は攻撃対象をこのモンスターにかえ更に1ターンに1度戦闘では破壊されず、ワイゼルT3は相手の魔法・罠を1だけ無効にする！」

効果教えちゃつていいの？ それについてもワイゼルCを言わなかつたつて事は、効果が無いとみていいのかな？

まあ、確かに少し厄介そうかな。

「最早貴様ごとき虫けらには、勝ち目は無い！ 俺はターンエンドだ。」

偽プラシド

LP 4000

| | |
|--------|-----------------------|
| 手札 | 0 |
| フィールド | |
| 機皇帝 | |
| ワイゼル | |
| ワイゼル T | 3 |
| ワイゼル A | 3 |
| ワイゼル G | 3 |
| ワイゼル C | |
| 一族の結束 | 1 4 0 0 / |
| | 8 0 0 0 / |
| | 2 4 0 0 / |
| | 1 4 0 0 / |
| | 7 0 0 0 / |
| | 0 0 0 0 / |
| | 0 0 0 0 / |
| | 0 0 0 0 / |
| | 2 6 0 0 0 |

第十三話

コナミ

L P 4 0 0 0

手札 5

フィールド 0

魔法・罠 0

さてと、自分のターンになつたがどうした物か。

あのパシリード？ さんが機皇帝ワイゼル∞の効果を言つてくれたから大体わかつた
から大分楽になつたけど、またパシリード？ さんのターンになつたら厄介そうだな、う
ん。

まあ、このターンで倒せば問題ないか。

「ドロー」

手札 5 → 6

確かに、魔法・罠を一回無効化されるとアドバンス召喚の材料を揃えるのは手間取る

けど、そう言つた対策をしてない訳じやない。

「手札からカードを一枚捨てて、手札からTHE トリツキーを攻撃表示で特殊召喚。」
フィールドに、白と黒の衣装を着た頭と胸に大きな赤いハテナマークをつけ、背中にマントつけたモンスターが現れた。

THE トリツキー 風

☆5

【魔法使い族・効果】

攻2000

守1200

このカードは手札を1枚捨てて、手札から特殊召喚できる。

手札 6→4

フィールド 0→1

「THE トリツキーの効果で墓地へ捨てたレベル・ステイーラを、THE トリツキーのレベルを1つ下げ攻撃表示で特殊召喚。」

フィールドに、背中に大きな星マークがある赤いてんとう虫が現れた。

フィールド 1→2

「ふん、虫けらの分際で足搔くか。 だが、貴様がどんなモンスターを出そうが俺のワイ

ゼルに勝つことなど不可能だ！」

うん、まあ普通のモンスターは一回しか攻撃出来ないから、ワイゼルG3に阻まれるんだろうな

だつたら複数回攻撃出来るモンスターを出せば問題ない。

「THE トリックキーとレベル・ステイーラをリリース、手札から究極恐獣を攻撃表示で召喚。」

フィールドに、黒い鎧の様な物を纏い黒い色の巨大な恐竜が現れた。

究極恐獣 地

☆8

【恐竜族・効果】

攻3000
守2200

自分のバトルフェイズ開始時にこのカードがフィールド上に表側表示で存在する場合、このカードから攻撃を行い、相手フィールド上に存在する全てのモンスターに1回ずつ続けて攻撃しなければならない。

「究極恐獣・・・だと!?」

こいつだつたら一回防がれも大丈夫、纏めて叩き潰せる。

「バトル、究極恐獣でワイゼルG3に攻撃。」

「くつ、ワイゼルG3の効果を発動、このカードは1ターンに1度だけ戦闘では破壊されない。」

フィールドの究極恐獣が合体した機皇帝へと攻撃を仕掛けるべく地面を踏み締め動き出す。

そして、大きく口を開き機皇帝の右腕ワイゼルG3へと噛み砕こうと襲いかかるが、ワイゼルG3からエネルギーのシールドが発生し噛み砕攻撃を防いだ。

「究極恐獣で、ワイゼルA3に攻撃。」

素早くその巨体を動かし、勢いの突いた尻尾で機皇帝の左腕ワイゼルA3を破壊する。

「ぐつ」

偽プラシド

LP 40000→3400

フィールド 5→4

何故かは解らないが、ワイゼルA3を破壊してダメージ与えたら実際にパシリド？
さんにも何故かダメージを受けている様な気がする・・・

まあいいか。

「究極恐獸でワイゼルT3に攻撃」

究極恐獸が大きく口を開き、今度は防がれることなく機皇帝の頭部ワイゼルT3を咬み千切り破壊する

「ぐううつ」

偽プラシド

LP3400→1800

フィールド 4→3

「究極恐獸でワイゼルCに攻撃」

頭部と左腕を無くした機皇帝の脚を咬み力の限りまるで玩具の様に振り回し、上半身と下半身が振り回された勢いで引き千切られる。

「ぐああああ」

偽プラシド

LP1800→200

フィールド 3→2

「究極恐獸で機皇帝ワイゼル∞に攻撃」

究極恐獸の口が開き機皇帝を破壊するべくエネルギーの様な物が集まり、右腕と胴体

だけになつた機皇帝に対し攻撃を行う。

「馬鹿な！ こんな虫けら事きにこの俺が！」

最大限まで溜まつたエネルギーが解放され、巨大な光線となり機皇帝ワイゼル∞を飲み込み跡形もなく破壊する。

そして、フィールドの機皇帝ワイゼル∞が破壊された事により残つていた右腕ワイゼルG3はフィールドに存在出来なくなり自壊した。

「くそおおおおおお！」

偽プラシド

LP 200→0

フィールド 2→0

ミッショングンプリートつと。 後は手札のカードを伏せるぐらいしかやることが無くなつてしまつた。

えへと、次の対戦相手は・・・

ルチ・・・ルチアロー？ んだけ？

何だろう・・・嫌な予感がするから取り合はず手札のカードをふせれるだけ伏せとこ
う。

コナミ

LP 4000

手札 3→1

フィールド 1 究極恐獸 3000／2200

魔法・罠 2



◆ チーム・ニューワールドピット内

「ああ、もう何やつてんだよ、あいつ。全然ダメじゃんかよー」

やつぱ、面白がつてプラシドみたな性格に変えなければよかつよ。

「所詮やつは、数合わせだ其ほど期待はしていない。」

まあ、そう言われればそうだけどさーもうちよい戦い方有るんじゃないの？

あれで

「見ろルチアーノよ奴が帰つて来るぞ、準備をしておけ。」

お、本当にセモンが項垂ながら帰つてきたよ。

冷やかしてやろケヤヒヤヒヤヒヤ！

「くそ、この俺があんな虫けら事きに・・・くそつ!!」

うわーまだ何かぐちぐち言つてるよこいつ・・・
てかさつさとステッカー渡せよニセモン。

「おい、ニセモンさつさとステッカー渡してとつとと代われよ負け犬！」
「負け犬だと！ 奴がたまたまあんなカードを出したから敗けただけだ！ あんなカ一
ドが来なれば俺が勝つていた！」

おおしこれが負け犬の遠吠えてやつかー初めて聞いたよキヒヤツヒヤツヒヤ!!

「そんなのどうでも良いよ、てかお前煩いよもう黙つてろよ、お前さ〜」

ルチアーノの言葉の後、偽プラシドはまるで今までの感情の高ぶりが嘘の様に、無表
情になり黙りこんだ。

「じゃ、さつさとステッカー渡して下がつてろよお前。」「了解。」

先程とは違ひ無機質な声で返事をし、D・ホールからステッカーを剥がしルチアー
ノへと差し出した。

「さあ、てと、さつさと自分のやる事やつて終わらせるかキヒヤツヒヤツヒヤ!!」

このデツキを使う為にちょっと歴史を改竄したんだしどとど、二人倒してホセに繫
げるかなキヒヤツヒヤツヒヤ!!

第十四話

さてと、自分のターンを終了してルチアロー？くんのターンになつた訳だが自分が先行しているせいで、未だに姿を後ろから見せない。

それにもしても、ルチアロー？くんはあの背丈だから子供なのだろうと思うが、どうやつてD・ホイールに乗るのだろうか？

いや、パシリド？さんみみたいに合体すれば問題無いのかな。

そんな事を考えていた時だ、後ろから狂った様な「キヒヤッヒヤッヒヤ!!」とか言う笑い声が聴こえ。

その後直ぐに、D・ホイール？いやスケートボート？みたいな物に乗つたルチアロー？くんが追い付いて並走しだした。

「お前さー、プラシドはあつさり倒したみたいだけど、僕はそう簡単にはいかないよキヒヤッヒヤッヒヤ!!」

あ、パシリド？さんじや無くて、プラシドさんて名前だつたんだあの人。

それにもしても、結構なスピードが出てるのにルチアロー？くんなんでスケートボー

トから落ちないんだろう？ 不思議だ。

「僕の、ターン！」

ルチアーノ

LP 4000

手札 5→6

デッキ 35→34

墓地 13

フィールド 0

魔法・罠 0

「僕は手札から、苦渋の選択を発動！ そして、デッキから処刑人—マキュラを三枚、現世と冥界の逆転二枚、さあ選べよキヒヤツヒヤツヒヤ!!」

苦渋の選択 魔

【通常】（禁止）

自分のデッキからカードを5枚選択して相手に見せる。

相手はその中から1枚を選択する。

相手が選択したカード1枚を自分の手札に加え、残りのカードを墓地へ捨てる。

・・・あれ？ どれもこれも禁止カードの様な気がするんだけど・・・

「安心しなよ、歴史を改竄して使える様にしといたんだよキヒヤツヒヤツヒヤ!!」
えー・・・何それ酷い・・・

「取り合えず処刑人——マキユラで」

「僕は手札に処刑人——マキユラを加えて、それ以外は墓地へ捨てる。 そして、墓地に処
刑人——マキユラを捨てた事により処刑人——マキユラの効果を発動！ これで僕は手札
から罠カードを発動出来るキヒヤツヒヤツヒヤ!!」

処刑人——マキユラ 閻

☆4

【戦士族・効果】（禁止）

攻1600

守1200

このカードが墓地へ送られたターン、このカードの持ち主は手札から罠カードを発動
する事ができる。

手札 6→5→6

デッキ 34→29

墓地 13→18

「僕は手札から強欲な壺を発動！ デッキからカードを一枚ドローするよ」

強欲な壺 魔

【通常】（禁止）

デッキからカードを2枚ドローする。

手札 6↓5↓7

デッキ 29↓27

墓地 18↓19

「更に、手札から天使の施しを発動！ デッキから三枚ドローして手札から一枚する。」

天使の施し 魔

【通常】（禁止）

自分のデッキからカードを3枚ドローし、その後手札を2枚選択して捨てる。

手札 7↓6↓9↓7

デッキ 27↓24

墓地 19↓22

酷いコンボだよ、それぞれ三積みだろうなこれは・・・

「手札からもう一度、苦渋の選択を発動！ 僕はデツキから闇の誘惑二枚に成金ゴブリ
ン三枚を選択するよ。」

「闇の誘惑に成金ゴブリンか・・・一枚よりも一枚の方がまだましだな
「成金ゴブリンを選択する。」

手札 7↓6↓7

デツキ 24↓19
墓地 21↓27

「手札から強欲な壺を発動してデツキから一枚ドロー、更に天使の施しを発動してデツ
キから三枚ドローして手札から一枚捨てるよ」

手札 7↓6↓8↓7↓10↓8

デツキ 19↓14

墓地 27↓32

「手札から、カツプ・オブ・エースを発動するよ。
カツプ・オブ・エース 魔

〔通常〕

コイントスを1回行う。

表が出た場合、自分はデツキからカードを2枚ドローする。
裏が出た場合、相手はデツキからカードを2枚ドローする。

フィールドのソリッドビジョンに金色のコインが映し出され、空中へと回転しながら飛び上がり地面へ落下し動きが止まるとコインは表側で止まっていた。

「コインは表よって、僕はデツキから一枚ドローするよ。」

手札 8↓7↓9

墓地 32↓33

「それじゃあ、もう一度カツプ・オブ・エースを発動するよ」

フィールドにもう一度、金色のコインが現れ空中を回転しながら舞い地面へと落ちる
と

今度はコインの裏側が上向きとなっていた。

「裏側つて事は、お前が一枚デツキからドローしろよな。」

コナミ

手札 1↓3

デツキ 34↓32

墓地 2

ルチアーノ

手札 9→8

墓地 33→34

「じゃ、手札から第六感を発動！ 僕は5と6を選ぶよ。 ほら、さあ、サイコロ降りなよなケヤツヒヤヒヤヒヤ!!」

第六感 罰

【通常】（禁止）

自分は1から6までの数字の内2つを宣言する。

相手がサイコロを1回振り、宣言した数字の内どちらか1つが出た場合、その枚数自分がカードをドローする。

ハズレの場合、出た目の枚数デッキの上からカードを墓地へ送る。

フィールドのソリッドビジョンにサイコロが現れる

6は出したく無いな、さてサイコロを振つてみようか。

デュエルディスクのボタンを押すとソリッドビジョンこサイコロが回転しだす

そして、動きを止め出た目は6だつた。

何てこつた・・・

「キヤツヒヤヒヤヒヤ!! ラツキー、僕はデツキから六枚ドローするよ。」

手札 8↓7↓13

デツキ 12↓6

墓地 33↓34

「手札から三枚目の、苦渋の選択を発動! デツキから魔法の採掘、無欲な欲張り、無の練獄、第六感、強欲で謙虚な壺を選択するよ。」

どれを選んだとしても、残りのデツキ一枚か・・・もう、欲しいカードは手札に揃つてるをだろうな。

「無の練獄で」

手札 13↓12↓13

デツキ 6↓1

墓地 34↓39

「どうせだから、最後の一枚もドローしておくかな。
からカードを一枚ドローするよ」

手札から無の練獄を発動、デツキ

無の練獄 魔【通常】

自分の手札が3枚以上の場合に発動できる。

自分のデッキからカードを1枚ドローし、このターンのエンドフェイズ時に自分の手札を全て捨てる。

手札 13↓12↓13

デッキ 1↓0

墓地 39↓40

「デッキが0枚になつた事だし、そろそろやろうかなー。僕は手札から、現世と冥界の逆転を発動！ 1000ポイントライフを払い発動！ お互いに自分の墓地と自分のデッキのカードを全て入れ替える。」

現世と冥界の逆転 罰

【通常】（禁止カード）

自分の墓地にカードが15枚以上ある時、1000ライフを払い発動。
お互いに自分の墓地と自分のデッキのカードを全て入れ替える。

その際、墓地のカードはシャツフルしてデッキゾーンにセットする。

ルチアーノ

LP 4000→3000

手札 13↓12

デツキ 0→40

墓地 0→1

コナミ

デツキ 32→2

墓地 2→32

あ・・・これは不味いな、まあカード伏せられたからいいかな。

「僕は、カードを三枚伏せて手札から手札抹殺を発動！　お前の手札は三枚、デツキは二枚、カード引けないお前の敗けだ！　ケヤツヒヤヒヤヒヤ!!」

手札 12→9→8

デツキ 40→32

魔法・罠 1→4

墓地 1→10

コナミ

手札 3→2

デツキ 2→0

フィールド 1

魔法・罠 2
墓地 32→35

やつぱり、負けちゃったか残念だな。
まあジャックとシドに頑張つてもらお。



コナミが負けるとはな、俺の出番が来るのは良いが納得いかんな。

奴は何故、あんな禁止カードばかり使つてているのにも関わらず観客といい、審判とい
いなにも言わないのだ。

不自然を越えてこれは明らかに可笑しな事だ。

「シド、貴様はこの事態をどうみる。」

「（まさか、歴史を改竄して禁止カードを使用可能にしてきたのか奴等は）・・・」

「シド、聞いているのか。」

「・・・！、いえ、私も何故かはわかりません。」

シドのあの反応は何かを知っているな、まあいい今は目の前の敵を倒す事に集中するべきか。

「コナミも戻ってきた、さて行くとするか——」

「コナミ、まさかお前があんな風に負けるとはな。」

「コナミはD・ハイールからステッカーを取り此方に渡してきた

「ふん、貴様の言われずとも勝つき、俺はキングだからな。」

自らのD・ハイールへとステッカーを貼り、今コースを走っているルチアーノへと追い付く為にコースを走り出す。

走り出したら減速する事なく、カーブ等直線を最短コースで進み。

先を進むルチアーノの後ろ姿をとらえた。

そして、更にスピードを上げ並走をする。

「ルチアーノとか言つたな、禁止カードを使つてゐる貴様などこの俺が鉄槌を下していく

れる！」

「へえ、お前が僕に鉄槌ね。てかさー何でお前ら、歴史改竄したのに記憶持つてる訳
？まあいいや、どうせ此処で終るんだからさ。」

この俺を倒すか、だが奴は既に現世と冥界の逆転でコナミのデツキを墓地と入れ換えた、もうあれを使う筈はない、どう俺を倒す気だ。

「ふん、この俺を倒すか。だがどうする既に墓地には大量のカードがある現世と冥界の逆転は使えまい。」

「はあー、誰が使うかよんなもん。もう仕込みは済ませてんだよケヤツヒヤヒヤヒヤ!!」
仕込みを済ませただと、あの伏せカードの事が一体何をするきだ。

「僕は、伏せカードのギフトカードを発動！　お前のライフを3000回復させるよ。」

ギフトカード 罰
【通常】

相手は3000ライフポイント回復する。
偽ジャック

L P 4 0 0 0 → 7 0 0 0

「更に、もう一枚ギフトカードを発動！」

偽ジャック

LP70000→10000

奴め、俺のライフを回復させ何をする気だ……いや、待て。

俺と奴のライフポイントの差は現在70000……まさか!?

「僕は手札からカードを二枚伏せて、伏せカード自爆スイッチを発動！」

自爆スイッチ 罰

【通常】

自分のライフポイントが相手より7000ポイント以上少ない時に発動する事がで
きる。

お互いのライフポイントは0になる。

「やはり、自爆スイッチか！」

「お前は何も出来ずに逝つちまいなキャッヒヤヒヤヒヤ!!」

そして、自爆スイッチの効果が発動し10000のライフを0にするべく巨大な爆発
がコース上に発生し

俺を呑み込んだ。

第十五話

ルチアーノが発動した自爆スイッチ、それにより発生した爆発に巻き込まれた……が「くつ、!?」

だが、これはなんだ!?

ソリットビジョンは体感の為に多少のダメージを再現されるが

今俺が受けているこれは本物だ、爆発による暴風と熱風、肌を焼く熱さ
カードのダメージが本物になるとでも言うのか!

だが、今はそんな事よりも爆発による暴風により俺のD・ホイールはバランスを崩されかけ、熱風の熱さにより俺とD・ホイールにも少なくからずダメージを受けている。

これが、普通の人間だつたのなら既にクラッシュを起こしても可笑しくはない
俺がロボで無ければ、危なかつただろう

だが、この爆発の中暴風を受けながらバランスをとる事が何時までもつかはわからな
いが……

此處で、俺がクラッショした場合この強力な爆発とD・ホイールのスピードを考えると、幾ら俺の体が機械だからと言つても重大なダメージを受ける可能性がある

チームリーダーであるこの俺がチームの足を引っ張り訳にはいかない！

だが、無情にもギリギリのバランスを保ちD・ホイールの操縦を行つてたジヤツク
だつたが、爆発を抜けた事による一瞬の機の緩みが後方から来る爆発に対応が遅れ
D・ホイールのバランスを崩す

「つく！　しまつた!!」

不味い！　D・ホイールのバランスが崩れた!!

くつ、このままではクラッショする・・・

だが、この俺がそう簡単にクラッショしてたまるものか!!

バランスを崩しながら高速で移動する、D・ホイールが倒れこみ地面へと傾ぐなか
それを無理矢理にも阻止するべく

「おおおおおおおおお!!」

今現在出せる限りの力で、近付く地面にたいし拳を殴り突ける。地面と拳が激突した事により、殴り突けた地面は衝撃により地面をへこませる様に破壊し、無理矢理倒れる勢いを打ち消し

一瞬出来た、その瞬間を逃す事なくハンドルを動かしD・ホイールを正常な走りへと持っていく。

危なかつた・・・何とかクラッシュは免れたか。
だが、腕が少し壊れたか・・・

D・ホイールを立て直す為に地面を殴りつけた事で、通常よりも負荷が架かりそれに
より片腕が損傷してしまつた

・・・倒れるのを防ぐ為とは言え咄嗟に殴つて腕が損傷か・・・
どうやらまだ鍛え方がまだ足りなかつた様だな、俺とした事がまだだつた様だな。



◆
∴ D・ホイールが倒れるのを殴つて止めて、其所から通常の走りに持つていく・・・
凄いだろあれ、普通ならクラッシュしてるので
何故だか解らないが、一瞬だけ上半身と下半身が別れるイメージが浮かんだのは、何
故だ？

それにもしても、まさかルチアーノの奴が歴史を改竄して、禁止カードを使つて来ると
は予想外だつたな。

この調子だとまさかホセまで禁止カードを使つて作つたデツキかも知れないか・・・
これは厳しい試合になりそうだな。

そろそろ、ジャックが帰つてくるか、殴つた腕は大丈夫だろうか？

「ジャック様、地面を殴つていましたか腕の方は大丈夫でしょうか？」

「ふん、あの程度の事問題ない。」

ウソだな隠しては要るがどうやら腕を故障したらしい、ジャックの腕の動作や作動音を聞けば直ぐにわかることだ。

「しかし、この俺が敗けるとはな・・・」

敗けるか・・・正確にはルチアーノは反則をしている、自爆スイッチの効果で引き分けだと思うがなあれば、どうしようも無い。

「ジャック様、あれはどうする事も出来ないと想います相手は禁止カードを使用していますし、あれは相手もライフがゼロになりましたので引き分けでは？」

「ふつ、違うなシド、キングは常に頂点に立っているのだ。たかだが禁止カードを使われたぐらいで敗けるようではキングとは呼べん其が引き分けだとしてもだ。」

ジャック・・・二ートよりもやはりキングらしいな。

「それに、シド貴様はこの試合を戦わずに勝ちたかつたのだろう？　今日の試合はダメージを実際に受ける、つまり貴様は試合の後の為にダメージを受ける訳にはいかない・・・

そうだろうシド。」

「こいつは、前に話した時から何かに勘づいていたが今日の事で大分ばれたか……」
 「……ええ、その通りでございます。今日の試合後の為に私はダメージを受けたくは無かつた、だからこそジャック様との交代をお願いがしたのです。」「ふん、だろうな。だが俺は勝てなかつた、貴様の番まで回してしまうとはな。更に

キング失格だな……」
 「貴様に、俺がデュエルする以上大将戦までは回さんと口約束をしていたのにも関わらず其が実行出来なかつた、仲間との約束も守れないそんな奴はキング失格だな。」

「仲間か……それにしても律儀にあの約束を守ろうとしてたのか、まあ普通ならジャックが勝つていたはずだ。
 だが、相手が悪かつた色んな意味でな……」

「戦いには敗け、仲間との約束も守れないそんな奴はキング失格だな……」

ジャック……何時もの様な霸気が感じられない

だが、ジャック俺はお前がなんと言おうと俺はキングだと思うぞお前は。

俺が知る限り、お前は敗け知らずだし約束事はきつちりと守っているコナミの満足トリシューラプリンを買うためにまだ毎朝並んでいるしな。

だから、そんな弱気になる俺が知っているジャック・アトラスはもと何と言うか：キングらしいぞ。

「ジャック様。」

「・・・なんだシド。」

「ジャック様はまだ敗けてはおりません。」

そうだ、ジャックはまだ戦つてすらいない

「ジャック様は私との約束も破られていません。」

そう、こいつは約束を破る様な奴じやない。

「だが、シド俺は負けた。そして、貴様にまで回してしまった。」

ふん、そんな事か。ルチアーノのあればノーカンだ、約束もようは俺まで回らなければいいのだろう。

「いいえジャック様、まだジャック様は戦つていません。それにジャック様のデッキ

は敗けていません。」

「・・・」

「それに、ジャック様は約束事は必ず守るお人ですし。私は知っています、毎朝コナミ様との約束の為に満足トリシユーラプリンを買いに行っているを知っています。」

「?・・・何故貴様が知っている。」

ふつ、暇だから毎日観に行っていたとは言えないな。

しかも3回程買つているなんてとても言えないな。

「さて、何故でしようか?」

「シド貴様・・・まさか毎日来ていたのか」

相変わらず勘が鋭いなジャック。

だが今はそんな事よりも。

「私はジャック様が負けたとは思つておりません、ジャック様が戦えば必ず勝つ、ジャック様は、ジャック様のデッキは!」

「シド・・・」

「私がそれを証明してみます。ジャック様が戦えば勝つと、ジャック様のデッキは勝つと! だから私はジャック様の替わりに戦い勝つてみせます! 不躾ですがジャック様、私にジャック様のデッキを貸して下さい!」

そして、勝つ奴等に

そう仲間の為に俺は勝つ！

自分の、為にではなく

「・・・シドお前の想いは有りがたいが、貴様が戦いに勝つたとしても俺が約束を破つた事にはかわりない・・・」

「何を仰りますか、ジャック様。私はジャック様の替わりにして戦うのですよ。　言わば代理です。　私は戦いませんよ。」

「・・・シド貴様、言っている事が無茶苦茶だぞ。」

だろうな、俺も滅茶苦茶なのはわかっているだがなジャック。

俺はこれ以上、俺を仲間だと言つたお前のそんな姿は見たくは無い。

だからこそ、お前が正しいことを証明してみせる。

「代理である私がジャック様のデッキを使い勝つ、ほらそうすればジャック様は敗けず、私との約束も果たした・・・これで万事解決ですね。」

「・・・」

何故黙る、やはり無理矢理過ぎたのか？　まあ俺も無理矢理だとは思うがこれ以上にいい考えは思い付かん・・・

いや、個々は一発思いつきり殴るというショック治療も・・・
「クっくく・・・」

うん?

「ハハハハハハハハ！」

「ジャックが壊れた!!」

「そうか、そうか。俺の替わりに戦い俺の勝ちと約束を守るか！ シドお前は！ 俺が言うのも何だが馬鹿か貴様は！ クハハハハハハハ！」

嬉しそうな表情に、嬉しそうな声で馬鹿にしないで欲しいものだ。

此方は励まそうと必死だつたと言うのに。

「良かろう！ 俺の替わりに勝つてこい！ 俺のデツキを使つてな！」

「ありがとうございます。ジャック様。」

「それと、シド！ 俺のデツキを使うのだ！ 敗けは許さんぞ！ 敗けたら貴様は俺と一緒に満足トリシューラプリンの列に並んで貰うからな！」

ふん、ようやく何時ものジャックに戻つてきたか

だがなジャック、俺は敗ける気は無いから安心して一人で並んでいてくれ、俺は其を見て楽しんでおくためにな！

「受け取れ、俺のデッキだ。」

ジャックから手渡されたデッキは、重みがあつた
ただのカードの集まりではなく、今まで戦い抜きジャックがキングとして戦ってきた
思いが詰まっているのだろう。

「ジャック様、私は勝ちます。」

たとえ、何があろうと勝つ！

ジャックの想いは無駄にしないために
仲間の為に！

第十六話

ジャックからデツキを受け取りHEROデツキと入れ替え、先にコースを走行しているホセを追いかけるべくD・ハイールを走らせる。

ホセが使うデツキが禁止カードを使ったデツキか、機皇帝デツキかはまだ解らないが取り合えずルチアーノが伏せたカードはドローカードと攻撃を防ぐカードだろうな。

そして、コースを走る事十数秒ようやく先行しているホセに追い付いた。

「来たか、プラシドよ。 貴様のターンだドローするがいい。」

ふん、そんなことは分かつていて戦う前に聞くべき事がある。

「ホセ、ルチアーノがあのデツキを使うのを知っていたのか。」

「ルチアーノのデツキか……いや、私はあれについては知らなかつた、ルチアーノが何やら動いていたのは知つていたがな。」

「そうか。」

此所でホセが嘘をつくとは思えないな、やはりルチアーノの独断か・・・
まあ、ホセが関わっていようとしないと俺がする事は変わりはしない。

「いくぞ、ホセ。俺のターン、ドローー！」
シド

LP 4000

手札 5 → 6

フィールド 1 究極恐獣

魔法・罠 2

手札のカードでは、ホセの伏せカードを全て破壊する事は不可能か、このターンで倒
したい所だが恐らく防がれるだろうな。

守備力の低いレベル・ステイラーを壁に出した所でグランエルには貫通効果がパー
ツがある

だが、コナミのカードで1ターンは防げるが。

「俺は、究極恐獣でホセお前にダイレクアタックだ！」

「私は、伏せカードの和睦の使者を発動。このターン戦闘ダメージは受けない。」

和睦の使者 罷

【通常】

このターン、相手モンスターから受けた全ての戦闘ダメージは0になり、自分のモンスターは戦闘では破壊されない。

ホセ

魔法・罷 4↓3

和睦の使者か、成る程1ターン耐えるには調度いいカードだな。やはりそう上手くはいかないか。

「俺はカードを二枚伏せターンエンドだ。」

手札 6↓4

フィールド 1

魔法・罷 2↓4

伏せカードは、発動を無効化されなければターンを乗り越えられる。
ホセがどう出てくるかだな・・・

「では此方もゆくぞ、ラシドよ私のターン、ドロー。」

ホセ

LP 4000

手札 5→6

フィールド 0

魔法・罠 3 一族の結束

「プラシドよ、何故お前は我々に戦いを挑んだのだ。 不動 遊星と戦う為だけではないのだろう。」

「ああ、確かに不動 遊星だけでは無いな俺は俺の目的の為に貴様達を倒すただそれだけだ。」

まあ、今はそれだけじゃないがな仲間の、ジャックの為でもある

「まあ、良かろうお前がそう言うのであればそれで……だが、プラシドよ、我々に歯向かう以上お前は敵だ容赦はせんぞ！」

「望む所だ、俺は元から貴様を倒すつもりだからな手を抜かれても意味は無い。」

「そうだ、ジャックのデッキで戦う以上手を抜かれては困る強大な敵を倒してこそ意味がある。」

「ゆくぞ、プラシド！ 私は手札よりハリケーンを発動する！」

ハリケーン 魔

【通常】

フィールド上の魔法・罠カードを全て持ち主の手札に戻す。

いきなりハリケーンか此方のカードを警戒してか、俺のフィールドには攻撃力3000の究極恐獣がいるが・・・

コナミ悪いが早速使わせて貰うぞ

「俺はハリケーンの発動に対し、和睦の使者を発動！　このターン俺のモンスターは破壊されず受けるダメージはゼロだ。」

ホセ

手札 6↓5↓8

魔法・罠 3↓0

シド

手札 4↓7

魔法・罠 4↓0

「ほう、なかなか小賢しいカードを伏せていた物だなプラシドよ。」「生憎と此は俺が伏せたカードじゃ無い先鋒のコナミーーー赤い帽子の奴が伏せたカードだ。」

「お前の偽者を倒したあやつか、プラシドよ感謝するのだな偶然とは言えそのカードを伏せていたあやつに。」

直感に任せて発動させたが、どうやらホセの発言からして発動させて正解だったようだな。

「ルチアーノの置き土産を使わせて貰うとしよう。手札から強欲な壺を発動デツキからカードを一枚ドロー。」

手札 8→7→9

「更にもう一枚、強欲な壺を発動。 デツキからカードを一枚ドロー」

手札 9→8→10

ルチアーノめやはりドローカードをそれも強欲な壺一枚も伏せていやがつたか
厄介だが・・・倒しがいがあるなこれは。

「そして、プラシドよ面白い物を見せてやろう。私は手札からワン・フォー・ワンを発動、手札のモンスターを捨てデツキからスカイ・コアを特殊召喚する。」

ワン・フォー・ワン 魔

【通常】

手札からモンスター1体を墓地へ送つて発動できる。

手札・デッキからレベル1モンスター1体を特殊召喚する。

フィールドに青い色をし赤いラインがある機械の卵が現れた。

スカイ・コア 風

☆1

【機械族・効果】

| | |
|---|---|
| 攻 | 0 |
| 守 | 0 |

このカードは1ターンに1度だけ、戦闘では破壊されない。

このカードがカードの効果によつて破壊された時、自分フィールド上に存在するモンスターを全て破壊する。その後、自分のデッキ・手札・墓地から「機皇帝スキエル∞」「スキエルT」「スキエルA」「スキエルG」「スキエルC」をそれぞれ1体特殊召喚する。

手札 10→8

フィールド 0→1

「スカイ・コアだと!? 何故貴様が!」

「ルチアーノが私に渡してきたのだ、本番は違うデッキを使うとな。」

それで、自分のデッキに組み込んだのか。ホセのグランエルは自分のライフポイントが高ければ高いほど強くなるが、今のライフは4000一族の結束を発動したとして

も4800にしかならない。

その点で言えば、通常なら攻撃力と守備力が低いスキエルだが今は一族の結束があるぶん打点は高くなる・・・

「私は手札よりカオス・ブラストを発動。 デツキから三枚レベル1モンスターを墓地へ送りフィールドのスカイ・コアを破壊する」

フィールドに存在する青い機械の卵がフィールドに幾つも発生した黒い竜巻により、バラバラに破壊される。

手札 8↓7

フィールド 1↓0

「スカイ・コアが効果により破壊されたことで、私はデツキから「機皇帝スキエル∞」を特殊召喚する。」

フィールドに∞マークがついた青い色をした少し平べったい球体が現れた。

機皇帝スキエル∞ 風

☆1

【機械族・効果】

攻 0

守 0

このカードの攻撃力・守備力は、このカード以外の自分フィールド上に表側表示で存在する「ワイゼル」・「グランエル」・「スキエル」と名のついたモンスターの攻撃力分アップする。

このカードは相手のカードの効果の対象にならない。

1ターンに1度、相手フィールド上に表側表示で存在するシンクロモンスターを装備カード扱いとしてこのカードに1体のみ装備することができる。

このカードの攻撃力は、この効果で装備したモンスターの攻撃力分アップする。

「機皇帝」と名のついたモンスターは自分フィールド上に1体しか表側表示で存在できない。

「スキエルT。」

フィールドに、昆虫のトンボ逆向きをにし尻尾を頭にした様な青い色をした機械のモンスターが現れた。

スキエルT 風

☆1

【機械族・効果】

攻 600

守 0

フィールド上に「機皇帝」と名のついたモンスターが表側表示で存在しない場合、このカードを破壊する。

「スキエルG。」

フィールドに昆虫のバッタをデフォルメした様な青い色をした機械のモンスターが現れた。

スキエルG 風

☆1

【機械族・効果】

攻 200

守 300

フィールド上に「機皇帝」と名のついたモンスターが表側表示で存在しない場合、このカードを破壊する。

1ターンに1度、自分フィールド上に存在するモンスターが攻撃対象に選択された時、その攻撃を無効にする事ができる。

「スキエルA」

フィールドにベツコウハゴロモの幼虫をモチーフにした様な青い色をした機械のモ

ンスターが現れた。

スキエルA 風

☆1

【機械族・効果】

攻 1000

守 0

フィールド上に「機皇帝」と名のついたモンスターが表側表示で存在しない場合、このカードを破壊する。

「スキエルC」

フィールドにアメンボをモチーフにした様な青い色をし全体が細い機械のモンスターが現れた。

スキエルC 風

☆1

【機械族・効果】

攻 400

守 0

フィールド上に「機皇帝」と名のついたモンスターが表側表示で存在しない場合、この

カーデを破壊する。

「合体せよ、機皇帝スキエル∞！」

フィールドのそれぞれパーティが∞マークをもつ丸いパーティを中心に合体していく。

スキエルTが、変形し球体の上部分に合体し頭部になり

スキエルCが、半分に分かれ変形し球体の左右に合体し翼になり

スキエルAが、変形し球体の下部分につき銃のついた腰部分へと変わり

スキエルGが、変形しその姿を伸ばしスキエルAのすぐ後ろ側に合体し尻尾へとかわ

る。

合体が完了した姿は、青い色をした機械の龍を思わせる様なモンスターになつてい
た。

フィールド 0→5

「更に手札から一族の結束を発動する、私の墓地には機械族モンスターのみよつて
フィールドの私のモンスターは800ポイント攻撃力をあげる。」

手札 7→6

魔法・罠 0→1

機皇帝スキエル∞

攻撃力 2200→6200
スキエルT

攻撃力 600→1400

スキエルG

攻撃力 200→1000

スキエルA

攻撃力 1000→1800

スキエルC

攻撃力 400→1200

やはり、一族の結束を発動させたかこれでスキエルの攻撃力は6200・・・
だが、俺のライフを削り切れない一体何をしでかす気だ
リミッター解除が手札に来ているのか？

「お前の偽物が残した一族の結束とルチアーノが私に渡した機皇帝スキエル∞が私の機皇帝グランエル∞に更なる力を与えるのだ。私は手札から神秘の中華鍋を発動、フイールドの機皇帝スキエル∞生け贊に捧げ私はその攻撃力分のライフを回復する。そして、機皇帝スキエル∞がフィールドから居なくなつた事によりスキエルT、G、A、Cは自壊する。」

神秘の中華なべ 魔

【速攻】

自分フィールド上のモンスター1体を生け贋に捧げる。
生け贋に捧げたモンスターの攻撃力か守備力を選択し、その数値だけ自分のライフボ
イントを回復する。

フィールドの青い機械の龍の胴体が光の粒子となり消え、残ったパーツはそれとともに
黄色い電気を発し黒い煙を上げて爆発した。

ホセ

LP 4000→10200

手札 6→5

フィールド 5→0

残されたカードを最大限に使いそれを無駄にしない引きの強さか本当に厄介だな
これでグランエルを出されたら10200かいや、一族の結束で11000か
和睦の使者を発動させておいてよかつたな。

「手札からグランド・コアを攻撃表示で召喚。」

フィールドに、茶い色をし黒いラインの入った機械の卵が現れた。

グランド・コア 地

☆1

【機械族・効果】

| | |
|---|---|
| 攻 | 0 |
| 守 | 0 |

このカードは1ターンに1度だけ、戦闘では破壊されない。

このカードがカードの効果によつて破壊された時、自分フィールド上に存在するモンスターを全て破壊する。

その後、自分のデッキ・手札・墓地から「機皇帝グランエル∞」「グランエルT」「グランエルA」「グランエルG」「グランエルC」をそれぞれ1体特殊召喚する。

手札 5→4

フィールド 0→1

「更に手札からもう一枚のカオス・ブラストを発動、デッキからレベル1モンスターを三体墓地へ送りフィールドのグランド・コアを破壊する。」

フィールドのグランド・コアが幾つもの黒い竜巻によりバラバラに破壊される。

手札 4→3

フィールド 1→0

「グラント・コアが効果により破壊された事により私はデツキから機皇帝グランエル∞を攻撃表示で特殊召喚。」

フィールドに茶い色の少し平べつたい丸い形の∞マークをもつ機械のモンスターが現れた。

機皇帝グランエル∞ 地

☆1

【機械族・効果】

守 0
攻 0

このカードが「グラント・コア」の効果によつて特殊召喚に成功した場合、このカードの元々の攻撃力は、自分のライフポイントと同じになる。

このカードは相手のカードの効果の対象にならない。

1ターンに1度、相手フィールド上に表側表示で存在するシンクロモンスターを装備カード扱いとしてこのカードに1体のみ装備することができる。

このカードの攻撃力は、この効果で装備したモンスターの攻撃力分アップする。

「機皇帝」と名のついたモンスターは自分フィールド上に1体しか表側表示で存在できな

「更にグランエルT」

フィールドに茶色の装甲をしたタツノオトシゴをモチーフにしたかの様な機械のモンスターが現れた。

グランエルT 地

☆1

【機械族・効果】

攻 500

守 0

フィールド上に「機皇帝」と名のついたモンスターが表側表示で存在しない場合、このカードを破壊する。

1ターンに1度、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択し、そのモンスターの効果をエンドフェイズまで無効にことができる。

「グランエルG」

フィールドに茶色の装甲をした鮫をモチーフにしたかの様な機械のモンスターが現れた。

グランエルG 地

☆1

【機械族・効果】

| | |
|---|------|
| 攻 | 500 |
| 守 | 1000 |

フィールド上に「機皇帝」と名のついたモンスターが表側表示で存在しない場合、このカードを破壊する。

自分フィールド上に存在するモンスターが攻撃対象に選択された時、このカードに攻撃対象を変更することができる。

【グランエルA】

フィールドに茶色の装甲をも魚のカワハギをモチーフにしたかの様な機械のモンスターが現れた。

グランエルA 地

☆1

【機械族・効果】

| | |
|---|------|
| 攻 | 1300 |
| 守 | 0 |

フィールド上に「機皇帝」と名のついたモンスターが表側表示で存在しない場合、このカードを破壊する。

自分フィールド上に存在する「機皇帝」と名のついたモンスターが守備表示モンスターを攻撃した場合、そのモンスターはもう一度だけ続けて攻撃することができる。

「グランエルC」

フィールドに茶色の装甲をもち貝をモチーフにしたかの様な機械のモンスターが現れた。

グランエルC 地

☆1

【機械族・効果】

| | |
|---|-----|
| 攻 | 700 |
| 守 | 700 |

フィールド上に「機皇帝」と名のついたモンスターが表側表示で存在しない場合、このカードを破壊する。

「ターンに一度だけ、自分フィールド上に存在するモンスターは戦闘では破壊されない。」

「我が機皇帝グラネル∞よ合体しその姿を現すがいい。」

フィールドのグラネルのパーツが機皇帝グラネル∞を中心に合体していく。

グラネルTが、変形し赤いモノアイを出現させ頭部へと変わり

グラネルGが変形し腕となり、右腕へとがつたいし

グラネルAが変形し、銃口がセリだし腕となり左腕となり

グラネルCが変形し左右に開きタンクの様な足に変わり上半身と合体する

フィールドに今までの機皇帝よりも巨大で、全身を茶い装甲に覆われ赤いモノアイを光らせた巨大なロボが存在していた。

フィールド 0→5

やはり来たか、厄介になつたなこれは本当にそれに――――

「パーツは全て守備表示か。」

「お前の偽物の例もあるからな、守備表示にさせて貰つた。」

だが、コナミが残したカードを使えば守備表示は何とかなるが、ホセが防がなければ

だかな。

「このターン攻撃は無意味、私はカードを三枚伏せターンエンドだ。」

ホセ

LP 10200

手札 0

フィールド 5

魔法・罠 4

第十七話

奴のフィールドには攻撃力が11000のグランドに守備表示のグランエルのパーティ四体

それに加えて伏せカードが三枚か、俺が破壊できるのはせいぜい一枚か、サイクロンで一枚、スクラップ・ドラゴンで一枚だが、これは邪魔をされなかつた場合だがな

それにこの方法だとグランエルは倒せない・・・

コナミのカードを使わなければ、まともにダメージを与えられないか

このターン凌ぎきるしかないか

強化パーツが来ないことを祈るしかないか。

「俺のターン、ドロー！」

LP 4000

手札 7→8

フィールド 1

「私はこの瞬間、超古代生物の墓場を発動。 これで、お前の融合召喚は意味をなさない。」

超古代生物の墓場 魔

【永続】

このカードがフィールド上に存在する限り、フィールド上のレベル6以上の特殊召喚されたモンスターは攻撃宣言できず、効果を発動する事もできない。

これでは、シンクロ召喚は意味が無いか・・・

あれを破壊しない限りは、手札のサイクロンで破壊は出来るが
このターン破壊出来たとしても倒し切れないか。

強化パートツが来ないことを祈るしか無いなこれは。

「俺は、墓地のレベル・ステイーラの効果を発動する。究極恐獣のレベルを1つ下げ守備表示で特殊召喚。」

フィールドに背中に大きな1つの星マークがあるてんどう虫が現れた。
ホセによる妨害は無いか、ならば

「墓地に存在する一体のレベル・ステイーラを究極恐獣のレベルを下げる事で守備表示で特殊召喚。」

フィールド 1↓4

「究極恐獣を守備表示に変更しカードを四枚伏せターンを終了する。」

手札 8→4

魔法・罠 0→4

「壁のモンスターを増やしたか、だがそれは只の時間稼ぎにしかならんぞ。」
たしかにな、これは時間稼ぎにしか過ぎない。

次の一手のための。

「私のターン、ドロー。」

手札 0→1

「私は、機皇帝グランエル∞で究極恐獣に攻撃。」

「させるか、トラップ発動！　スクリーン・オブ・レッド。　このカードがフィールド上
に存在する限り、相手モンスターは攻撃宣言は出来ない。」

スクリーン・オブ・レッド 罠

【永続】

このカードがフィールド上に存在する限り、相手モンスターは攻撃宣言をする事がで
きない。

このカードのコントローラーは自分のエンドフェイズ時に1000ライフポイントを払う。

この時に1000ライフポイントを払えない場合はこのカードを破壊する。

フィールド上に「レッド・デーモンズ・ドラゴン」が表側表示で存在する場合、このカードを破壊し自分の墓地に存在するレベル1のチューナー1体を選択して特殊召喚する事ができる。

「やはり、攻撃を防ぎに来たかだが。だが、私はトラップ発動、ゴースト・コンバート。私の墓地の機械族モンスターを除外しスクリーン・オブ・レッドの発動を無効に破壊する、その後このカードは再びセットする。」

ゴースト・コンバート 戻

【通常】

自分フィールド上に「機皇帝」と名のついたモンスターが表側表示で存在する場合、自分の墓地に存在する機械族モンスター1体をゲームから除外して発動する。

相手の魔法・罠・効果モンスターの効果の発動を無効にし破壊する。
発動後このカードは墓地に送らず、そのままセットする。

シド

魔法・罠 4→3

やはりあつたか、ゴースト・コンバートだが此で位置は特定出来た

「マッジク発動！・サイクロンでホセ貴様のゴースト・コンバートを破壊だ。」

サイクロン 魔

【速攻】

フィールドの魔法・罠カード1枚を対象として発動できる。

そのカードを破壊する。

ホセ

魔法・罠 3→2

シド

魔法・罠 3→2

「ほう、超古代生物の墓場ではなくゴースト・コンバートを破壊をするか、他にも破壊出来るカードがあるという事か。まあよい私は機皇帝グランエル∞で究極恐獣に攻撃、グランド・スローター・キヤノン。」

機皇帝グランエル∞の左腕となつているグランエルAの砲身から、攻撃力が上昇した事で通常よりも巨大になつたエネルギーの砲撃が究極恐獣目掛け襲い掛かる

シド

フィールド 4→3

「グランエルAの

効果を発動。自分フィールド上に存在する「機皇帝」と名のついたモンスターが守備表示モンスターを攻撃した場合、そのモンスターはもう一度だけ続けて攻撃することができます。よって私の機皇帝グランエル∞はもう一度攻撃が可能だ、レベル・ステイラにグランエルで攻撃。」

砲撃を打ち終えた、グランエルが次の標的へと狙いを定め巨大なエネルギーの砲撃をレベル・ステイラへと放ち跡形なも消し飛ばした。

フィールド 3→2

グランエルは此方に守備表示モンスターが居れば二度攻撃が出来る、毎ターン守備モンスターを出す訳にもいかない。

強化パーティがくれば、この壁モンスターは意味をなさない。

仕掛けるなら速い方がいいな。

「ラシドよ、お前は何の為に戦っているのだ。」

「いきなり、何だホセ。似たような話ならさつきしだろう、ついにボケたか。」

まあ、そんな訳が無いがな。

「私は、私の仲間（とも）であるゾーンの為に戦っている。お前はどうだプラシドよ。」
「…ホセがゾーンの事を仲間（とも）と言うことは、記憶のブロックが解けているのか…」

「言つたはずだ俺は俺の目的の為に戦つてゐる、誰の為でもない自分の為だ。」

「フハハハ、違うなプラシドよ、お前は嘘を付いてゐるな。お前もゾーンの為に戦つて
いる、そして今は、仲間の為に戦つてゐる…そうだろプラシド。」

「何を根拠にそんな事を…」

「元々我等は一つ、お前の行動の変化に気付かないで思つたか。そして、お前が何
かをしようとしているのかを。」

「俺は行動はそんなに分かりやすいのか？」いや、ホセだからか。

「元々俺だしな。」

「プラシドよ、私はゾーンの為に戦いこの街にアーク・クレイドルを落とす。其がゾー
ンの望みでも有るからだ、例えその先に待つのが変わらぬ絶望で合つたとしてもだ…」
「変わらぬ絶望か…つまりホセも俺と同じ様な結論に至つたのか。」

そして、俺とは違うゾーンの願いを最後まで付き合うか・・・

「お前は、違うのであろうプラシドよ。その為に我等と戦っているのだろう、アポリアになる為にゾーンを止める為に。」

良くもまあ、ここまで俺がしようとしている事が分かるものだ。

そんなに分かりやすいのか俺は・・・

「そして、今はその他にもあの仲間の為にこの試合に勝つんだろう。」

「・・・」

「我々は最終的には未来を変えると言う目的は同じだが、お前と私では行くべき道が違うただそれだけの事だ。」

確かに、ホセの言う通りか・・・

俺とホセでは行くべき道が違う。

「・・・ああ、確かにホセ。お前の推測は大体当たつている恐ろしいぐらいにな。俺がお前達と戦う理由はアポリアに俺が主体でなるためだ。そして、アポリアになりゾーンを止める其が俺の目的だ。」

「そうか・・・」

「そして、この時代で出来た仲間の為にも俺はこの戦いに敗ける訳にはいかない！」

アポリアになり、ゾーンを止める。

アポリアにならなければ色々と機能に制限つけられているからな。

万全の状態でゾーンに挑む少しでも、勝率を上げるために。

「この街にはアーク・クレイドルは落とさせない、ゾーンにこれ以上の絶望は味合わせない！ 俺はこの手で未来を切り開く！」

「だが、プラシドよ！ ゾーンを止めると言うのであれば、私を倒して見せよ！ 私程度の敵を倒せなければ話にはならんぞ！」

「元からそのつもりだ！」

「ならば、越えて見せろ！ 両親を仲間を希望を！ 全て奪い去つたこの機皇帝グランエル∞を倒して見せよ！」

今まで不思議だった、ホセが機皇帝グランエル∞を使うのかが。

あのカードの見た目は、俺達に3つの絶望を作り出した原因の物によく似ているからだ。

だが、今のホセの発言で解った。

何故ホセがグランエルを使うのかが、それは一番近くで見れるからだろう

その瞬間をいつか・・・

「ホセ、お前がグランエルを使う理由が解ったよ。お前の秘めた願いを俺が叶えてやる。」

「ほう、やれる物ならやってみるがいい。私はカード一枚伏せターンエンドだ。」

ホセ

手札 1↓0

魔法・罠 3↓4

第十八話

ホセの伏せカードは二枚警戒が必要か、それに超古代生物の墓場を何とかしないと此方は動けない。

頼みの伏せカードは既に伏せている、後は俺の引きしだいか・・・

あのカードが来れば、何とかなるか

まあ、様はこのドローに掛かっている訳だな。

「俺のターン、ドロー！」

手札 4↓5

ドローしたカード――――

「来たか――――」

「どうやら、目的のカードを引いた様だな。」

「ああ、この状況を何とか出来るカードをな。」

後は、こいつから繋げていくこの試合に勝利する為に

「俺は手札から、トラップ・イーターの効果を発動。

ホセお前の超古代生物の墓場を墓

地へ送り手札からトラップ・イーターを特殊召喚。」

ホセのフィールドに、存在していたオープンしていたトラップカードが、地面から大きな口が現れトラップカードを食べ、地面から此方のフィールドに黒い真ん丸の角の生えた魚の様なモンスターが現れた。

トラップ・イーター

闇

【悪魔族・チューナー】

☆4

攻1900

守1600

このカードは通常召喚できない。

相手フィールド上に表側表示で存在する罠カード1枚を墓地へ送った場合のみ特殊召喚できる。

手札 5→4

フィールド 2→3

さあ、最初の準備は整つた。

シンクロ召喚のな・・・

「俺は二体のレベル1レベル・ステイーラにレベル4、トラップ・イーターをチューニング！」

フィールドのトラップ・イーターがその姿を緑色の4つの列なつたリングへと姿を変え空に上っていく。

「チューニング…シンクロ召喚か！　あの絶望の未来を知つていながらシンクロを使うとはな。　アンチノミーと同じか…」

アンチノミーと同じか、確かに彼奴はシンクロ召喚の可能性を信じている、だからこそシンクロデッキを使い続ける事をしていた。

俺は、ジャックのデッキを使つていてからシンクロを使つていてるだけだが。

シンクロの可能性を信じていはない訳ではない、そこら辺はアンチノミーと同じか。

フィールドの二体のレベル・ステイーラが緑色のリングを目指し飛び上がり、リングを通過する。

「シンクロ召喚現れろ、氷結界のブリューナク。」

リングを縦に貫く様に光の柱が生まれ、光が止むとそこには。

雪の様に白い角や鱗を持や氷の様に透き通つた鱗や翼などを持つた氷のドラゴンが
フィールドに現れた。

氷結界の龍 ブリューナク 水

☆6

【海竜族・シンクロ／効果】

攻2300

守1400 チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

手札を任意の枚数墓地へ捨て、捨てた数だけフィールド上のカードを選択して発動で
きる。

選択したカードを持ち主の手札に戻す。

フィールド 3↓1

「ほう、ブリューナクか。 効果は厄介だが、此方には効果を無効にするグランエルTが
いるどうするつもりだ。」

「ふん、こうするつもりだ！ ブリューナクの効果を発動、手札を二枚捨てホセお前の二
枚の伏せカードを手札に戻す。」

手札 4↓2

「此処で、グランエルTの効果を使わなければこの二枚は手札に戻るか・・・ならばお前

の思惑どおり、使つてやろうグランエルTの効果を発動、1ターンに1度、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択し、そのモンスターの効果をエンドフェイズまで無効にする。私は氷結界のブリューナクを選択する、これで効果は無効かだ。」

これで、グランエルTの効果は使われない。

そして、あの二枚は俺の思惑にのると言つてはいるが、どうやら戻されたくは無かつたらしいな。

「俺は、氷結界のブリューナクのレベルを1下げ墓地からレベル・ステイーラを特殊召喚する。」

フィールドに、背中に大きな星マークがあるてんとう虫が現れた。

フィールド 1→2

「フィールドのレベル・ステイーラをリリースし手札からサルベージ・ウォリアーをアドバンス召喚。」

フィールドに、青い巨体に作業用のズボンにオレンジ色のジャケットを身に纏い、背中の機械にフックの付いたチエーンを二つつけたモンスターが現れた。

「サルベージ・ウォリアーの効果を発動、俺は墓地からダーク・リゾネーターを特殊召喚。」

フィールドに新たに音叉を持ち黒い衣装を纏つた小さい悪魔が現れた。

フィールド 2→3

ジャック、お前の魂のカード使わせて貰うぞ。

「レベル5サルベージ・ウォリアーにレベル3ダーク・リゾネーターをチューニング！」
ダーク・リゾネーターがその姿を緑色の三つ列なつたリングへと変わり、空へと昇つていく。

「王者の鼓動、今ここに列をなす。天地鳴動の力を見るがいい！」

フィールドのサルベージ・ウォリアーが三つリングに飛び込むと、リングを縦に貫く様に光の柱が発生する

「シンクロ召喚！レッド・デーモンズ・ドラゴン！」

光の柱が消え、フィールドに紅蓮の炎が悪魔を模したかの様なドラゴンが舞い降りた。

フィールド 3→2

「ブリューナクの次はレッド・デーモンズ・ドラゴンか、そのモンスターの効果ならグラ
ンエルのパークは破壊できるが機皇帝には届きはしないぞ。」

そんな、事は俺がよく分かつてゐる。

パークを破壊した所で、グランエルの攻撃力は下がらないライフを削らない限り
だが、この二体ではまだ足りないそう更にモンスターが必要だ。

「俺は、レッド・デーモンズ・ドラゴンのレベルを1下げ墓地からレベル・ステイーラを
特殊召喚。」

フィールドにまた、星マークがあるてんとう虫が現れた。

「さらに、墓地のグローアップ・バルブの効果を発動。自分のデッキの一番上のカード
を墓地へ送り、墓地に存在するこのカードを特殊召喚する。」

フィールドに、株に1つの目を持ち株の上に花を咲かせ植物のモンスターが現れた。
グローアップ・バルブ 地

☆1

【植物族・チューナー】

| | |
|---|-----|
| 攻 | 100 |
| 守 | 100 |

自分のデッキの一番上のカードを墓地へ送り、墓地に存在するこのカードを自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

「グローアップ・バルブ」の効果はデュエル中に一度しか使用できない。

「俺はレベル1レベル・ステイーラにレベル1グローアップ・バルブをチューニング。」
グローアップ・バルブが緑色のリングへと変わり空へと昇つていき、其所をレベル・ステイーラが通過すると

リングを貫く様に光の柱が発生する

「シンク口召喚。現れろ フォーミュラ・シンクロン。」

光が消えるとそこには、F-1を走る車に頭や短い手足をつけた様な機械のモンスターが現れた。

「フォーミュラ・シンクロンが召喚に成功した事により、カードを一枚ドローする。」

手札 1↓2

フィールド 4↓3

「フォーミュラ・シンクロン・・・それにシンクロンモンスターが二体、成る程。」
ドお前がやろうとしている事が解ったぞ。」

流石に、此処でこいつを出せば解るか俺がやろうとしている事は。

「俺は、更にレッド・デーモンズ・ドラゴンのレベルを2つ下げ墓地からレベル・ステイタスを二体特殊召喚する。」

フィールド 3→5

これで、レベル合計は12恐らくこれでシンクロ召喚は出来るはず後は俺次第か…「プラシドよ、お前がやろうとしている事は解るがお前は本当に出来るのか。シンクロ召喚をまともに使った事もないお前が今此処で。」

ああ、確かに俺は今回がシンクロモンスターを使うのは始めてデュエルでは何度も見たことは有るが。

実際にこれで出来るのかも解らない、ジャックなら無理矢理にでも出来そうだがな「まあ、実際出来るか出来ないかじやなく俺はやる。そして、みせてやる俺の選んだ道をな。」

「ほう、ならば見せて見ろお前の進むべき道を私に、そしてゾーンに示してみせよ。」「行くぞ！」

出来るかどうかは解らない。

失敗を起こして何も起こらないと言う可能性もある
出来なければ俺は確実に敗ける

だが――――

何故だろうな

いざこの瞬間を向かえると、先程間での不安の感情は既に無い。
今俺の中にあるものは、仲間達とすごした日々のおもいでた。

破滅の未来で出来た仲間達の日々

仲間と共に戦い、失い絶望した日々。

仲間と共に進み、希望を目指した日々。

未来での出来事は辛い思い出の方が大きい

だが、仲間と過ごした日々は俺にとって欠けがいのない思い出だ。

仲間がいたからこそ、進めた

仲間がいたからこそ、仲間の大切さを知つた
仲間がいたからこそ、仲間を失う絶望を知つた

あの時は、無理だつた・・・

だが、今は違う！　あの頃の様に無力では無い！

手を伸ばせば届く距離にある、全てが

この時代で出来た仲間の為の勝利に

今度こそ仲間を失わない為に

俺は前に進む！　仲間との思いと築き上げた絆と共に前に！

そして、コースを走っているシドの体とD・ホイールが黄金の様に輝きだし、疾走する。

「見せてみろ、お前の可能性を・・・」

「レベル5 レッド・デーモンズ・ドラゴンとレベル5 氷結界のブリューナクにレベル
2 フォーミュラ・シンクロンをチューニング！」

フィールドのフォーミュラ・シンクロンが黄金の輝きを放ちながらその姿を黄金に輝く2つの列なつたリングへと変わる

その黄金に輝くリングにレッド・デーモンズ・ドラゴンとブリューナクがリングを通過する

「仲間との絆と思いが、破滅の未来に新たな可能性を指示示す！ デルタ・アクセル・シンクロ！」

黄金のリングを貫き、そして極大の光が天まで貫く様に伸び
コースを街を世界を輝かせる。

「絶望を打ち碎け！ シューティング・クエーサー・ドラゴン！」

光が収まると、天空から神々しい輝きを威圧感を持つスター・ダスト・ドラゴンの面影
が有る

巨大なドラゴンが舞い降りてくる。

シユーティング・クエーサー・ドラゴン 光

☆12

【ドラゴン族・シンクロ／効果モンスター】

攻 4000
守 4000

シンクロモンスターのチューナー1体+チューナー以外のシンクロモンスター2体
以上

このカードはシンクロ召喚でしか特殊召喚できない。

このカードはこのカードのシンクロ素材としたチューナー以外のモンスターの数まで1度のバトルフェイズ中に攻撃する事ができる。

1ターンに1度、魔法・罠・効果モンスターの効果の発動を無効にし、破壊する事ができる。

このカードがフィールド上から離れた時、「シユーティング・スター・ドラゴン」1体をエクストラデッキから特殊召喚する事ができる。

フィールド 5→3

「ああ、そうだ。 このカードが俺の答えた!」

仲間達の思いと絆と共に俺は進む、そして必ずモーメントと人がただしく進む道を俺は見つけ出してみせる。

「俺は更に、墓地のゾンビキャリアの効果を発動。手札を一枚デッキの上に戻し墓地からゾンビキャリアを特殊召喚。」

フィールドに、四肢をそれぞれ別々のパーティを繋いだ小さい腐ったモンスターが現れた。

手札 2↓1

フィールド 3↓4

「フィールドのレベル1、レベル・ステイーラ二体にレベル2、ゾンビキャリアをチュー
ニング！」

フィールドのゾンビキャリアが2つの列なつた緑色のリングになり、そこに二体のレベル・ステイーラが通過すると

リングを貫く様に光の柱が発生し光が止むと

フィールドに、鋭い赤い指に黒い装甲を持つ右腕のモンスターが現れた。

フィールド 4↓2

アームズ・エイド 光

☆4

【機械族・シンクロ／効果】

攻1800

守1200

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に装備カード扱いとしてモンスターに装備、または装備を解除して表側攻撃表示で特殊召喚できる。

この効果で装備カード扱いになつている場合のみ、装備モンスターの攻撃力は1000ポイントアップする。

また、装備モンスターが戦闘によつてモンスターを破壊し墓地へ送つた時、破壊したモンスターの元々の攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

「アームズ・エイドの効果を発動。自分のメインフェイズ時に装備カード扱いとしてモンスターに装備する、俺はシユーティング・クエーサー・ドラゴンにアームズ・エイドを装備。」

空中を飛んでいる、シユーティング・クエーサー・ドラゴンの右腕のにアームズ・エイドが形を変形させながら合体する。

フィールド 2→1

シユーテイング・クエーサー・ドラゴン

攻撃力 4000→5000

「攻撃力5000…通常のモンスターではひと堪りもないが、私のグラナエルにはまだ届きはしないぞ、プラシンドよ。」

「まだこれからだ、俺は手札から死者蘇生を発動。墓地から甦れレッド・デーモンズ・ドラゴン！」

フィールドに紅蓮の炎の柱が発生し、炎がその姿をドラゴンへ変えていき。フィールドに悪魔を模したかのようなドラゴンが現れた。

手札 1→0

フィールド 1→2

「レッド・デーモンズ・ドラゴンか、そのカードには何か思い入れが有るようだな、プラシンドよ。」

「ああ、そうだな。このカードで勝つてこそ彼奴が満足するだろうからな。それとホセ、このターンで決着を着けてやる。」

「ほう、それは面白いやれる物ならやつてみるが良い。お前にこの絶望を越える事が

出切るか。」

「やつてやるさ、仲間達のカードが俺を勝利へと導く。俺は伏せカードの最終突撃命令を発動！」

最終突撃命令 罠

【永続】

このカードがフィールド上に存在する限り、フィールド上に存在する表側表示モンスターは全て攻撃表示となり、表示形式は変更できない。

「……成る程、そのカードならば私にダメージを与える事が出来るが、ライフをゼロにするには届きはしないぞ。」

「ふん、なら確かめてみろその目でどうなるかんな！ バトルだシュー・ティング・クエーサー・ドラゴンでグランエルGに攻撃！」

フィールドに存在する、シュー・ティング・クエーサー・ドラゴンの回りにくるくると2つの丸い星の様な物が現れ

その2つの星が、その姿を素材としたレッド・デーモンズ・ドラゴンとブリューナクの二体の姿へと変わり

グランエルGへと二体のドラゴンが強力なエネルギーを放ちながら、突撃しフィール

ドに凄まじい衝撃を巻き起こす。

ホセ

L P 1 0 2 0 0 → 6 5 0 0

「ぐううう、だがグランエルCの効果を発動。 1ターンに一度自分フィールド上のモンスターは破壊されない。 更に私がダメージを受けた事でトラップ発動！ インフィニティ・フォース、相手フィールド上のモンスター全てを破壊する！」

インフィニティ・フォース 罷

【通常】

自分がフィールド上に「機皇帝」と名のついたモンスターが表側表示で存在する場合に自分がダメージを受けた時に発動する事ができる。

相手フィールド上に存在するモンスターを全て破壊する。

トラップが発動すると空に∞のマークが現れ、そこから此方のモンスターに向かい天空から雷が落ちてくる。

「さあ、これが通ればお前のモンスターは全滅だ、此所で終わりでは無いので有ろうプラシド！」

「ああ、その通りだ！ トラップ発動！ スターライト・ロード！ フィールドのカード

が二枚以上破壊される時に発動し相手の発動したカードを無効に破壊する、その後エクストラデッキからスターダスト・ドラゴンを特殊召喚する。」

天空から落ちてくる雷がモンスターに届くまえに、突如発生した光の壁に遮られ雷がモンスターに届く事は無かつた

そして、光の壁が集束しその姿を純白の翼を持つ白いドラゴンがフィールドに舞い降りる。

ホセ

魔法・罠 3→2

シド

魔法・罠 2→3

魔法・罠 1→0

「そんなカードを伏せいたとはな、だが、スターダストとレッド・デーモンズではまだ私のライフを削り切れしないぞ！」

「このカードは、破壊対策ようだ。 本命はシユーティング・クエーサー・ドラゴンだ！ シューティング・クエーサー・ドラゴンはチューナー以外の素材にしたモンスターの数攻撃が出来る！」

「チューナー以外の素材にしたモンスターの数だと……！」

フィールドのシユーティング・クエーサー・ドラゴンの右腕の拳にエネルギーが集まり出す

「シユーティング・クエーサー・ドラゴンでグランエルGに攻撃！」

右拳に集まつたエネルギーを腕を振るい、グランエル目掛け強大なエネルギーの固まるが襲い掛かる

「だが、そう易々とやらせんトラップ発動 ドレインシールド。 シユーティング・クエーサー・ドラゴンの攻撃を無効にし、その攻撃力分ライフを回復する。」

ドレインシールド 罠

【通常】

相手モンスターの攻撃宣言時に発動できる。

攻撃モンスター1体の攻撃を無効にし、そのモンスターの攻撃力分だけ自分のライフを回復する。

グランエルGから、エネルギーによるシールドが出来、攻撃を防ごうとする
だが、

「シユーティング・クエーサー・ドラゴンの効果を発動！ 1ターンに一度、魔法・罠・

モンスター効果を無効にし破壊する！ ドレインシールドの発動を無効にし破壊する！

「なんだと!?」

グランエルGが発生させたシールドが消え去り、グランエルの右腕を跡形も無く消し飛ばした。

LP 6500→2800

フィールド 5→4

魔法・罠 2→1

「更に、モンスターを破壊し墓地へ送った事によりアームズ・エイドの効果を発動！ 破壊したモンスターの攻撃力ぶんのダメージを相手に与える！」

アームズ・エイドを装備した右腕からホセに向け、エネルギー波が発射されダメージをあたえる。

LP 2800→1500

「ぐつ・・・」

「スターダスト・ドラゴンでグランエルTに攻撃！ シューティング・ソニック！」
スターダスト・ドラゴンの口からグランエルT目掛け流れ星の様に輝き凄まじい速さ

の攻撃を繰り出し

グランエルの頭部を吹き飛ばす。

LP 1500→200

フィールド 4↓3

「ホセ……これで最後だ！ レッド・デーモンズ・ドラゴンで機皇帝グランエル∞に攻撃！」

レッド・デーモンズ・ドラゴンの右腕のに紅蓮の炎が燃え盛り
グランエルへと攻撃をしかける。

「さあ、プラシドよ私の絶望を産み出した物を破壊して見せろ！」

「お前の望みを叶えてやる！ アブソルート・パワー・フォース！」

紅蓮の炎を纏つた拳がグランエルの装甲を貫き、コアを破壊し
紅蓮の炎がグランエルの中から全てを破壊する。

そして、グランエルを中心に炎の爆破が起こり

全てを破壊した紅蓮の炎の中に、佇むのは紅蓮の龍のみ。

LP 300→0

フィールド 3↓0

「フハハハ……私の敗けか。 だが悔いはないグランエルの破壊されるのが見れたのだ

からな。」

「俺達にとつては因縁ぶかいからなあの見た目は。感謝しろよな希望通り破壊してやつたんだ。」

「何をいっている、老人の願いを叶えるのは若者の義務だ。恩着せがましく言うな。」
ホセめ、老人だとどこにこんな高性能ジジイな老人がいると言うんだまつたく。

「プラシドよ。」

「何だ、ホセ。」

「お前は私に勝つた、そしてお前はデュエルで私に可能性を見せた、人とモーメントとの新たな道を。お前は、お前の道を進むといい。」

デュエルを通して、どうやら伝わっていたらしい俺の思いが

「私は道を譲るとしよう、ルチアーノには私から話しておこう。アポリアに戻りたいので有れば、明日にでも連絡をよこすがいい。」

「ああ、ならそうさせて貰うぞ。ルチアーノにただを捏ねられるのは嫌だからな。」

「ハハハハ、あやつも未来を変えようと必死なのだ、そんな風に言つてやるな。」

そんな事は解っている、あいつも未来を変えたいのは同じだ。

あの破滅の未来を変えるためなら俺達の中で一番容赦が無くなるから、それが今回の禁止カードの解禁とかな。

「そろそろ、コースも会場に着く。最後にプラシドよお前が選んだ道だ後悔するなよ。」「当たり前だ、誰が後悔するか今度はこの手で掴み取つてやる零れ落ちたものをな。」「そうか。」

◆
満足そうなその言葉を最後に、それぞれのD・ホイールが会場につき各々のチームメンバーが居る場所へと向かう。

「どうやら勝った様だなシドは。」

デルタアクセルシンクロか中々面白い物を見れた、今度やってみるか。
しかし、シドの奴最後はレッド・デーモンズ・ドラゴンで決めるとはなあいつめ、粹

なことをしてくれる。

「ジャック様。」

「俺がそんな風に考えていたら、D・ホイールから降りていたシドから呼ばれていた。
「何だシド。」

「ジャック様との約束を果たして来ました。 やはりジャック様はキングですね。」

俺の代理でデュエルするから、自分は戦わないあくまで自分は代理。
自分の番までは回つてこない。

デュエルで戦えば俺が勝つそのために、俺のデツキで戦つた・・・
それを証明するために。

コナミのデュエル馬鹿といい

俺のキングへのこだわりといい

こいつの仲間を思う気持ちといい

このチームには馬鹿しかいないらしいな

まあ、俺にとつては最高の仲間だがな。

「当然だ。 俺はキングだからな。 だが、シド感謝するぞ、お前のお陰で俺はキングで

いられた、お前との約束も破らずにすんだ。」

「私は自分のやるべき事をしただけです、ジャック様はキングで私の仲間（とも）ですか
ら。」

仲間（とも）かどうやら俺やコナミに作つていた壁をシドは取り払つたらしい
これでようやく、本当の仲間と言える関係になれるな俺達をは。

「これからも、宜しく頼むぞシド仲間（とも）とて。」

「ええ、此方こそジャック様。」

お互に硬く握手を交わし、俺達は仲間（とも）となつた。

第十九話

チーム・ニューワールドとの試合を終え最後の戦いの前に一時の休息を取っていた。

俺は今日も、満足トリシューラプリンを買うためにまた行列に並んだがまたしても買うこと出来ず仕方なく、普通のトリシューラプリンを幾つか買い家へと帰宅した。コナミは、朝からD・ホイールの調整などで忙しくシドは今日は他の用事があるので来れないだそうだ。

俺も、此といって予定は無いが明日までには故障した片腕を完璧に動くように調整しなければならない。・・・

だが、その作業も昨日から作業をしている為にほぼ九割が終わっている、完全修復までそう時間は掛からないだろう。

腕が直るのは良いことだが、此が終ると俺が暇になつてしまふどうした物か、コナミの邪魔をするわけにはいかないシドに連絡を入れる訳にはいかないしな用事があるらしいしな。

そうなると、今日も1日いつも道理に過ごすことになるのが・・・まあいいか、デュエルの楽しみは明日の為に取つておけばいいか。



さて、昨日ホセガルチアーノを説得しておくと行つていたが早速だが行つてくるとす
るか

今日は他にもやることがあるからな時間を無駄に使う訳にはいかないからな。

青年は帯刀していた、剣を抜き取り目の前の空間を切り裂くように剣振るうと、剣が
切り裂いた空間が開く孔が明く

「さて、移動するか。」

青年は躊躇する事なく空間に開いた孔へと進んでいくき青年が孔に完全に入ると空

間に開いた孔が閉じた。

そして、青年は先程とは違う空間へと移動していた。

「ホセ、言われた通りに来たがルチアーノの説得は出来ているのか？」

まあ、ホセの事だ何とかルチアーノを説得しているだろう。

「プラシドよ来たか、安心しろルチアーノなら話し合いで解決した。」

「そうか、所でホセそのルチアーノだが一体どこに居る見当たらないが……」

辺りを見回しても、この空間には目立つ赤い髪のルチアーノが見当たらない
ただ、ルチアーノの代わりにカモメのぬいぐるみなら山積みにされているだけだ。
「ルチアーノなら、其所だ。」

ホセが指差した場所は、俺が今見ていたカモメのぬいぐるみの山だった……
いや、待て……

ルチアーノがあの、カモメのぬいぐるみの山に埋もれているとでも言うのか。
「ホセ……俺にはカモメのぬいぐるみしか見えないが……」

「ルチアーノは、あのカモメのぬいぐるみに埋もれている。」

馬鹿な・・・

「冗談だろホセ。」

「なら見て見ろ」

「ああそうさせて貰おう。」

あのカモメの山にルチアーノが埋もれているだと、馬鹿なそんな訳が有るわけないだ
ろう。

俺は、そう思いながらカモメのぬいぐるみを手に取り動かしていくと・・・

ルチアーノがいた・・・それも笑顔だ・・・

俺はそつと、カモメのぬいぐるみを元の位置へと戻した

「ホセ、説得出来ているのかこれ。」

「安心しろ大丈夫だ、問題は無い。」

心配だなホセの言い回しだと何故か不安だが、個々はホセを信じるしかないか。

「ルチアーノのそろそろ時間だ。」

ホセがカモメのぬいぐるみの山に声をかけると、ぬいぐるみの山が震え出し火山が噴火するかの様にルチアーノが勢いよく飛び出して来た。

「どう！ 僕参上！」

そんな声と共に、ぬいぐるみの山から飛び出してきたルチアーノのが地面へと着地をした

カモメのぬいぐるみを持ちながら。

「ちえ、もう時間かよ。」

「まだ、満足していなかルチアーノよ。」

「別に満足ならしてるよ、ただそればく言つただけださ。」

ルチアーノは一体、どんな事に満足してたんだ

カモメのぬいぐるみに埋もれる事が願いだつたのか？ 解らんがルチアーノのが満足しているならいいか、深く考えるのは止めよう。

「では、プラシドよ始めるぞ。準備はよいか。」

「俺は何時でも良いがルチアーノお前は良いのか？」

「ふん、僕も準備はいいさ、お前があの未来を変えてくれるなんならお前に任せるよ。」

そんな風につんけん何時も道理に言つてゐるが・・・

やはり、ルチアーノが持つてるカモメのぬいぐるみのせいでな・・・あれだな。

「では、プラシドよゾーンの事は任せたぞ。」

「あと、未来の事も忘れるなよプラシド。」

そう言い放つたホセとルチアーノは、各々の顔に着いていた∞のマークがある仮面が外れ、俺の顔に着き

体の方も幾つかのパーツに別れ俺の体へと入り、俺が元に戻つていくのが解る。

そして、全てパーツが俺に取り込まれアポリアとしての能力が十全に使える様になつたのが自分自身でもわかる

「ホセ、ルチアーノ任せろゾーンも未来も必ず何とかしてみせるさ。」

アポリアとしての能力が戻つた事だ後は、アンチノミーに会いに行くか彼奴がどういう選択をするのか聞かなければならぬ。

アンチノミーに俺が出した事が解る様にメッセージを出しておこう。

まあ、アンチノミーがまだ記憶が戻っていないで俺が指定した場所に来なかつたら夜中にでも遊星達にバレない様に連れ出してアポリアの能力で無理矢理記憶のブロックを外して、アンチノミーに話を聞くか。

第二十話

アンチノミーにメッセージを送り、俺は待ち合わせの場所に指定した人気の無い工場地帯に来ていた。

「そろそろ俺が指定した時間だが・・・果たして来るかな。」

ブルーノは5D'sのメカニックだからな明日の決勝に備えてDホイールの調整などの作業があるはずだ

まあ一日中 何かしらの作業をしていなければ来れると思うが、後記憶を取り戻していればだがな。

そんな事を考えていた時だ、先端が異様に長く前輪はなく後輪が巨大なモノサイクルのD・ホイール「デルタ・イーグル」に乗った赤いサングラスを掛け青いスーツを着たアンチノミーが約束の時間と共に現れた。

・・・あのDホイールを見ている思うのだが、あれはどうやってバランスをとつて走つたりコーナーリングなど曲がっているんだろうな?

まあ、未来の技術だと考えれば不思議ではないのか？

「アンチノミー、よく来てくれたな。」

「君は、アポリアでいいのかい？　まあ私も君には話したい事が合つたからね調度良かったよ。」

「ああ、俺は一応アポリアだ姿を元に戻していいだけだ。」

元の姿・・・何故か俺だけ他の2人と違い大分人間だった頃とは違うあの姿・・・
人間だった頃より伸長が高くなつたり、胸にマークがあるせいで肩幅が凄まじく広
がつたり、腕や手が太くなりカードを掴みづらくなつたり
そして、睫毛が凄まじい事になる元の姿・・・

「・・・ゾーンは俺に怨みでもあるのか・・・」

「？　どうしたんだアポリア、ぶつぶつと独り言何かを呟いて。」

「いや何でもない、それよりアンチノミー早速だが話しきをするとしようか。」

まあ、大体はアンチノミーが話そうとしている事は予想はついているがな。

「そうだな、ならアポリア私はまず呼び出した君の話を聞きたい。」

「そうか、なら俺がアンチノミーお前を呼び出したのは今後の事についてだ。まあ今後のと言つてももう時間は残りわずかだが。」

恐らく、5Dsとの戦いが終わればアーククレイドルは起動する。

そうなつたらアンチノミーには遊星ギアを守る役目が待つていて、まあそれは俺にも言えた事だが俺は拒否する、ゾーンに会いに行くからな。

「アンチノミーお前は、アーククレイドルが起動したどうする？　俺は遊星ギアの守護はせずゾーンを止めに行くがお前はどうする。」

「…やはりその事か、君の考えは昨日の試合で大体分かつていたから驚きはしないよ。」「俺を止めるか、アンチノミー。」

実際これは、あり得る事だ。

だが、俺としてはアンチノミーとは敵対はしたくない出来れば協力してくれると有りがたい、これ以上は仲間を失いたくはないからな。

「君を止めるか…確かにゾーンの望を邪魔する君は見過ごせないだが…私には、君を止めるべきなのかが分からぬ。」

「アンチノミーお前。」

「ゾーンの邪魔をする君を放置するべきでは無いのは解つてゐる。だが、私も日に日

に思つていた事がある。ゾーンは本当にアーククレイドルを落とす事が望なのか？

と。」

アンチノミーも違和感には気付いていたと言うことか。

しかし、日に日に思つていたと言うことは記憶を早い段階で取り戻していたと言うことか。

そうすると、最近のブルーノの電波な発言やDホイールを見て目の色を変えていたのは演技だったのか・・・それともあれがアンチノミーの素なのか？

「ゾーンは私に遊星達を守れと命令されていた。その理由はアーククレイドルの出現を促すためにだ。だが、遊星達のチーム、5 D's は確かに強いがアーククレイドルを出現させるなら他にもやり方はある、なのに何故遊星達を守るように言つたのかが気になつた。」

確かに、アーククレイドルを出現させるためなら幾つかの方法がある。それなのにわざわざ遊星達を守るように言うのは変だな、この時代なら他にも強いチームは存在するにも関わらず、まだ発展途上の遊星達を守るのは可笑しいからな。

「ゾーンが本当にアーククレイドルをこの街に落とす気なら、遊星達を守るような命令

はせず君達を手伝うように命令しサー・キットの完成を早めるはずだ。それなのに私は遊星達を守るように命じられた。」

ゾーンが本気でアーケクレイドルを落とす気なら、わざわざ俺達が表舞台に立つ必要はない邪魔を去れないようには今までどうりに裏方で操りサー・キットを完成をさせればいい、表舞台に立つてリスクを増やす必要は無い。

「それに、遊星達を守るに当たつて私は遊星達に何時も付ききりと言うわけには行かない、必然的に遊星達には強くなつて貰う事になる君達に負けない為には。」

そう遊星達を守るに当たつて最大の敵は俺達だから、シンクロキラーを使い厄介なシグナー達を狙つてくる俺達が。

「遊星達は強くなつていた。君達と戦い強敵と戦い強く、そして、たしかに遊星達はサー・キットの完成には貢献している、だがわざわざ遊星達にこんなことをする必要があるかが疑問だつた、アーケクレイドルを落とすにも関わらず。」

まるで、遊星達を守り導いている見たいだからなこれは。

「だから私は、考えたもしかしたらゾーンはアーケクレイドルを落とす以外にも望が有

るのでは無いかと……それが、遊星達なのではと。」

「そう、ゾーンがわざわざ遊星達を守るように命じたのは遊星達に希望を求めたからではないのかと、アーフクレイドルを落とし未来を変える其がゾーンの望だが、遊星達に希望を見いだし遊星達が未来を変える……ゾーンは心のどこかでそう思つてるのでないかと。」

それは俺も思つた事だなゾーンはアーフクレイドルを落とし未来を変える以外にも、遊星達に希望を求めているのではないかとだが……

「ああ確かに、だがそれはあくまでも希望的予想出しかない。本当にそうかはゾーンのみが知つてゐる事だ……だがそれでも俺は、その僅かな希望を叶えてやりたい……俺の思い込みだつたとしても、だからこそ俺はゾーンを止める。」

ゾーンに後悔をさせないために、昔の様に希望を求めて欲しいだから。

「アーポリア、君はもう進む道を決めている様だね。だけど私は……ゾーンの望どうりにアーフクレイドルを落とすのか、友人として君の様にするべきかで迷つてゐる……私はどちらを取るべきなのかと。」

「こればかりは、俺がどうこう言うべきでは無いな。

アンチノミーが決める道だ、それで俺と敵対しようとな。

「私は、遊星達を間近で見てきただからこそ彼等の可能性にかけるのも悪くないと思つているだが・・・」

「アンチノミー、お前が決める道だ俺はとやかく言う気はないが。迷つているなら、その迷いを思いをデュエルでぶつけてこい。」

「アポリア。」

「お互いデュエリストだ、そちらの方が早い気がするしな。」

「はは、確かにそうだな。なら私は、君に今の迷いを思いを全てぶつけるとしようか。」

デュエリストなら話すよりも、デュエルした方がお互いを解り会える。今更だが、デュエルって万能な気がしてきたな。

「全力でこいアンチノミー、俺も全力でお前の思いを受け止めてやる!」

そして、互いの腕にはいつの間にかデュエルディスクが装着されており互いにデッキから五枚の手札を引き

「行くぞ、アンチノミー。 デュエル開始だ!」

第二十一話

デュエリストならデュエルで語れ、デュエルを通し相手の考え方や思いを感じる……誰かがそんな事を言つていた気がする。

だから、アンチノミーとデュエルする。

解り合う為に、彼奴の道を知るために、だが俺達がデュエルか……

「アンチノミー、そう言えば俺達がデュエルするのは此で何気に初めてだな。」

「唐突にどうしたんだいアポリア。確かにそうだねこう言う風にデュエルをするのは初めてだね。あの未来じやあする時間も暇も無かつたからね……」

「だな、こんな事をする余裕は無かつたからな。」

全ては、破滅した世界を再生させるために過ごしていたからな俺達は。

「互いの道が別れるかも知れないと言うのに俺はお前とデュエルする事に、胸が高鳴る、仲間との初めてのデュエルは。」

「それは私もさ、私が選ぶ選択して君とは敵対するかも知れないのに……このデュエル私は楽しみだよ」

お前もそう言う風に思つて暮れるなら上々だな、お互いを仲間思いのデュエリストと

言う訳か。

「先行は、アンチノミーお前に譲るさ。」

「それは有り難いね、君のデツキは対シンクロデツキだからね先行と言うアドバンテージは有効に使わせて貰うよ。」

「ああ、そのことなら心配するな俺が使うのHEROデツキだからな。」

「HERO？ 確かに大会で使用してたねそんなデツキを、良いのかい私のデツキはガチガチのシンクロデツキなのに機皇帝を使わなくて。」

「大丈夫だ、問題ない。」

俺が進む道には機皇帝は――絶望は要らないからな。

「そうかい、君がそう言うなら。 始めるとしようか。」

アンチノミー

LP 4000

手札5

「私のターン、ドロー。」

手札5↓6

「私は手札から、TG カタパルト・ドラゴンを手札から召喚。」

フィールドに、頭に真っ直ぐに伸びたら角とカタパルトが合わさったような物がつき、茶色い皮膚に体中に赤いラインがある四足歩行のドラゴンが現れた。

TG カタパルト・ドラゴン 地

☆2

【ドラゴン・効果】

攻 900

守 1300

1ターンに1度、手札からレベル3以下の「TG」と名のついたチューナー1体を特殊召喚する事ができる。

手札 6↓5

フィールド 0↓1

「召喚した、TG カタパルト・ドラゴンの効果を発動。 手札からTG ジェット・

ファルコンを特殊召喚。」

フィールドに、背中にブースターを背負つたら赤い顔をしたハヤブサが現れた。

TG ジェット・ファルコン 風

☆3

【鳥獣族・効果】

攻1400

守1200

このカードがシンクロ召喚の素材として墓地へ送られた場合、相手ライフに500ポイントダメージを与える。

手札 5↓4

フィールド 1↓2

「レベル合計は5・・・早速来るか。」

「そうだ、レベル2のカタパルト・ドラゴンにレベル3のジェット・ファルコンをチューニング。」

フィールドのジェット・ファルコンがその姿を三の列なつた緑のリングへと変わり
「リミッター解放、レベル5！ レギュレーターオープン！ スラスター・ウォームアップ、
オーケー！ アップリンク、オールクリアー！」

カタパルト・ドラゴンがリングを通過すると、リングを貫く様に光が発生する

「GO、シンクロ召喚！ カモン、TG ハイパー・ライブラリアン！」

光が止むと、フィールドに白いマントを纏かせ本を片手に持った黒と白の衣装を着た司書が現れた。

T G ハイパー・ライブラリアン 閻

☆5

【魔法使い族・シンクロ／効果】

攻 2400

守 1800

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

このカードがフィールド上に表側表示で存在し、自分または相手がシンクロ召喚に成功した時、自分のデッキからカードを1枚ドローする。

フィールド 2↓1

「T G ジェット・ファルコンがシンクロ素材として墓地へ送られた事により、相手に500ポイントのダメージを与える。」

フィールドに、ジェット・ファルコンの形をした影の様な物が現れ俺の体を貫くシド（アポリア）

L P 40000→3500

「（500削られたか、それよりも鬼畜な司書か、俺のデツキはシンクロモンスターいない、俺がシンクロ召喚をしない分効果は半減だと良いがな。）」

「カードを3枚伏せて、ターンエンドだ。」

手札 4↓1

フィールド 1

魔法・罠 0↓3

「見せて貰うよアポリア、君が選んだデツキの力を。」

「存分に味わえ俺のターン、ドロー！」

手札 5↓6

「（手札は悪くないか、ライブラリアンをこのターンで破壊しておきたいな。）俺は手札

から、未来融合——フューチャー・フュージョンを発動。」

未来融合——フューチャー・フュージョン 魔

【永続】

自分のエクストラデッキの融合モンスター1体をお互いに確認し、決められた融合素材モンスターを自分のデッキから墓地へ送る。発動後2回目の自分のスタンバイフェイズ時に、確認した融合モンスター1体を融合召喚扱いとしてエクストラデッキから特殊召喚する。このカードがフィールド上から離れた時、そのモンスターを破壊

する。そのモンスターが破壊された時このカードを破壊する。

手札 6↓5

魔法・罠 0↓1

「俺は、エクストラデッキのV・HERO トリニティーを選択しデッキからデッキからE・HERO スパークマン、ワイルドマン、シャドー・ミスト を墓地へ送る。そして、墓地へ送られたシャドー・ミストの効果を発動デッキからE・HERO エアーマンを手札に加える。」

手札 5↓6

「俺は手札から、E・HERO オーシャンを攻撃表示で召喚。」

フィールドに、先端が三日月の槍を持った頭にヒレを持つ水色の半魚人が現れた。

手札 6↓5

フィールド 0↓1

「俺はオーシャンにマジックカード、マスク・チエンジを発動！」

フィールドのオーシャンの顔に光輝くマスクの様な物がつき、オーシャンの体が光に包まれ姿を変えていく。

デフォルメされた漢字の水がマスク、胸、ベルトに存在し右手に小型の銃を持つた青い装甲のHEROが現れた。

「M・HERO アシッドを特殊召喚だ。アシッドの召喚時効果、相手の魔法・罠カードを全て破壊する。」

手札 5↓4

「そうは、行かないよアポリア。トラップ発動！ 神の警告、ライフを2000ポイント払い M・HERO アシッドの特殊召喚を無効にする。」

フィールドのアシッドに、突然空から光が差し爆発する

神の警告 罠

【カウンター】

2000LPを払つて以下の効果を発動できる。

モンスターを特殊召喚する効果を含む、モンスターの効果・魔法・罠カードが発動した時に発動できる。その発動を無効にし破壊する。

自分または相手がモンスターを召喚・反転召喚・特殊召喚する際に発動できる。それを無効にし、そのモンスターを破壊する。

LP 4000↓2000

魔法・罠、3↓2

「まだ、始まつたばかりだからねそう簡単にはやらせないよ。」

「だがライフは此で半分だ、序盤から飛ばしすぎだろアンチノミー。」

「伏せカードとライブラリアンを破壊されるよりはましだからね。」
「俺は、カードを二枚伏せターン終了だ。」

フィールド 1 → 0

手札 4 → 2
魔法・罠、0 → 2

第22話

アンチノミーのライフが半分になつたのは良いが、此方はアシッドを破壊されたかライフは此方が上だが油断は出来ないか。

「私もターン、ドロー」

手札 1→2

「君のHEROデッキが戦うのは、一度しか見たことがないが大会では属性HEROも使つていた事を考えると、君のデッキは融合HEROやM・HEROを主体としたデッキ。」

当たつているな、相変わらずの洞察力だなアンチノミー。

「そう考へるとデッキの内容は大体解つてくる、融合関連カード、HEROのサポートカード、残りは蘇生や此方の動きを阻害するカード。」

デッキ内容も大体は合つてゐるか、まあ俺もアンチノミーが使うデッキは大体は内容を知つてゐる。

デッキ内容を知つてゐるて言ふ此方のアドバンテージは、此でほぼ無くなつてしまつ

た訳か・・・

「そして、伏せたカードは恐らくどちらかは此方の動きを防ぐ為のカード。だからブラフか本命どちらかは破壊させて貰うよ、私は手札から、TG サイバー・マジシャンを攻撃表示で召喚。」

フィールドに、魔法使いが着る衣装を機械的にした小さな魔法使いが現れた。

TG サイバー・マジシャン 光

☆1

【魔法使い族・効果】

攻 0
守 0

自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードを「TG」と名のついたシンクロモンスターのシンクロ素材とする場合、手札の「TG」と名のついたモンスターを他のチューナー以外のシンクロ素材とする事ができる。

フィールド上に存在するこのカードが破壊され墓地へ送られたターンのエンドフェイズ時、自分のデッキから「TG サイバー・マジシャン」以外の「TG」と名のついたモンスター1体を手札に加える事ができる。

手札 2↓1

フィールド 1→2

「そして、サイバー・マジシャンの効果を発動。TGと名のついたシンクロモンスターのシンクロ素材とする場合、手札のTGと名のついたモンスターを他のチューナー以外のシンクロ素材とする事ができる。手札のレベル4 TG ラツシユ・ライノスにフィールドのレベル1 TG サイバー・マジシャンをチューニング。」

フィールドのサイバー・マジシャンがその姿を緑色のリングへと変化し、二足歩行の機械の鎧や装備を着けたサイがそのリングを通過するとリングを貫くように光が発生する

「リミッター解放、レベル5！ ブースターランチ、OK！ インクリネイション、OK！ グランドサポート、オールクリア！ GO、シンクロ召喚！」

光が消えると、フィールドにピンク色の髪をし金色の装飾に赤い色をした鎧を纏い背中にX字に羽が生えた魔法使いが現れた。

「カモン！ TG ワンダー・マジシャン。」

TG ワンダー・マジシャン／T.G.

光

☆5

【魔法使い族・チューナー効果】

攻 1900

守 0

チューナー+チューナー以外の「TG」と名のついたモンスター1体以上 このカードがシンクロ召喚に成功した時、フィールド上に存在する魔法・罠カード1枚を選択して破壊する。

フィールド上に存在するこのカードが破壊された時、自分のデッキからカードを1枚ドローする。また、相手のメインフェイズ時、自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードを シンクロ素材としてシンクロ召喚をする事ができる。

フィールド 2→1

ワンダー・マジシャンか此で俺の三枚のうち一枚は破壊されるか、それにカードもドローされるか。

「TG ワンダー・マジシャンの召喚時効果を発動、君の伏せカードの右側を破壊させて貰うよ。」

未来融合は破壊せず、伏せカードを破壊しにきたか。

まあトリニティーは2ターン後だからな召喚されるのは、だが。

「ただ破壊されるだけだと思うなよ、トラップ発動。 ブレイクスルー・スキル、TG

ワンダー・マジシャンの効果をターン終了まで無効にする。」

ブレイクスルー・スキル 罷

【通常】

相手フィールド上の効果モンスター1体を選択して発動できる。

選択した相手モンスターの効果をターン終了時まで無効にする。

また、墓地のこのカードをゲームから除外し、相手フィールド上の効果モンスター1体を選択して発動できる。

選択した相手の効果モンスターの効果をターン終了時まで無効にする。

この効果はこのカードが墓地へ送られたターンには発動できず、自分のターンにのみ発動できる。

魔法・罷
3→2

「伏せカードの一枚は、ブレイクスルー・スキルだつたのか。しかし右側のカードを

守つたと言う事はそちらが本命だということか。」

「さて、どうだろうな。」

「TG ハイパー・ライブラリアンの効果を発動、カードを1枚ドローする。恐らく君の事だ、もう1枚のカードは攻撃を防ぐ為の物だろう。」

恐らく君

読まれているか、あの2体の攻撃で俺のライフはゼロ
防ぐ以外には手は無い訳か。

「私は手札から、手札からTGX300を発動。自分フィールド上のTGと名の付いたモンスター1体につきフィールド上のモンスターは攻撃力を300ポイントアップする。私のフィールドにはTGと名の付いたモンスターは2体、それぞれ600ポイント攻撃アップだ。」

TGX300 魔

【永続】

自分フィールド上に表側表示で存在する「TG」と名のついたモンスター1体につき、自分フィールド上に表側表示で存在するモンスターの攻撃力は300ポイントアップする。

手札 1↓0

魔法・罠 3↓4

TG ハイパー・ライブラリアン 2400↓3000

TG ワンダー・マジシャン 1900↓2500

「念の為に攻撃力も上げさせて貰うよ。

行くよアポリア、バトルTG ワンダー・マジ

シャンでダイレクトアタック。』

ワンドー・マジシャンから白い光線が放たれ、フィールドに防ぐものがいない俺はライフを削られた。

LP3500↓1000

「更に、TG ハイパー・ライブラリアンで攻撃。このアタックが通れば君のライフはゼロだ、どうするアポリア。』

ハイパー・ライブラリアンが持っていた本を閉じ、本を持っている腕を振り上げ本の角が此方に当たる様に腕を振り下ろす。

「トラップ発動、フローラル・シールド。ハイパー・ライブラリアンの攻撃を無効にし、俺はカードを1枚ドローする。』

手札 2↓3

魔法・罠 2↓1

「攻撃を防いだ上にドローとは、やるねアポリア、ターンエンドだ。』

「ふん、俺のターン、ドロー。』

手札 3↓4

次のターンでトリニティーは召喚される、その前に邪魔となる伏せカードは破壊して
おきたいが・・・

最大で二枚か破壊出来るが、どうするTGX300は無視し伏せカードを一枚か、TGXと伏せカードか・・・

「俺は手札から死者蘇生を発動、墓地からE・HERO シャドー・ミスドを守備表示で
特殊召喚だ。」

フィールドのモンスターゾーンの1つに光が差し込むと、そこに黒い霧が発生し黒い
人型へ姿を変えていく。

「シャドー・ミストが特殊召喚された事により効果を発動、デッキからマスク・チエンジ
を手札に加える」

手札 4↓3↓4

フィールド 0↓1

「俺は手札からE・HERO エアーマンを攻撃表示で召喚。」

フィールドに、背中に三角形の翼を最もHEROが現れた。

「エアーマンの召喚時効果を発動、フィールドのこのカード以外のHEROの数少相
手の魔法・罠を破壊する、その効果が発動する前に速攻魔法、マスク・チエンジを発動。」

」

エアーマンの顔に、光るマスクが装着され光に包まれその姿を変えていき
フィールドに白いマントを纏かせ、緑色の装甲に包まれたHEROが現れた。

手札 4↓2

フィールド 1↓2

「M·HERO カミカゼを特殊召喚、そして、エアーマンの発動した効果により真ん中と左側の2枚の伏せカードを破壊する。」

「そう来たかい、だけど私もただでは破壊されないよ君が選んだ1枚はTGX3-DX2、そして、トラップ発動、墓地のラッシュ・ライノス、サイバー・マジシャン、ジェット・ファルコンをデッキに戻しデッキからカードを2枚ドローする。」

TGX3-DX2 罰

【通常】

自分の墓地に存在する「TG」と名のついたモンスター3体を選択して発動する。
選択したモンスターをデッキに加えてシャッフルする。

その後、自分のデッキからカードを2枚ドローする。

手札 0↓2

カードを二枚ドローされたか、だがカミカゼは召喚出来た此れでアンチノミーは攻撃が一度しか出来ない。

「行くぞ、M・HERO カミカゼでTG ワンダー・マジシャンに攻撃。」
フィールドのカミカゼが、ワンダー・マジシャンを攻撃す為に白いマントを靡かせながら高速でフィールドを駆ける

そして、それを迎撃する為にワンダー・マジシャンは光線をカミカゼへ向け幾つも放つが当たらない
カミカゼは放たれる光線を、全て当たる寸前避け最短ルートで近付き、そして――――

ワンダー・マジシャンが反撃の出来ない程の距離へと近付くと、相手は女性型のモンスターだと言うのに躊躇無く

殴る様に顔を掴み取り、手のひらに埋め込まれた球体からエネルギーをビームの様に発射し掴んでいた顔を弾け飛ばす。

フィールド 2→1

「モンスターを破壊し、墓地へ送った事により俺はカードを1枚ドローする。」

手札2→3

「ワンドー・マジシャンを破壊されたか、だが、トラップ発動！ 奇跡の残照、このターン戦闘によつて破壊され自分の墓地へ送られたモンスター1体を選択し、選択したモンスターを墓地から特殊召喚する。 私は、カミカゼに破壊されたTGワンドー・マジシャンを選択し、攻撃表示で特殊召喚する。」

奇跡の残照 罰

【通常】

このターン戦闘によつて破壊され自分の墓地へ送られたモンスター1体を選択して発動する。

選択したモンスターを墓地から特殊召喚する。

フィールド1→2

魔法・罠 2→1

破壊したと思つた矢先に蘇生か、俺の手札には今のドローであのカードを引いた

なら―――

なら―――

「俺はカードを一枚伏せてターン終了だ。
手札 3
魔法・罠 1
1
2

第23話

アンチノミーのフィールドには、ハイパーライブランとワンドラー・マジシャンの

2体のモンスターに手札は2枚、永続魔法のTGX300が1枚

俺のフィールドにも、カミカゼとシャドー・ミスト2体のモンスターに手札は2枚、永続魔法の未来融合とさつき伏せたカードが1枚。

俺のフィールドのカミカゼの効果により、アンチノミーは一回しか攻撃は出来ないだが、あの2枚のドローで状況を開拓するカードを引いているかも知れない、さて何が来るかな。

「私のターン、ドロー。」

手札 2→3

「私がこのまま、未来融合を何もしなければ次のターンには攻撃力5000のトリニティーが召喚される、それに伏せカードも気になるだから手札からハリケーンを発動、お互いの魔法・罠カードを全て手札に戻す。」

「ハリケーン、そう来たかだが俺はこのターンを乗りきる。俺は手札一枚捨て、トラップ

発動！ レインボーライフ、俺はこのターンダメージを受けたらライフを回復する。』

レインボー・ライフ 罷

【通常】

手札を1枚捨てて発動できる。

このターンのエンドフェイズ時まで、自分は戦闘及びカードの効果によつてダメージを受ける代わりに、その数値分だけライフポイントを回復する。

アンチノミー

手札 3→2→3

魔法・罷 1→0

プラシド（アポリア）

手札 2→1→2

魔法・罷 2→0

「レインボーライフ……此で、私が攻撃したとしても君のライフは減らず逆に回復してしまう訳か、私は手札からT G X 3 0 0を再び発動、更に手札からT G メタル・スケルトンを攻撃表示で召喚。」

フィールドに、背中に六本の骨の突起と人の形をした骨がクリスタル状の物に覆われたモンスターが現れた。

T G メタル・スケルトン 閩

☆2

【アンデット族・効果】

攻 1100

守 0

相手フィールド上に存在するモンスターが戦闘またはカードの効果によつて破壊され墓地に送られた時、このカードを手札から特殊召喚する事ができる。

「フィールドにT Gと名のついたモンスター3体、永続魔法T G X 300の効果で私のフィールドのモンスターは全て攻撃力を900ポイントアップする。」

T G ハイパーライブランリアン 2400→3300

T G ワンダー・マジシャン 1900→2800 T G

メタルスケルトン 1100→2000

フィールド 2→3

魔法・罠 0→1

メタル・スケルトンが召喚された事によりT G X 3 0 0の効果でアンチノミーのモンスターは軒並み攻撃力が900ポイントアップしているが、攻撃力をあげる為だけに表側表示で召喚したのか？

いや、違うな誘つていいか・・・

「T G メタル・スケルトンでE・HERO シャドー・ミストに攻撃。」

フィールドのメタル・スケルトンの背中の六本の突起が、背中から勢いよく外れ目標へと飛び

防御体勢を取つていたシャドー・ミストに六本の突起が当たると凄まじい爆発が起り、跡形もなく吹き飛ばす。

「E・HERO シャドー・ミストが墓地に送られた事により効果を発動、俺はデツキからE・HERO キヤプテン・ゴードンを手札に加える。」

プラシド（アポリア）

フィールド 2↓1

手札 2↓3

「私は、カードを一枚伏せてターンエンドだ。」

アンチノミー

手札 1↓0

魔法・罠 1↓2

「俺のターン、ドロー。」

手札 3↓4

「手札から、未来融合——フューチャー・フュージョン——を発動、エクストラデッキのV·HERO トリニティーを選択しデッキからE·HERO ブレイズマン、シャドー・ミスト、ネクロダーカマンを墓地へ送る。」

手札 4↓3

魔法・罠 0↓1

「シャドー・ミストが墓地へ送られた事により効果を発動、俺はデッキからE·HERO ネオスを手札に加える」

手札 3↓4

「更に手札のE·HERO キャプテン・ゴールドの効果を発動、このカードを墓地に捨てデッキから摩天楼——スカイクレー·パー——を手札加える、そして手札からフィールド魔法、摩天楼——スカイクレー·パー——を発動。」

フィールドに、次々と高層ビルかどが建ち並びフィールドの外見の印象を大きくかえ

る。

手札 4↓3

「墓地のE・HERO ネクロダークマンの効果を発動、このカードが墓地に存在する限り1度だけ、自分はレベル5以上の「E・HERO」モンスター1体をリリースなしで召喚できる。」

E・HERO ネクロダークマン 閻

☆5

【戦士族・効果】

攻1600

守1800

このカードが墓地に存在する限り1度だけ、自分はレベル5以上の「E・HERO」モンスター1体をリリースなしで召喚できる。

「そして、手札からE・HERO ネオスを攻撃表示で召喚。」

フィールドに、筋肉隆々の体に赤いラインと青いラインの入った銀色のスーツを纏つた、とある少年が思い描いた最強のHEROが現れた。

E・HERO ネオス 光

☆7

【戦士族・効果】

攻2500

守2000

ネオスペースからやつてきた新たなるE・HERO。 ネオスペーシアンとコンタクト融合する事で、未知なる力を發揮する！

手札 3↓2

フィールド 1↓2

「行くぞ、アンチノミーM・HERO カミカゼでTG メタルスケルトンを攻撃。」

フィールドに存在する、高層ビルの頂上からカミカゼが飛び立ち敵を目掛け空を駆け抜ける。

「そうは、させないよトラップ発動 TG1—EM1。 TG メタルスケルトンとM・

HERO カミカゼのコントロールを入れ替える。」

TG1—EM1 置

【通常】

相手フィールド上に存在するモンスター1体と、自分フィールド上に表側表示で存在する「TG」と名のついたモンスター1体を選択して発動する。

選択したモンスターのコントロールを入れ替える。

メタルスケルトン目掛け空中を駆け抜けていたカミカゼの前に突然、機械で出来た丸いゲートが現れカミカゼは吸い込まれる様にゲートを潜ると

相手のフィールド上へと移動していた

そして、カミカゼが潜り抜けたゲートから飛び出す様に此方側にTG メタルスケルトンが俺のフィールドに移動して來た。

アンチノミー

魔法・罠 2→1

「此方のモンスターの攻撃力は300下がるけど此でアポリア、君は攻撃を一度しか出来なくなつたね。」

「やはり、そう言うための為のメタルスケルトンだつたか、E·HERO ネオスでTGハイパー・ライブラリアンに攻撃。」

フィールドのネオスの右腕にエネルギーが集まり、集まつたエネルギーを拳に集め拳を丸く覆う様に強力なエネルギーがsparkを起こす

そして、フィールドを目標を目掛け駆け抜け、ハイパー・ライブラリアンの距離を一気に縮める

「摩天楼—スカイクレー——の効果を発動、「E·HERO」と名のつくモンスターが

攻撃する時、攻撃モンスターの攻撃力が攻撃対象モンスターの攻撃力よりも低い場合、攻撃モンスターの攻撃力はダメージ計算時のみ1000ポイントアップする。ネオスの攻撃力は2500から3500へと変化だ。』

ハイパー・ライブラリアンの腹に駆け抜けた勢いを生かした拳を叩き込む

腹に当たった拳は、まるで紙を破るかの様にあっさりと貫通しハイパー・ライブラリアンは苦悶の表情を浮かべるが

その直後、拳に集まつたエネルギーが解放され拳を中心にエネルギーの爆発が起こり爆発後のそこには拳を突き出した状態のネオス以外には何も存在していなかつた。

LP 1800→1300

フィールド 3→2

「くつ、ハイパー・ライブラリアンを破壊しに来たかだけど、此で君の攻撃は終了だ。』

「いや、違うな俺の攻撃はまだ終わってはいない。』

「何を言つてゐるアポリア、カミカゼの効果は君も知つてゐる筈だ。もしも、手札にマスク・チエンジがあり其を使つて新しいHEROを召喚しても攻撃は出来ない。』
「ああそうだな、お前のフィールドにカミカゼがいる限りはな・・・』

「何をするきだ・・・アポリア』

「ふん、俺は手札から、速攻魔法 超融合を発動！ 手札を1枚捨て効果を発動！ 俺の

「フィールドのE・HERO ネオスとお前のフィールドのM・HERO カミカゼを融合！」

「私のフィールドのモンスターを融合だと!?」

フィールドのカミカゼが地面を蹴り空へと飛んでいき、緑色のエネルギーを纏う

対するネオスも、光輝くエネルギーを纏い空へと飛ぶ

2人のエネルギーを纏つたHEROが、上空を飛びながら螺旋状に絡み合いながら新たなHEROへと新生する。

「E・HERO Great TORNADOを攻撃表示で特殊召喚！」

フィールドに凄まじい暴風が吹き荒れ、フィールドに暴風でマントを靡かせた風を操る最強の一角のHEROが現れた。

アンチノミー

フィールド 2→1

「E・HERO Great TORNADOが融合召喚に成功した事で効果を発動！」

相手フィールドの全てのモンスターの攻撃力・守備力は半分にする！」

フィールドのGreat TORNADOが腕を振るうと、相手フィールド状のワン

ダー・マジシャンを風の凶刃が襲い掛かりダメージを与える。

TG ワンダー・マジシャン

攻 2200→1100

「超融合・・・まさかそんなカードがあつたなんてね。」

「俺が過去から見つけ出した取つて置きのカードだ。行くぞアンチノミー、E・HERO Great TORNADOでTG ワンダー・マジシャンに攻撃！」

フィールドのGreat TORNADOが全身からエネルギーを発すると上空から幾重の竜巻がワンダー・マジシャンいる場所目掛け空から延びていき

そして、強力な風の刃で出来た竜巻が幾つもワンダー・マジシャンを襲いその姿をバラバラに解体する。

「俺の勝ちだなアンチノミー。」

「そのようだね、アポリア。」

ライフをゼロにしたことにより、モンスターを表示していたソリットビジョンが徐々に消え始める。

「で、アンチノミーこのデュエルでお前は進む道を決められたか？」

「ああ、決めたよ進む道をね。」

さて、アンチノミーはどう言う道を選ぶのだろうな、出来れば共に進みたいものだな。

「私は――いや、僕はゾーンを止めるよ。」

「そうか、つまり俺と同じと言う事でいいのか？」アンチノミー

「そうだねアポリア。僕はゾーンを止める、これから起ころる事には大勢の人達が犠牲になる例えそれで未来が変わったとしても間違っている。僕達はこんな犠牲を出すやり方で未来を変えては駄目だ、例え理想論と言われようとも犠牲を出さずに未来を変えたい。」

犠牲を出さずにか・・・俺は記憶が戻る前は多くの命を操り邪魔な物を排除していたな・・・

俺の手は既に血で染まつていて、償いなど出来ない程にな・・・

「そうさ、僕達は皆で破滅した未来を救おうとした、だけどこんな犠牲を良しとしたやり方じやなかつた。たとえゾーンが此しか無いと考え突いたのだとしても、あの頃の僕らに誇れるやり方で未来を変えたいんだ。」

「安心しろアンチノミー、少くともそれに付き合う理想論持ちならここにも居るからな。」

俺の人生をかけても償いない切れないうが、それでも自分のした事に対しうて償つて行こう。

だから、こそ―――

「アンチノミー、一緒にゾーンを止めるぞ。」

「ああ、アポリア。」

そう、俺がアンチノミーへと声をかけ返事を返された時だ。

突然、何処かで聞いた事のある声が俺とアンチノミーにかけられた。

「アンチノミー、アポリア、その話し私も加わらせて貰おうか。」

声のかけられた方を向くと、其所には――

「君は――」

「お前は――」

第二十四話

アンチノミーとのデュエルは終わった、彼奴は迷つて いたいたようだが俺とのデュエルで迷いは消え、共にゾーンを止める為に明日ゾーンと戦う。

仲間が取り返しのつかない事をやろうとしているのだから、それは俺達仲間が止める・・・

何だか・・・不動 遊星達に悪い気がしてきたな・・・だが、此だけは譲れない。

それに、死んだと思っていた彼奴が生きていて俺達に協力してくれるのだから絶対に譲れない。

全ては明日か・・・

しかしどうしたものかな、アンチノミー達との明日についての話し合いは以外に早く終わってしまったから、時間にかなり余裕が出来た時間をどう潰すか・・・

・・・ジャック達の家に行くとするか、明日でジャック達とも会えなくなるかも知れないしな、それに明日の試合の事などの話し合いもしていおきたいからな。

そうと決まれば移動するとすか。

まあ、移動と言つても此処から歩いて移動する訳ではなく、空間移動だがな
こう、何と言えばいいのだろうか、行きたい所を思い浮かべ念じるとでも言えばいい
のだろうか？

アポリアの全機能を取り戻した俺は、前の様に剣で空間を切り裂かなくとも空間を移
動する事ができる。

簡単にはなつたものだな、既に俺は説明をしている間にジャック達の家の前に移動し
ているのだから。

さてと、さつそくだが家の中に入るとするかジャック達なら連絡を入れなくとも大丈
夫だろう、用事が早く終わつたと言えば良いのだろうし。

そんな事を考えながら、家の中に入るとリビングの方からジャック達の声や何かよく
解らない機械音が聴こえて来たので、取り合えずリビングのドアを開け挨拶をすること
にした。

そして、ドアを開け中に要るであろうジャックに声をかけようとした時だ、ジャック
の名前を呼ぶ前に俺の思考は色々と停止した

やむしろ、今日の前の事態に付いていけず頭が混乱しているのか？ これは。ドアを開け、リビングに入りジャックに声をかけようとした…此所まではいい、此所までは…

その次が問題だ、声をかけようとしたジャックに問題があつた何故、ジャックがあんな事になつてている？

それじゃあ、明日の試合出来ないだろうと。
何で、そんなにも楽しそうにしているのだと

そう、リビングに入ると、ドリルを腕に着けたジャックがいた――――

正確に言うと、手首から先がドリルになつてゐるだなこれは・・・

「悪くない、この回転、この見た目、全てに穴を開けられる様で素晴らしいな。」

そう、ジャックはドリルを見つめ回転させながらドリルを誉めていた・・・
一体、何があつた！ ジャック！

「む？ シドか、家に來たと言うことは貴様の用事は済ませたと言つことか。」

リビングに入つてきた俺を見つけたジャックは、ドリルをつけてゐるのに関わらず何時通りの口調だつた。

いや、むしろその口調からは機嫌が良いのが伺える。
なら、聞かねばなるまい。

その腕のドリルについて！

「ジャック様、その腕は一体……」

「この腕か、見て解らないか？　ドリルだ。」

ドリルを回転させ、此がドリルだと言わんばかりに此方に見せていて。だがそんな事は、見れば直ぐに解る。俺が言いたいのは、何で腕がそんな事になつているのか知りたいんだよ。

「ふ、お前の言いたい事は解つていて。俺の腕がこんな風になつてるのは、暇だつたからだ。 デツキの調整はした、家の掃除はした、食事の支度等をしたそしたら暇になつた、だから俺は腕を改造した。」

暇だつたから腕を改造した……いや、可笑しいだろ。 もっと他にやることが探せば有るだろう、まあ……ドリルがカツコイイのは認めるが……

「因に、このドリル以外にも他に幾つか作つてみたが、その1つが此だな。」

そう言うと、ジャックはドリルが付いていた腕を二の腕から取り外し、テーブルの上に置くと

何処からか取り出した、見た目は普通の腕を二の腕へと接続させた。

「ジャック様、それは？」

「この腕か、この腕はなデュエルディスクを着けていない時にデュエルを挑まれた時のためのデュエルディスク内蔵の腕だ。」

そう言うと、腕の両脇からデュエルディスクが内側からスライドし左右のデュエルディスクが合わさり腕の横へと移動し、よくみると腕の甲なども変型しておりデツキをセットする場所や墓地などが現れていた。

デュエルディスク内蔵の腕か……いざと言う時には便利そうだな。

ただデツキをどうするかだな、本デツキを入れるかサブデツキを入れるか迷うところだな。

「今のところ作ったのはこの2つ程度だな、他にも幾つか案は有るがパツトしなくてな。シド、何か良い案は無いか？」

良い案とは、多分次に作る腕の事を言っているのだろうな。

まだ、作る気なのだろうか？ もしかしたら腕を改造するのにはまつたのか？

「いや、まてよ。 そう言えばシドが使っていたデツキはE・HERO……確か右腕がドラゴンの顔のフレイム・ウイングマンがいたな……コナミ！」

ジャックがコナミの名前を呼ぶと、コナミが突然ジャックのすぐに横へと現れてい
た。

「…おい、いま…どうやつて現れた？俺のセンサーの一切に反応しなかつた
ぞ？」

「コナミ次は、フレイム・ウイングマンの右腕見たいなドラゴンの顔が着いた腕を作るぞ
！」

何処からか現れたコナミは、ジャックの言葉に頷くとジャックはイスから立ち上がり
「シド少し待つていろ、新しい腕を作つてくる。」

そう言うと、コナミとジャックはリビングから出ていった。

「少し待つていろか…新しく作るんだよな、だとしたら少しではすまない気がするん
だが…テレビでも見るか。」

（十数分後）

ジャックとコナミが新たな腕を作りリビングから出ていき、俺は時間を潰す為にテレ

ビを見ていた。

俺が見ている番組は、テレビの電源を入れた時に調度その時に映った推理物のアニメ番組だ。

アニメの内容は、高校生探偵デュエリストの主人公が休日に犯罪組織の違法カードの取引現場を見つけ、その後犯行現場等の証拠を記録していた時に犯罪組織の1人に見つかってしまい命をかけた、デュエルをする事になるが、違法カードを使つたデツキに主人公は手も足もです敗けてしまい、1話目から主人公が死ぬと言う推理デュエル物のアニメだ。

まあ、2話目でデツキのカードの精霊達により生き返つたがな。だが、精霊達の力で生き返つたのは良かつたが死んだ人間を完全に生き返えらせるのは厳しかつたのだろう主人公の姿が子供になつてしまふは、力を使い果たしたカード達は散らばつてしまふは、幼馴染みの家に居候になるなど色々起こつたな2話目は。

3話目以降は、散らばつたカードを集めたり行く先々で起くる数々の事件を幼馴染みの父親を使い解決したり、デュエルアカデミアの仲間達とのどたばた劇や、主人公を殺した犯罪組織との対決等の話があるな。

俺が見ている回は、やたらとテンションの高い梨の妖精が殺害されてしまう話だ‥。

まさか、梨の妖精が着ぐるみだつたなんて……信じられないな、だが事実だ中には人間が入つていた。

くそ！ 何時もイリュージョンとか言つて背中から食べ物を中に入れていたのはそういう事だつたのか！

・・・まあ、俺の感情は此所までにして一体誰が梨の妖精を殺害したのかだな。

まずは、梨の妖精は腹をデュエルディスクで刺され頭は納豆を包む様に藁苞で包まれた状態で発見された

そして、その梨の妖精が殺害されたのを発見したのが納豆の妖精、第1発見者だ。

その後、納豆の妖精の悲鳴を聞き付け主人公達や、梨の妖精の同僚の小さいオツサンの精霊や黒い熊の妖精や、梨の妖精好きの弁護士デュエリスト等のが現場に駆けつけた。

第1発見者である納豆の妖精は、どうやら梨の妖精とは最近上手くいつていなかつた様で殺害される直前にも口論になつて居た所や犯行の直前に、殺害現場付近で梨の妖精と一緒に居る所等を目撃去れでいるため今の所一番怪しいのはこいつだ。

だが、どうやら梨の妖精と上手くいつていなかつたのは他の妖精や弁護士デュエリストも同じ様で、納豆の妖精が殺害したかの様に見せ掛けた誰かの犯行なのかも知れな

い。

まあ、誰が犯人かは此から主人公が暴いてくれるだろう。

主人公がデュエルディスクを使い幼馴染みの父親を殴つて気絶させデュエルディスクに仕込まれている変声機を使い、気絶している幼馴染みの父親の声を使い犯人を此から暴くのだろうな毎度の事ながら。

「梨の妖精を殺害した犯人は―――― 貴女だ、弁護士デュエリスト！」

「わ、私が梨の妖精を殺害したって言うの！」

「そう、貴女が梨の妖精を殺害しその罪を納豆の妖精に擦り付け様とした。」

「ふ、ふざけないで！ 私が梨の妖精を殺害する理由は無いし、第1私は貴方達と一緒に殺害時刻に一緒に居たじゃないの！ 私に梨の妖精を殺害だ何て無理よ！」

「ふつ、確かに貴女はあるとき私達と一緒にあの場所にいた、そして私達とデュエルをしていた・・・」

「そ、そ、う、よ、あの時デュエルをしていたのよ私達はどうやつて私があの場所から抜け出

すつて言うのよ！」

「確かに、私達とデュエルをしていた貴女にはあの場所を抜け出すのは不可能……だが、貴女はとあるトリックを使い梨の妖精を殺害したこれから其を証明して見せましょう。」

まさか、犯人は弁護士デュエリストだつたとはな。だが殺害時刻には弁護士デュエリストは居なかつた、その時はデュエルをしていた一体どんなトリックが有るんだ。

「貴女は……」

これから、調度主人公が殺害のトリックを説明しだそうとした時だ。

ジャック達が出ていつた扉が開き、高らかに笑ながらジャックがリビングに入つて来た、新に作つた腕を此方に見せながら。

「見ろ！ シド出来上がつたぞ俺の新な腕が！」

腕を此方に見せながら、ジャックは此方に近付いて來た調度、テレビと俺の間に入るようだ。

「見るがいい、この腕を！ 見事なまでに再現された俺の魂レッドデーモンズの顔を再現したこの腕を！」

ジャックが、先程から誇らしげに此方に向けている腕は手首から先がレッドデーモン

ズの顔になつてゐる物だ、フレアウイングマン見たいな腕を作るのかと想像したんだが以外とこじんまりとしているな。

「この腕は、ただ顔が付いてゐるだけではない！ 炎を纏いアブソリュート・パワー フォースを再現可能更に灼熱のクリムゾン・ヘルフレアも発射可能だ！」

よくもまあ、十数分でそんな物を作り上げた物だなお前達は・・・

「因みに此れも、デュエルディスクに変形可能だ！」

レッドデーモンズの口が開きその中からデツキが現れ、レッドデーモンズの角が変型しカードを置くための物へと変わる

・・・本当に十数分でよく作れたな・・・

いや、元々作つていた物を改造したのかも知れないか。

いや、まあ・・・今はそんな事よりも・・・

「更にこの腕は、スカーレットを召喚するとレッドデーモンズの顔からスカーレットの顔に変型する機能もある！」

そんな事どうでもいい、邪魔なんだよ！ ジャックつ！

テレビが見えないんだよ！ 僕に自慢するのは良いがテレビの前に立つな！

映像は見えないが、音声が聞こえる……だが！ アレやコレや身振り手振りの説明があるせいで音声だけじや解らないんだよ。

「因みに、この腕を着けた状態でレッドデーモンズの精靈と俺が合わさる事で俺はレッドデーモンズを纏う事が可能だ！」

知るか！ 邪魔だーっ、ジャック！
トリックの種が解らないだろうがー！

・・・・・・・・・・

その後、俺はジャックに阻まれテレビを見る事は出来なかつた。

だが、音声だけは聞こえていたせいでトリックは中途半端にしかわからない・・・ああ、くそつモヤモヤするな・・・

だが、まあ、トリックが中途半端でモヤモヤとしているが一応明日の試合については

ジャックに聞いておいた。

明日は大会最後の試合だから何かしらの指示が有るかと思つていたが、ジャックからは何時もどうりで戦えと言われた・・・

何時もどうりか・・・下手をするとコナミがまたやらかす様な気がするんだがなジャックの番まで果たして回るのだろうか・・・

・・・しようがない、コナミに少し話で来るか。



今日は、楽しかったなD・ホイールの改造とかジャックの新しい腕作りは。

D・ホイールの改造は、ジャックには内緒にやつてしまつたけど悔いはない。

むしろ今度、改造して新に加えたジャックのD・ホイールと自分のD・ホイールの合体機能を試してみたいな。

D・ホイール同士の合体と言つても簡易的な物だし、今度ジャックとコースと一緒に

走るときにプログラムを作動させよう、そうしよう。

ジャックは驚くだらうなD・ホイール同士が合体するんだから、いや、でも、怒りそ
うかな？

流石に自分のD・ホイールが合体して後輪になつたら……だけど仕方ないジャック
のD・ホイールは後輪に調度良さそう何だから……

第一声はあれかな『何だコレは！』かそれとも『何故кингдである俺が後輪なのだ！
前輪にしろ！』かな？ ま、ジャックが前輪にしろって言つてきた時の為にちゃんと
前輪にも成れる様にはしてあるから万全だけどね。

ジャックの腕作りも楽しかったな、もつと時間が有れば色々と作れたのに残念だよ。
「コナミ様、少しお話し宜しいでしようか。」

シドが、声をかけてきた何時ものキャラ作りの役で何かしら用でも有るのだろうか？
いや、有るだらう話し掛けて来たんだから。

「どうかしたのシド、今日も又キャラ作りのしやべり方してるけど。」

「別にいいだろ、コナミ俺はアレはアレで気に入つてているのだからな。」

「あつ、気に入つてたのねあのキャラ

「まあ、今は俺のキャラについては別にいいだろ。 そんな事より俺の話を聞け。」

「わかった、で何。」

「明日の試合についてだ。」

明日の試合について？ 何だろう、シドが試合について何か言つて来るの何て初めてだから、恐いんだけどこれ。

「おい、何でお前そんなに顔を強張らせている。俺が此れからお前に酷い要求をするみたいじゃないか・・・はあ・・・安心しろ、コナミ俺がお前に明日の試合で少し頼みたいことが有るだけだ。」

「頼みたいこと？」

「ああ、そうだ明日の試合――――」

．．．．．

．．．まさか、シドがあんなことを言つてくるとはねー。
まあ、シドがそう言う考えなら明日の試合はそう言う試合をしようかな最初から全力
でね。

第二十五話

WRGP決勝—— 遂にこの時が来たか、俺が生み出され此処までの道程は長いようで短い日々だつたな。

仲間を集める為に世界を巡りデュエルの日々、様々なデュエリストとのデュエルはなかなか面白かつた物だ。

コナミとシドと出会いその日々も更に充実したな。

そして、此れからの戦いは俺が俺である事を示すために、俺がキングである事を証明する為にこの決勝に勝つ、コナミとシドと共にな。

だが、この大会勝つのは俺にとつて始まりにしか過ぎん俺が更なる高みを目指す為のな。

だから、こそ——

「全力で勝つて来いよコナミ。」

たとえ、俺の番が回つて来なくなろうとも。

「負けは、許さんぞ。」

「問題ない。」

問題ないか、まあコナミなら問題は無いだろうな相手のファーストホイーラであるジヤック・・・

よし、確実に勝つな此れは心配する必要など全く無いな。

もしも、万が一にもコナミがジヤックに負けた場合、俺は奴に満足トリシユーラプリンを渡そと毎日買いに行つているのを止めよう約束を破るが、ジヤックに負ける様ならば約束を破る覚悟があるぞこの俺は！

そうされたくなれば、勝つことだな！　コナミ！

と、言いたいが既にコナミは居ない奴はもう走り出し早速第1コーナーを取り先攻を取つた様だ。

・・・今更だが、俺の出番が来るかどうかが心配なら今回だけ俺がファーストホイーラに為ればいい話だが・・・

それは俺のプライドが許さん此処まで来たのはコナミやシドの活躍が有つたからこそだ。

其を、俺が戦いたいと言う理由で順番を替える様な真似は出来ない、ならば最初から俺がファーストホイーラで戦えば良いと言う奴がいるかも知れんが、それは無理だ！ チームリーダーとして、キングとして俺はファーストホイーラに為るわけには行かないからな此ばかりは譲れん。

俺は、俺の出番が来たときに俺らしく戦い必ず勝利する。

それが、チームリーダーとしての俺の役割

そして、キングとは戦いに必ず勝利する絶対的存在

俺のするべき事は、絶対勝利ただそれだけだ。

チームを勝利へと導く為にな―――

出番が有ればだがな！



今日はWRGP決勝と言うだけあって前の時よりも観客の熱気が凄い気がする。

走る前にジャックからは、負けるなんて言われるし・・・まあ、勝てばジャックは文句は言わないだろうから、此れからやることには文句はそんなに言われない事を願いたいな。

「おい」

それについても、対戦相手の人何だかジャックに似てるよね見た目とか使ってるデュエルディスクやD・ホールとかさ、ジャックつて双子だったのか？

それとも、ジャックに憧れてジャックの真似をしているのだろうか？

「おい！」

あつ、ジャックで思い出したけどジャックに満足トリシユーラプリン食べられたんだよな・・・

その怨みをそつくりさんにぶつけよう、ジャックじや無いから怒られる心配も無い・・・調度、手札も良いし、今出来る全力を出しても文句は言われないよね！

「おい！ 貴様、聞いているのか！」

えつ？ 何か知らないけど隣を走っている対戦相手に怒鳴られたよ、それも聞き覚え

がある声で。

「貴様が、第1コーナーを取つたのだからさつさと先攻を始めろ！」

うわあ・・・聞こ覚えがある声だけじや無くて何だかしやべり方まで似てるなこの人

「それとも、このままだらだら走り続け俺の集中力を奪う作戦か此は！」

いや、それはない。

考え事をしていただけです。 時間はそんなに経つてないと思つたけど、結構経つて
いたのかな相手の様子からすると？

でも、あれだな・・・対戦相手ますますジャックに似てるなー。

此れじやあ、まるで本当にジャックと戦うミタイダナ・・・

仲間と戦う様で、イヤダナー

ハハハ、満足トリシューラプリンの仇！

「（な、何だ！ 奴から殺意の様な物を感じるぞ！）」

「ドロー！」

コナミ

LP4000

手札

5↓6

ドローしたカードも使える、ジャック（仮）を全力で仕留めてやる！

「手札から永続魔法、冥界の宝札を発動。」

手札 6↓5

魔法・罠 0↓1

「（冥界の宝札か、つまりこのターンで最上級が来るか！）」

「手札からフォトン・サンクチュアリを発動、2体のフォントートークンを守備表示で特殊召喚。」

フィールドに光輝く2つの球体が出現する。

フォトン・サンクチュアリ 魔

【通常】

このカードを発動するターン、自分は光属性以外のモンスターを召喚・反転召喚・特殊召喚できない。

自分フィールド上に「フォントートークン」（雷族・光・星4・攻2000／守0）2

体を守備表示で特殊召喚する。このトークンは攻撃できず、シンクロ素材にもできない。

手札 5↓4
フィールド 0↓2

「2体のフォトントークンをリリースし手札から、轟雷帝ザボルグを攻撃表示で召喚。」
フィールドの2体のトークンが消え去り、新にフィールドに赤い角を両肩に着け白銀の鎧に纏つた覚醒せし雷帝が雷と共に現れた。

轟雷帝ザボルグ 光

☆8

【雷族・効果】

攻2800

守1000

このカードはアドバンス召喚したモンスター1体をリリースしてアドバンス召喚できる。

このカードがアドバンス召喚に成功した場合、フィールドのモンスター1体を対象として発動する。

そのモンスターを破壊する。

破壊したモンスターが光属性だった場合、その元々のレベルまたはランクの数だけ、

お互いはそれぞれ自分のエクストラデッキからカードを選んで墓地へ送る。

このカードが光属性モンスターをリリースしてアドバンス召喚に成功した場合、その時の効果に以下の効果を加える。

墓地へ送る相手のカードは自分が選ぶ。

「来たか！」

手札 4→3

フィールド 2→1

「2体以上の生け贋召喚に成功した事により冥界の宝札の効果を発動、デッキからカードを2枚ドローする。」

手札 3→5

「轟雷帝ザボルグの召喚時効果を発動、このカードがアドバンス召喚に成功した場合、フィールドのモンスター1体のモンスターを破壊する。破壊したモンスターが光属性だつた場合、その元々のレベルまたはランクの数だけ、お互いはそれぞれ自分のエクスラデッキからカードを選んで墓地へ送る。ただし、このカードが光属性モンスターをリリースしてアドバンス召喚に成功した場合、墓地へ送る相手のカードは自分が選ぶ。」「エクストラデッキのカードを墓地へ送るだと!?」

フィールドの轟雷帝ザボルグが両肩の赤い角から雷を発生させ、生み出したその雷を空へと打ち上げると、次の瞬間にはザボルグが打ち上げた雷の何倍もある雷がザボルグ目掛け天から落ち雷を打ち上げた主を呑み込み、跡形もなく消し去りザボルグの効果が発動する。

フィールド 1→0

「轟雷帝ザボルグの効果により、エクストラデッキからM・HERO アシッド、ダークロウ、カミカゼ、光牙それぞれ2枚を墓地へ送る。」

ちゃんと次のシドの事を考えてエクストラデッキにはM・HEROを入れ、それを墓地へ落とし次のシドの番で役に立つ事を祈ろう。

「墓地へ送るのがM・HEROだと？　まさか次のあの執事服の為の墓地肥やしかし！」

「更にザボルグの効果により、相手のエクストラデッキのカードを選んで墓地へ送る。

墓地へ送るカードは、レッド・デーモンズ・ドラゴン、エクスプロード・ウイング・ドラゴン3体、デーモン・カオス・キング3体、天刑王 ブラック・ハイランダーを選択し墓地へ送る。」

エクストラデッキまで、何だかジャックに似てたなこの人、レッド・デーモンズ・ドラゴンまで有るとかこの人、そうとうジャックが好きなんだうな。

「俺のレッド・デーモンズが・・・戦わずに墓地へ送られるだと・・・」

ジャック（仮）さん、ジャックの真似をしているとしたらレッド・デーモンズを使つて来るだろうから一応墓地へ落とさせてもらつたよ。

レッド・デーモンズは、バスターになつたりセイヴアーになつたりスカーレッドになるからね

・・・でも、エクストラにはセイバーとかスカーレッド無かつたけどね、まあいいか。
「手札から、貪欲な壺を発動。 墓地から轟雷帝ザボルグ、M・HEROアシッド、ダークロウ、カミカゼ、光牙をデッキ、エクストラデッキに戻しデッキからカードを2枚ドロー」

手札 5→4→6

「更に、手札から速攻魔法ファントン・リードを発動。」

ファントン・リード 魔

【速攻】

「手札からレベル4以下の光属性モンスター1体を表側守備表示で特殊召喚する。」

手札 6→5

「手札から、創造の代行者 ヴィーナスを攻撃表示で特殊召喚。」

フィールドに、赤、青、紫色の3つの球体を浮遊させた女性の天使が現れた。

創造の代行者 ヴィーナス 光

☆3

【天使族・効果】

攻1600

守 0

500ライフポイントを払つて発動する。

自分の手札またはデッキから「神聖なる球体」1体を自分フィールド上に特殊召喚す

る

手札 5→4

フィールド 0→1

「創造の代行者ヴィーナスだと?」(このタイミングで出してきたと言うことは、効果を発動させ神聖なる球体を出して来るのだろうな、奴はライフは減るがその変わりに最大

で壁が四体か厄介だな）

「創造の代行者ヴィーナスの効果を発動、ライフポイントを500払いデツキから「神聖なる球体」を守備表示で特殊召喚。」

フィールドに、光を放つ球体が現れた。

神聖なる球体 光

通常モンスター

星2／光属性／天使族／攻 500／守 500

聖なる輝きに包まれた天使の魂。

その美しい姿を見た者は、願い事がかなうと言われている。

LP 40000→3500

フィールド 1→2

「更に、創造の代行者ヴィーナスの効果を発動しデツキから神聖なる球体を守備表示で特殊召喚。」

LP 35000→3000

フィールド 2→3

「更に、効果を発動し神聖なる球体を守備表示で特殊召喚。」

LP 30000→2500

フィールド 3→4

「そして手札から、進撃の帝王を発動。」

進撃の帝王 魔

【永続】

このカードがフィールド上に存在する限り、自分フィールド上のアドバンス召喚したモンスターはカードの効果の対象にならず、カードの効果では破壊されない。

また、このカードがフィールド上に存在する限り、自分はエクストラデッキからモンスターを特殊召喚できない。

手札 4→3

魔法・罠 1→2

「カードを2枚伏せターンエンド。」

手札 3→1

魔法・罠 2→4

伏せカードは伏せたしこれで、バツチリだね。

後は、ジャック（仮）さんが2枚以上破壊カードを持つて無ければ大丈夫なはず。

「（進撃の帝王を発動させカードを2枚伏せた、恐らく俺のターンに奴は何かを召喚する

きか）俺のターン！ ドロー！』

手札 5↓6

「（恐らく伏せカードの一枚は血の代償だろう今までの戦いからみると、だが今の俺の手札では……だが！）俺は手札から、コール・リゾネーターを発動！ デツキからダーク・リゾネーターを手札に加える」

手札 6↓5↓6

「カードを一枚セット、2枚カードを伏せターンエンドだ！」

手札 6↓3

フィールド 0↓1

魔法・罠 0↓2

あれ？ ジャック（仮）さん何もしてこなかつたよ、手札事故かなだつたらありがたいね。

「ドローフェイズ、ドロー！」

手札 1↓2

さてと、ジャックさんがセットしたカードは恐らくコール・リゾネーターで手札に加

えたダーク・リゾネーターかな壁になるし、伏せカードの方は何だろう？

デツキもジャックの真似をしているとしたら、伏せカードはプライドの咆哮やスクリーン・オブ・レッドとか、かなこの状況なら。

伏せカードが一応気になるけど、手札には破壊出来るカードが1枚かどつちを破壊するかだね……よし。

「手札からサイクロンを発動、右側の伏せカードを破壊。」

「右側が残念だつたな！ 速攻魔法発動！ サイクロン！ 此方の伏せカードはこれだ

！ 俺は貴様の冥界の宝札を破壊する！」

サイクロンでサイクロンを指定しちやつたか、でも今は冥界の宝札を破壊されると不味いからそれは、させないよ

「カウタートラップ発動、魔宮の賄賂サイクロンの発動を無効にし破壊する、そして相手はカードを1枚ドローする。」

魔宮の賄賂
罠

〔カウンター〕

相手の魔法・罠カードの発動を無効にし破壊する。

相手はデツキからカードを1枚ドローする。

コナミ

手札 2↓1

魔法・罠 4↓3
ジヤツク

手札 3↓4

魔法・罠 2↓1

「やはり破壊対策のカードを伏せいたか！」

危なかつた、冥界の宝札を破壊されたら本当にピンチだつたよでも、これで。

「フィールドの創造の代行者 ヴィーナスと神秘の球体をリリースし手札から、大天使クリステイアを攻撃表示で召喚、冥界の宝札の効果により2枚ドロー。」

フィールドの創造の代行者 ヴィーナスと神秘の球体2体のモンスターが光輝き1つに合わさりその姿を変えていき

フィールドに、真紅の翼を広げ純白の鎧を身に付けた天使が降臨する。

大天使クリステイア 光

☆8

【天使族・効果】

攻2800

守2300

自分の墓地に存在する天使族モンスターが4体のみの場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。

この効果で特殊召喚に成功した時、自分の墓地に存在する天使族モンスター1体を手札に加える。

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、お互にモンスターを特殊召喚する事はできない。

このカードがフィールド上から墓地へ送られる場合、墓地へは行かず持ち主のデッキの一番上に戻る。

手札 1↓0↓2

フィールド 4↓3

「大天使クリステイアだと!?（くつ！ 特殊召喚を封じられただと！ 進撃の帝王の効果でクリステイアの効果を無効にも出来ない、不味いなこれは。）」

ラツキーだよ、ドローしたカードの中にあのカードが入っていたから召喚をして更に万全に出来る。

「トラップ発動、血の代償そして血の代償の効果を発動、ライフを支払いフィールドの神秘の球体2体をリリースし手札から白竜の忍者を攻撃表示で召喚。冥界の宝札の効果により2枚ドロー！」

フィールドの2体の神秘の球体が消え去り、新たにフィールドに白い忍び装束に身を包み黒い防具を身に付けた忍者と、白い竜1体の竜が現れた。

白竜の忍者 光☆7【ドラゴン族・効果】

攻2700

守1200

このカードを特殊召喚する場合、「忍法」と名のついたカードの効果でのみ特殊召喚できる。

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分フィールド上の魔法・罠カードはカードの効果では破壊されない。

LP2500→2000

手札 2↓1↓3

フィールド 3↓2

「(これで、進撃の帝王を破壊が出来なくなつた・・・) だが! この程度で諦める程、この俺! ジャック・アトラス出はない!」

あれ？ このジャック（仮）さん、ジャックと同じ名前だつたのか偶然て凄いな、だからシンパシーを感じて真似て いるのだろうか？

「バトル、大天使クリスティアで攻撃。」

「させるか！ ト ラップ発動、スクリーン・オブ・レッド！ これで貴様は攻撃をすることは出来ない！」

スクリーン・オブ・レッド 罷

【永続】

このカードがフィールド上に存在する限り、相手モンスターは攻撃宣言をする事ができない。

このカードのコントローラーは自分のエンドフェイズ時に1000ライフポイントを払う。

この時に1000ライフポイントを払えない場合はこのカードを破壊する。

フィールド上に「レッド・デーモンズ・ドラゴン」が表側表示で存在する場合、このカードを破壊し自分の墓地に存在するレベル1のチューナー1体を選択して特殊召喚する事ができる。

もう1枚の伏せカードはスクリーン・オブ・レッドか・・・これで今は攻撃出来なくなつちやたけど、まあいいか。

「カードを一枚伏せターンエンド」

手札 3
↓
魔法・罠 3
↓
4

第二十六話

「(この状況打破するにはあのカードが必要か今はスクリーン・オブ・レッドが有るだが奴にいつ破壊されるかわからない、かなりの賭けだがあのカードを引かなければ!)」

俺のターン! ドロー!

手札 4→5

「(ドローカードは・・・くつ、来ないか。奴が攻撃出来ないアドバンテージを生かしたいがまだダメだ。) 俺は、カードを1枚セットしターンエンドだ。 エンドフェイズになつた事によりスクリーン・オブ・レッドの効果が発動、俺は1000ポイントライフを払いスクリーン・オブ・レッドを維持する。」

LP 4000→3000

手札 5→4

フィールド 1→2

壁モンスターを増やして来たか、1体がダーク・リゾネーターだとすると3回攻撃で一気に消せるかな? 耐性持ちじや泣ければの話だけね。

「ドローフェイズ、ドロー!」

手札 1→2

この手札・・・よし手札交換だなこれなら後で蘇らせればいいし。

「手札からトレード・インを発動」

トレード・イン 魔

【通常】

手札からレベル8モンスター1体を捨てて発動できる。
デッキからカードを2枚ドローする。

手札 2→1

「手札の墮天使スペルビアを捨てデッキから2枚ドロー。」

手札 1→0→2

「(トレード・インで手札交換か、捨てたカードはスペルビアだが今はクリスティアがいる墓地からの特殊召喚は無理だな、クリスティアを破壊された時の為の準備か。)」

おつ、アドバンス召喚のリリース素材を確保するのに調度いいカードが来たよ、クリスティアいるからフォント・サンクチュアリ発動出来ないからね。

「手札から神秘の代行者 アースを攻撃表示で召喚。」

フィールドに、緑と青の1対の翼をもつ白髪の女性の天使が現れた。

神秘の代行者 アース 光

☆2

【天使族・効果／チューナー】

攻1000

守 800

このカードが召喚に成功した時、自分のデッキから「神秘の代行者アース」以外の「代行者」と名のついたモンスター1体を手札に加える事ができる。

フィールド上に「天空の聖域」が表側表示で存在する場合、代わりに「マスター・ヒュペリオン」1体を手札に加える事ができる。

手札 2↓1↓2

フィールド 2↓3

「神秘の代行者」アースの効果を発動、デッキから「英知の代行者 マーキュリー」を手札に加え血の代償の効果を使い攻撃表示で召喚。

フィールドに、青い衣装、肌、翼をもち片腕に本を持つ男性の天使が現れた。
英知の代行者 マーキュリー 光

☆4

【天使族・効果】

攻 0

守1700

相手のエンドフェイズ時に、このカードが自分フィールド上に表側表示で存在し、自分の手札が0枚だった場合、次の自分のスタンバイフェイズ時に発動する。自分のデッキからカードを1枚ドローする。

LP20000→1500

手札 2→1

フィールド 3→4

「(フィールドには新に2体のモンスターか、来るか。)」

此處でアドバンス召喚したいけど残念ながら手札に無いんだよねカードが、次のドローに期待しておこうかな

ついでにこいつを出しといて、次のターンは2枚引きたいしね

「血の代償の効果を発動、手札のモンスターをセットしターンエンド。」

LP15000→10000

手札 1→0

フィールド 4→5

「俺のターン！ ドロー！」

手札 4→5

「奴は準備万端と言う訳か、ドローカードは・・・くつ、だめか。 奴が攻撃出来ないアドバンテージを生かしたいが、くそつ）俺は、カードを1枚伏せターンエンドだ。 エンドフェイズになった事によりスクリーン・オブ・レツドの効果が発動、俺は1000ポイントライフを払いスクリーン・オブ・レツドを維持する。」

LP 30000→2000

手札 5↓4

魔法・罠 1↓2

やつぱりジャックさん、手札事故かな？ それともやつぱりクリステイアがいるから動けないのかな？

「ドローフェイズ、ドロー。 そして、スタンバイフェイズ英知の代行者 マーキュリーの効果により1枚ドロー。」

手札 0↓2

良いカードが来てくれたなこれは、此れでスクリーン・オブ・レツドを破壊出来るよ
「フィールドの神秘の代行者 アース英知の代行者 マーキュリー をリリース。」

「（くつ、今度こそ来るか！）」

「手札からマスター・ヒュペリオンを攻撃表示で召喚。」

フィールドの2体の代行者が燃え上がり1つの太陽を思わせる巨大な丸い炎へと変わりると

炎の両脇から翼の様に炎が飛び出し、丸かつた炎が徐々に人の形へと変わつていき人の形になるにつれその姿が炎から実体を表し始めた

黄金の装飾の着いた黒い衣装を身に纏い燃え上がる炎の翼をもつ
ギリシャ神話の神を模したモンスターが降臨する。

マスター・ヒュペリオン 光

☆8

【天使族・効果】

攻2700

守2100

このカードは、自分の手札・フィールド上・墓地に存在する「代行者」と名のついたモンスター1体をゲームから除外し、手札から特殊召喚する事ができる。1ターンに1度、自分の墓地に存在する天使族・光属性モンスター1体をゲームから除外する事で、フィールド上に存在するカード1枚を選択して破壊する。

フィールド上に「天空の聖域」が表側表示で存在する場合、この効果は1ターンに2度まで使用できる。

フィールド 5→4

「この状況でマスターヒュペリオンを引き当てただと!?」（次から次へとこいつは、マスターヒュペリオンを召喚したと言うことは確実に効果を使つてくる！ 不味いな）

「冥界の宝札の効果によりデツキからカードを2枚ドロー」

手札 1→3

「マスターヒュペリオンの効果を発動、1ターンに1度、自分の墓地に存在する天使族・光属性モンスター1体をゲームから除外する事で、フィールド上に存在するカード1枚を選択して破壊する。 墓地から神秘の球体を1枚除外しスクリーン・オブ・レッドを破壊。」

魔法・罠 2→1

「くそつ、（やはり破壊されたか、だが！）」

「バトル、白竜の忍者で右側のセットモンスターを攻撃。」

フィールドの白竜の忍者が、相手フィールドにセットされているカード目掛け一瞬の内に幾つ物クナイを投げつけ

セツトカードにクナイが突き刺さりセツトされていていたモンスターがその姿を現す。 背中に自身より大きな時計を背負い両手に持った音叉で投げ付けられたクナイを全て受けとめている黒い衣装を身に纏つた小さな悪魔がそこにはいた。

クロツク・リゾネーター 間

☆3

【悪魔族・効果／チューナー】

攻 1200
守 600

このカードがフィールド上に表側守備表示で存在する限り、このカードは1ターンに一度だけ戦闘またはカードの効果では破壊されない。

「攻撃され表側守備表示になつた事で、クロツク・リゾネーターは自身の効果により戦闘では破壊されない。」

さつきのターンセツトしたのはクロツク・リゾネーターだつたのか・・・最初にセツトしたカードがダーク・リゾネーターだとしたらこのターンは1体しか破壊出来ないか、一応確かめてみるかな。

「大天使クリスティアでクロツク・リゾネーターに攻撃。」

フィールドの大天使クリスティアが真紅の翼を羽ばたかせ空へと舞い上がり、右腕から腕を延長するように光で出来た剣を作りだしクロツク・リゾネーターへと上空から襲い掛かり

クナイを受けとめいた為にクロック・リゾネーターは更なる防御が出来ず、上空から襲い掛かるクリスティアの光の剣により両断される。

フィールド 2→1

「マスターヒュペリオンでセットカードに攻撃。」

フィールドのマスターヒュペリオンが両手を胸の前にだし向かえ合わせに構えると、構えた手の間に太陽系の天体を思わせる様な物が出現しマスターヒュペリオンがそれに、力を込めると天体が輝きだし巨大な炎の柱が空からセットカードへと落ちていき燃え盛る炎の柱がの中でセットされていたモンスターが姿をみせる

そのモンスターが姿を現すと、辺りに「リーン」と言う音が鳴り響き

炎の中には、両手に持つた音叉を打ち鳴らし黒い衣装を身に付け角の着いた灰色の被り物被り背中には金色の輪の装飾を背負った小さな悪魔のモンスターが、自分の回りに音波の障壁を発生させ炎の攻撃を防いでいた。

そのモンスターが姿を現すと、辺りに「リーン」と言う音が鳴り響き

炎の中には、両手に持つた音叉を打ち鳴らし黒い衣装を身に付け角の着いた灰色の被り物被り背中には金色の輪の装飾を背負った小さな悪魔のモンスターが、自分の回りに音波の障壁を発生させ炎の攻撃を防いでいた。

「ダーク・リゾネーターは1ターンに1度戦闘では破壊されん！」

此方の方はやつぱりダーク・リゾネーターだったのね、これで3回攻撃しちゃた訳だからターンエンドか別にカードは伏せなくとも大丈夫か

「ターンエンド。」

「俺のターン！ ドロー！」

手札 4↓5

「来たか、俺は手札からハリケーンを発動！（さあ、どうくる…）」

ハリケーンか…ま、いつかあんまり問題ないしね実際。

ジヤック

手札 4↓5

魔法・罠 1↓0

コナミ

手札 3↓8

魔法・罠 5↓0

「（どうやら防がれなかつた様だな、ならば！）俺はダーク・リゾネーターをリリースし手札からストロング・ウインド・ドラゴンを攻撃表示で召喚！」

フィールドのダーク・リゾネーターが消え去り、新たにフィールドに緑色の皮膚を持

ち全身の筋肉と言う筋肉が盛り上がっているマッスルなドラゴンが現れた。

ストロング・ウインド・ドラゴン 風

☆6

【ドラゴン族・効果】

攻 2400

守 1000

ドラゴン族モンスター1体をリリースしてこのカードのアドバンス召喚に成功した場合に発動する。

このカードの攻撃力は、リリースしたそのモンスターの元々の攻撃力の半分だけアップする。

このカードは同じ攻撃力のモンスターとの戦闘では破壊されない。

このカードが守備表示モンスターを攻撃した場合、その守備力を攻撃力が超えた分だけ戦闘ダメージを与える。

手札 5↓4

フィールド 1↓1

ストロング・ウインド・ドラゴン？ そいつはドラゴン族のモンスターをリリース素材にしなければ攻撃力2400のモンスター、この状況では攻撃力不足だけど・・・何

をしてくるんだろう。

「ふん、俺はストロング・ウインド・ドラゴンでマスターヒュペリオンを攻撃！　ストロング・ハリケーン！」

フィールドのストロング・ウインド・ドラゴンが口を大きく開き空気を大量に吸い込む

それにもともない吸い込んだ空気により肺がある胸部は膨れ上がり

限界まで膨れ上がると、ストロング・ウインド・ドラゴンはそれを一気に吐き出す、その行為は最早息を掃くなどと言うぬるい物では無く

暴風、吹き付けられたのなら一瞬でバラバラになるほどの凶器の息吹き

それが、口から吐き出されと更にうねり回転しマスターヒュペリオンへとその回転を、速度を、威力を上げながら進んでいく

だが―――

その攻撃は、マスターヒュペリオンには届きはしない―――

迫り来る凶器の暴風を、片手を前に出し防いでいた

ただ片手を出しているだけで、ストロング・ウインド・ドラゴンから今も吐き出され

続いている暴風はその進行を完全に止められていた。

ストロング・ウインド・ドラゴンの攻撃は2400、マスターヒュペリオンの攻撃力は2700このままいけば破壊されるのはジャックさんのモンスター 一体何を考えているだ?

「俺はこの瞬間! 手札から速攻魔法イージーチューニングを発動!」

イージーチューニング 魔

【速攻】

自分の墓地のチューナー1体をゲームから除外し、自分フィールド上のモンスター1体を選択して発動できる。

選択した自分のモンスターの攻撃力は、このカードを発動するために除外したチュナーの攻撃力分アップする。

「此で貴様は終わりだ!」

イージーチューニングか・・・墓地にはクロツク・リゾネーターとダーク・リゾネーターがいる。この場合は攻撃力1300上がるダーク・リゾネーターだろうね、そして攻撃力が3700になり調度ライフ1000を削り切られちゃうわけか・・・

「俺は墓地の――」

まあ、そう簡単にはやらせないけどね。

「手札から緑光の宣告者の効果を発動、緑光の宣告者と手札の朱光の宣告者を墓地へ送りイージーチューニングの効果を無効にし破壊する。」

緑光の宣告者 光

☆2

【天使族・効果】

攻 300

守 500

自分の手札からこのカードと天使族モンスター1体を墓地に送つて発動する。

相手の魔法カードの発動を無効にし、そのカードを破壊する。

この効果は相手ターンでも発動する事ができる。

手札 8→6

「何だと!?（防がれだと!?　いやそんな事よりも奴が捨てたのは朱光つまり此方が何らかのモンスター効果を発動させていたら破壊されないと!）」

そして、マスターヒュペリオンは暴風を受け止めていた片腕から炎を吹き出し、その

炎は暴風の威力を物ともせず暴風その物を飲み込みながら突き進み
ストロング・ウインド・ドラゴンは抵抗虚しく炎に飲み込まれ、その体の全てを燃や
し尽くされた。

「ぐうつ！」

LP 20000→1700

フィールド 1→0

「（これを防がれてしまつた異状俺の負けは確実か・・・だがな、）　ただ殺られるのを
待つ俺ではない！　カードを2枚伏せターンエンドだ！」

手札 4→2

魔法・罠 0→2

「（次のターンどちらかは破壊されるだろう、それでも、俺の伏せカードがクロウや遊星
の力になれば！）」

2枚伏せて来たかジャックさんだけどどちらか1枚は破壊させてもらうよ。

「ドローフエイズ、ドロー。」

手札 6→7

「マスターヒュペリオンの効果を発動、墓地の神秘の球体を除外し左側の伏せカードを
破壊」

魔法・罠 2→1

「（左側・・・破壊されたのはプライドの咆哮か。）」

「バトル、マスターヒュペリオンでダイレクトアタック。」

フィールドのマスターヒュペリオンが炎の翼を広げ片腕を空へと举げる

そして、片腕を挙げた先の空には巨大な炎の玉――否、小型の太陽とでも言うべき、質量、周囲に有るもの全て燃やし尽くすかの様に真っ赤に燃え、それは、そこに存在していた。

「来るがいい！ 甘んじて受け手やる！」

その言葉を受け、マスターヒュペリオンは腕を降り下ろす

そして、空に停止していた太陽は目標を燃やすべき相手へと落ちていく、空気を空間を時間を全てを燃やしながらただ無慈悲に落ちていき

ジャツクを飲み込み地面へと当たると弾ける様に極大の火柱をあげただ燃やし続けた全てを燃やし尽くすまで

「ぐわああああああ！」

L P 1 7 0 0 → 0

第二十七話

見事にジャックさんを撃破出来たなー、次の相手はB·F使いの人かーどうするべきかな？ 手札にはあれが有るし、どうしようか・・・

とか、今後の事を少し考えていたら後ろから黒いD・ホイールが走つてきた。

「へつ、ジャックをああも簡単に倒すとは敵ながら天晴れだぜ、」

うん？ 行きなりB·Fさんに褒められたな、あのジャックさん相当強かつたて事か・・・

そんな相手と全力で戦え無かつた事が残念だな・・・ジャックさん、手札事故じやなければな・・・

「だがな！ お前の快進撃は此所までだ！ この俺、クロウがお前を倒して活路を見出だしてやる！」

クロウって言うんだこの人、あつ、だからD・ホイール黒だつたりデッキがB·Fだつたりするのか。

凄くこつた人なんだねクロウさんは、そんなクロウさんには役目を終えた自分から

ちよつとプレゼントを贈るか！

相手のライフが0になつたからバトルフェイズはもう出来ないけど、メインステップ2が残つてるからね。

「フィールドのセットモンスターを反転召喚。」

「てつ！ お前、まだ何かする気かよ！？」

するよ、最後の置き土産だと思つて受け取つてくれると嬉しいな。

フィールドに、2頭身で光のリングを浮き輪の様に体に着けたピンク色のモンスターと緑色のモンスターが現れた。

ジエルエンデュオ 光

☆4

【天使族・効果】

攻 1700

守 0

このカードは戦闘では破壊されない。

このカードのコントローラーがダメージを受けた時、フィールド上に表側表示で存在するこのカードを破壊する。

天使族・光属性モンスターをアドバンス召喚する場合、このカードは2体分のリリースとする事ができる。

「ジエルエンデュオをリリースし、手札から轟雷帝ザボルグを攻撃表示で召喚。」

フィールドのピンクと緑の2体のモンスターが消え去り新たに、両肩に真紅の角を着け白銀の鎧を身に纏つた覚醒した雷帝が現れた

手札 7→6

「おい、そのカードまさか！」

「召喚時効果を発動、轟雷帝ザボルグ自身をコストにしてお互いエクストラデッキから8枚墓地へ送る、因に相手の墓地へ送るカードは此方で選択可能だから。」

フィールドのザボルグが両手を胸の前で打ち付け、打ち付けた左右の手から雷を発生させ手と手の間に左右からの雷が合わさった雷の球体が出来それを両腕を動かし球体を頭上へと持ち上げ、両腕から雷を一気に送り込み自身よりも大きな雷の球体を造り上げた

だが、ザボルグはその雷の球体を自らへと落とし自らに生み出した雷により自身を破壊しフィールドを離れた。

フィールド 4→3

「エクストラデッキのM・HERO アシッド、カミカゼ、ダーク・ロウ 光牙、E・H

ERO ガイア、プラズマヴァイスマン、フレイム・ブラスト、シャイニング・フェニックスガイを墓地へ送る。』

さてと、クロウさんのエクストラデッキから墓地へ送るカードを選ぼうかな。

それにしても、クロウさんのエクストラデッキ何だかBFのシンクロ1色だな……でも何だか1枚だけドラゴンが有るな……よし！ 墓地へ送ろう！

「轟雷帝ザボルグの効果により相手のエクストラデッキからブラックフェザー・ドラゴン、BF-1孤高のシルバー・ウインド2枚、BF-アーマード・ウイング3枚、BF-アームズ・ウイング2枚を墓地へ送る。」

「エクストラデッキからカードを8枚も墓地へ送るだと！ そんなインチキ効果ありかよ！」

アリだよ！ こうやつてちゃんと存在しているんだから、それに効果だつてザボルグって言うコストを支払っているんだか此方だつて痛いんだよ。

「カードを1枚伏せターンエンド。」

手札 6→5

魔法・罠 0→1

此で仕込みは終わった、後はクロウさんのターンになつたら発動させるだけでお仕事

終了だね。

「あいつのフィールドには、特殊召喚を封じるクリステイア、毎ターン此方のカードを破壊してくるマスター・ヒュペリオン、魔法・罠の破壊を防ぐ白龍の忍者が居やがる、だが何でだ？　あいつは進撃の帝王を発動しなかつたんだ？　発動しわすれ何て事は無いだろうし一体なにがしたいんだ。まあいいさジヤックの残したカードと俺の手札なら奴のモンスターを破壊出来る、まあ1体だけだけどな。」

「俺のターン、ドロー。」

手札 5→6

「トラップ発動、破壊指輪。　白龍の忍者を破壊しあり1000ダメージを受ける。」「1000ダメージだと!?　それだとてめえのライフが！」

破壊指輪 罠

【通常】

自分フィールド上の表側表示モンスター1体を破壊し、お互いに1000ポイントダメージを受ける。

フィールドの白竜の忍者の指に、導火線に火の着いた小さな爆弾の付いた指輪が装着

され導火線の火が爆弾まで達すると指輪の爆弾は盛大に爆発し白竜の忍者を破壊した。

LP 1000→0

フィールド 3→2

魔法・罠 1→0

相手のライフが0になつた事で強制的にメインフェイズ1とバトルフェイズは終了だね。

大会側もまさか自分で自分のライフを0にするとは思つて無いだろうしある意味抜け道見たいな物だよね。

相手にバトルさせないつて言うこの方法は。

さて、シドと交代しようかな相手のクロウさんが何だか何かを言つているけど気にならない！



さて、シドにチームのステッカーを渡してだな最後までちゃんと戦いたかつたけど残念だよ。

「おい、コナミお前がきつちり約束を守つたもは良いが……最後のあれは無いだろう。」
何故だ、シドに突つ込まれてるちゃんと約束を守つたて言うのに！

「お前な……その顔は何故？ つて言う顔だな、この試合は決勝だぞ！ それなのに自爆は無いだろ自爆は……」
しようがないじやないか……やるとしたら最後までやりたいんだから自爆しか思い付かなかつたんだよ！

「自爆しか思い付かなかつたつて顔してるなお前は……まあいい、お前はちゃんと約束を守つてくれたんだからな。」

おつ、シドにネチネチ言われるかと思つたけどこれ以上は言われ無さそうだな。

やつぱり約束を守つたつて言うのが良かつたのか、昨日シドに言われた約束、ジャックを決勝戦で戦わせる為に1人1殺つて言う約束を守つたからね、1人を倒したら次の相手に負けるそしてジャックまで回す。

「次は俺の番だな、きつちりやつてジャックにバトンを渡してやるさ。 じやあなコナミ。」

シドはそう言うと、颯爽とD・ホールに乗りコースを走り去つていった。
シドがきつちり仕事をするのか……久々にあれ見れるのかな。



コナミがやつた自爆は、まあ褒められた物ではないが彼奴も次の俺の事を考えたのだろうな墓地にHEROは送っているし、相手には攻撃させて無いしな。
だったら俺もやるだけだ、クロウを。 特殊召喚を封じるられているBFなどそんなに恐くはない。

「クロウ様、先程は此方の選手が決勝戦だと言うのに御無礼な事を御許し下さい。」

「クロウ様!? 止めてくれそんな呼び方、何だか気持ち悪いからよ。 それにさつきのは別に構わねえよ、ああ言うのだって此方の動きを封じる捨て身の戦法何だろうしな。・・・まあ、あれ確かに捨て身の戦法何だろうがコナミからしたらそんな事は一切考えてはいらないだろうなあいつは。

「たとえバトルが出来なくても俺にはやれる事がある。 俺は手札から速攻魔法、月の書を発動! 大天使クリステイアを裏側守備表示にするぜ!」

月の書 魔

【速攻】

フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択し、裏側守備表示にする。

手札 6↓5

月の書でクリスティアを裏側にしたか、これで奴は特殊召喚が出来る様になつたが攻撃は出来ない上に軒並みコナミにシンクロは墓地へ落とされた、さて何をしてくる。

「手札から永続魔法、黒い旋風を発動。」

黒い旋風 魔

【永続】

自分フィールドに「BF」モンスターが召喚された時にこの効果を発動できる。

そのモンスターより低い攻撃力を持つ「BF」モンスター1体をデッキから手札に加える。

「相手フィールドにモンスターが存在し自分フィールド上にモンスターが存在しなかつた時に、このカードはリリース無しで通常召喚出される。俺は手札からBF一曉のシリツコを攻撃表示で召喚だ。」

フィールドに、黄色い嘴を持ち青い毛並みの鳥頭に背中には黒く大きな翼、黒い鳥の尾に太ももから下が鳥の足をした鳥人のモンスターが現れた。

B F — 晓のシロツコ 閣

☆5

【鳥獣族・効果】

攻 2000
守 900

相手フィールドにモンスターが存在し、自分フィールドにモンスターが存在しない場合、このカードはリリースなしで通常召喚できる。

1ターンに1度、自分メインフェイズ1に自分フィールドの「B F」モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターの攻撃力はターン終了時まで、そのモンスター以外のフィールドの「B F」モンスターの攻撃力の合計分アップする。

この効果を発動するターン、対象のモンスターしか攻撃できない。

手札 5↓4

「暁のシロツコがフィールドに召喚された事で黒い旋風の効果を発動だぜ！俺はデッキから手札にB F—月影のカルートを手札に加えるぜ。」

手札 4↓5

カルートか、なるほど次に俺が攻撃して来たときの為の準備か。

だが俺のフィールドにはマスターヒュペリオンがいる、モンスター1体ぐらいなら次のターンになつたら破壊出来る。だがそれは奴も理解しているはずだ、なら更に来るか。

「自分フィールドにこのカード以外のBFが存在する場合、このカードを手札から特殊召喚出来る。手札からBF—疾風のゲイルを攻撃表示で特殊召喚だ。」

フィールドに、両腕が翼で体は藍色の羽に覆われ緑色の頭部には頭の脇に翼の様な跳ね毛がある3頭身の鳥人のモンスターが現れた。

BF—疾風のゲイル
闇

☆3

【鳥獣族・チューナー／効果】

攻1300

守 400

自分フィールドに「BF—疾風のゲイル」以外の「BF」モンスターが存在する場合、このカードは手札から特殊召喚できる。

1ターンに1度、相手フィールドの表側表示モンスター1体を対象として発動できる。

その相手モンスターの攻撃力・守備力を半分にする。

手札 4↓3

フィールド 1↓2

ゲイル

か、奴の効果を受けたら永続的に攻守が半分になる厄介だな・・・

まあ、俺には余り関係無いがな。

「疾風のゲイルの効果を発動、マスターヒュペリオンの攻撃力、守備力を半分にするぜ！」

フィールドの疾風のゲイルが両腕の翼を力強く羽ばたかせると、羽の羽ばたきにより小さな竜巻が巻き起こる

その竜巻はマスターヒュペリオン目掛け移動し、巻き起こる風で目標にダメージを与えるマスターヒュペリオンを竜巻の中心へと呑み込むと風は消え去り代わりに風によりダメージを受け身体中にキズを受けたマスターヒュペリオンがその場に存在していた。

「カードを2枚伏せターンエンドだ！」

手札 3↓1

魔法・罠 2↓4

第二十八話

クロウのフィールドにはシロッコにゲイルの2体のモンスターに、伏せカードが3枚か。

ジャックにきつちりバトンを渡すために、俺もやるとするか。

「私のターン、ドロー。」

手札 5↓6

墓地にはコナミが落としたM・HERO達がいる、今なら楽に奴を出すことが出来る
が・・・今、俺がすべき事はクロウを倒し遊星に倒される事だ。

一気に決めたい所だが、ここは我慢だコナミも我慢していたのだから。

「私はフィールドのマスターヒュペリオンの効果を発動します。 墓地の神秘の球体を
除外し、貴方が伏せた左側のカードを破壊します。」

フィールド上のマスターヒュペリオンが伏せられているカードに手を向けると、伏せ
られているカードを中心に炎の柱が燃え上がる。

「破壊されるんだつたら！ トラップ発動、ゴッドバードアタック！ 疾風のゲイルをリリースしマスターヒュペリオンと大天使クリスティア2体のモンスターハンターを破壊だぜ！」

燃え盛る炎の中、トラップが発動する。 フィールドのゲイルがその命と引き換えに相手フィールドの2体のモンスター目掛け突撃していく、ゲイルはその命を散らし2体を破壊した。

ゴッドバードアタック 罷

【通常】

自分フィールドの鳥獣族モンスター1体をリリースし、フィールドのカード2枚を対象として発動できる。

そのカードを破壊する。
シド（アポリア）

フィールド 2→0

クロウ

フィールド 2→1

魔法・罠 4→3

左側はどうやらゴットバードアタックだつた様だな、見事にマスターヒュペリオンにクリステイアを破壊されたか。だが、俺には余り関係は無いがな。

「私は手札から、ミラクル・フェージョンを発動します。」

ミラクル・フェージョン 魔

【通常】

「自分のフィールド・墓地から、「E・HERO」融合モンスター1枚を除外し、その融合モンスター1枚を エクストラデッキから融合召喚する。

手札 6→5

「私は墓地のM・HERO アシッド、M・HERO ダーク・ロウを除外しE・HERO アブソルート ZEROを特殊召喚します。」

フィールドに、雪の様に白い純白のマントを身に付け、氷柱の様な鋭さと雪の結晶の様な美しさを持つ純白の鎧を身に纏つた氷結のHEROがフィールドに現れた。
E・HERO アブソルートZero 水

☆8

【戦士族・融合／効果】

攻2500

守2000

「HERO」と名のついたモンスター+水属性モンスターこのカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードの攻撃力は、フィールド上に表側表示で存在する「E・HERO アブソルートZero」以外の水属性モンスターの数×500ポイントアップする。

このカードがフィールド上から離れた時、相手フィールド上に存在するモンスターを全て破壊する。

フィールド 0→1

「あのカードは確か・・・フィールドから離れたら此方のモンスターを全滅させる奴か厄介だぜ。」

「更に私は手札から、マスク・チエンジを発動します。」

マスク・チエンジ 魔

【速攻】

自分フィールドの「HERO」モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを墓地へ送り、そのモンスターと同じ属性の「M・HERO」モンス

ター1体をエクストラデッキから特殊召喚する。

「アブソルート ZERO その力を開放し、新たな力を手に入れなさい変身召喚！現れなさいM・HERO アシッド。」

その呼び声に応える様にアブソルート ZEROは力を振るう。全てを凍てつかせ氷らせる絶対零度の力がフィールドを一瞬にして氷らせ、一切の生命の存在も許さない美しくも凶惡な氷の世界へとフィールドが変貌した。

その氷の世界に取り込まれた暁のシロツコは、その存在を停められていた、時間の流から、生命の活動、自信の魂を、全てを氷らされ氷の牢獄に繋がれた

だが、幸か不幸かこのシロツコはこの牢獄から直ぐに解き放たれるだろう

純白の姿から小型の銃を持ち仮面を被り青を基調とした姿へと変わったHEROによつて

そして、新たなHEROが持つている小型の銃が相手フィールド場に狙いを定め引き金を引くと、小型の銃から発射されたとは思えない威力の破壊の光線が打ち出され氷の漬けのシロツコを伏せカードを破壊し尽くし、相手フィールドを破壊し尽くした。

☆8

【戦士族・融合／効果】

攻2600

守2100

このカードは「マスク・チエンジ」の効果でのみ特殊召喚できる。このカードが特殊召喚に成功した時、相手フィールド上の魔法・罠カードを全て破壊し、相手フィールド上の全てのモンスターの攻撃力は300ポイントダウンする。

シド（アポリア）

手札 5↓4

クロウ

フィールド 1↓0

魔法・罠 3↓0

「E・HERO アブソルート ZEROがフィールドから離れた事により相手フィールド場のモンスターを全て破壊し、更にM・HERO アシッドが召喚された事により相手の魔法・罠カード全て破壊します。」

「モンスターに伏せカード纏めて破壊だと!? そんなインチキコンボありかよ!」

まあ確かに酷いコンボではあるなこれは、だが俺は何を言われようと容赦はしないこのデュエル必ず勝つただそれだけだ。

「バトルフェイズ、行きないM・HERO アシッド プレイヤーにダイレクトアタック A i d b u i l e t.」

構えていた銃を相手プレイヤーへと向けトリガーリード引く、そして銃口から相手を溶かし消し去る酸性の銃弾が相手プレイヤーに襲い掛かる

「ぐううううツ。」

L P 3 0 0 0 → 4 0 0

「私は此で、ターンを終了します。」

奴の手札の残り1枚、それは既に解っている奴が次のターン伏せカードを伏せたとしても此方は対応出来る、さあ奴は次のターンどう出てくる。

「くつ、俺のターンドロー。」

手札
1 → 2

「はつ、今の状況でこのカードが来やがったかだつたらやつてやるぜ、俺は手札からB F

黒槍のブラストを攻撃表示で召喚だ！」

フィールドに、巨大な捻れた槍を持ち頭部を特徴的な赤い羽に覆われた青黒い鳥人が現れた

手札 2↓1

フィールド 0↓1

ドローしたのは黒槍のブラストか、攻撃表示で召喚したと言う事はこのターンでアシッドが破壊されるな

「行け、黒槍のブラスト！ デス・スパイラル！」

ブラストはその手に持つ巨大な槍を

アシッド目掛け高速で投げ付ける、だがそれを撃ち落とそうとアシッドが酸性の銃弾が槍目掛け発射される

本来なら次の瞬間には、槍は溶かされ更にブラストをもその酸弾で溶かして仕舞う、だが

「おれは手札からBF 月影のカルートを墓地へ送つてブラストの攻撃力をターン終了時まで1400アップさせるぜ！」

手札 1↓0

発射された酸弾が槍に当たる直前、捻れた槍が高速で回転し巻き起こる風が酸弾を弾き飛ばしM・HEROアシッドを貫き破壊する。

LP 4000↓3500

フィールド 1↓0

「（はつ、すまねえな遊星俺は此所までみてえだ・・・）俺はターンエンドだ。」

第二十九話

クロウにM・HERO アシッドが破壊されたが問題は無い、それに其が奴の最後の足掻きの様だからな。

まあ、此方は派手さにはかけるが終わらせるとするか

「私のターン、ドロー。」

手札 4→5

「私は手札から、コンバート・コンタクトを発動します。」

コンバート・コンタクト 魔

【通常】

このカードは自分フィールド上にモンスターが存在しない場合のみ発動する事ができる。

自分の手札及びデッキから1枚ずつ「N（ネオスペーシアン）」と名のついたカードを墓地に送り、デッキをシャッフルする。

その後、自分のデッキからカードを2枚ドローする。

「私は、手札からN・アクア・ドルفين、デッキからN・エア・ハミングバードを墓地

へ送り、デッキから2枚ドローします。」

手札 5→3→5

クロウがアシッドを破壊してくれたおかげでこのカードが使えたな、まあ使わなくとも勝てるが次のターンの遊星に少しはサービスするか。

「私は手札からE・HERO レディ・オブ・ファイアを攻撃表示で召喚します。」

フィールドに、真っ赤に燃える炎の様な髪を持ち白い衣装に炎の様な装飾が着いた女性のHEROが現れた

E・HERO レディ・オブ・ファイア 炎

☆4

〔炎族・効果〕

攻1300

守1000

自分のターンのエンドフェイズ時、自分フィールド上に表側表示で存在する「E・HERO」と名のついたモンスターの数×200ポイントダメージを相手ライフに与える。

手札 5↓4

フィールド 0↓1

「更に私は手札からヒーロー・マスクを発動します。」

ヒーロー・マスク 魔

【通常】

自分フィールドの表側表示モンスター1体を対象として発動できる。

デッキから「E・HERO」モンスター1体を墓地へ送り、対象の自分の表側表示モンスターはエンドフェイズまで、この効果で墓地へ送ったモンスターと同名カードとして扱う。

手札 4↓3

「私はフィールドのE・HERO レディ・オブ・ファイアを選択し効果を発動。 デッキからE・HERO ネオスを墓地へ送りこのターンのエンドフェイズ時までレディ・オブ・ファイアはE・HERO ネオスとして扱います。」

フィールドのE・HERO レディ・オブ・ファイアの周囲に炎が燃え上がりその炎が墓地へ送つたネオスの形へと変わりレディ・オブ・ファイアの隣に佇む。

「更に私は、ソウル・チャージ発動します。」

ソウル・チャージ 魔

【通常】

「ソウル・チャージ」は1ターンに1枚しか発動できず、このカードを発動するターン、自分はバトルフェイズを行えない。

自分の墓地のモンスターを任意の数だけ対象として発動できる。

そのモンスターを特殊召喚し、自分はこの効果で特殊召喚したモンスターの数×1000LPを失う。

手札 4→3

「私は墓地のE・HERO ネオスを選択します。」

フィールドに銀色のスーツを纏つた筋肉隆々の正義のHEROが現れる

E・HERO ネオス 光

☆7

【戦士族】

攻2500

守 2000

ネオスペースからやつてきた新たなるE・HERO。ネオスペーシアンとコンタクト融合する事で、未知なる力を発揮する！

「更に墓地からN・アクア・ドルفينを選択」

フィールドに青と白の体をもつた粒羅な瞳をした人型のイルカが現れた
N・アクア・ドルفين 水

☆3

【戦士族・効果】

攻 600
守 800

1ターンに1度、手札を1枚捨てて発動できる。
相手の手札を確認し、その中からモンスター1体を選ぶ。

選んだモンスターの攻撃力以上の攻撃力を持つモンスターが自分フィールド上に存在する場合、選んだモンスターを破壊して相手ライフに500ポイントダメージを与える。

存在しない場合、自分は500ポイントダメージを受ける。

「そして、最後にN・エア・ハミングバードを選択し特殊召喚します。」
フィールドに白い羽に赤い羽毛の体を持つ鳥人のモンスターが現れる

N・エア・ハミングバード 風

☆3

【鳥獣族・効果】

攻 800

守 600

1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に発動できる。

自分は相手の手札の数×500ライフポイント回復する。

「3体のモンスターを特殊召喚した事により私はライフポイントを3000支払います。」

LP 3500→500

フィールド 1→4

「墓地から3体のモンスターを一気に召喚かよ・・・(だがそれで奴のライフは500まで減ったのはありがてえ)」

これでモンスターは揃つた、本来なら此所で手札にあるスペーシアン・ギフトを使い手札補充をするべきなのだろうがこれ以上手札は必要ない、ならやるとするか

「E・HERO ネオスはネオスペーシアンと融合する事により新たなHEROへと新生する——」

ただこいつを暴れさせられないのが残念だな

「3つの力が1つとなつた時、はるか大宇宙の彼方から、最強の戦士を呼び覚ます！トリプルコンタクト融合！」

その言葉と共にフィールドの上空に星々が輝く銀河が現れ、その銀河目掛け3体のモンスターが飛び上がり銀河全体が光輝く

「銀河の渦の中より現れよ！『E・HERO ストーム・ネオス』！」

逆巻き光輝いでいる銀河が更に輝き極大の光の爆発が辺り一面を照らしだ銀河が消え、フィールドに一瞬の静寂が広がる

そして、銀河が渦巻いていた中心に新に新生したHEROが其所には存在していたネオスペーシアン2体のモンスターの水と風の力をその身に取り込み

その体は取り込んだ水の力を表す様に青い強固な鎧を纏い、背中には風の力を具現化し鎧と一体化した白い翼を持つ風と水の力操るし嵐のHEROがフィールドへと舞い降りる。

E・HERO ストーム・ネオス 風

☆9

【戦士族・融合／効果】

攻3000 守2500

「E・HERO ネオス」+「N・エア・ハミングバード」+「N・アクア・ドルフイン」自分フィールド上の上記のカードをデッキに戻した場合のみ、

エクストラデッキから特殊召喚できる（「融合」魔法カードは必要としない）。

1ターンに1度、自分のメインフェイズ時にフィールド上の魔法・罠カードを全て破壊できる。

また、エンドフェイズ時、このカードはエクストラデッキに戻る。

この効果によつてこのカードがエクストラデッキに戻つた時、フィールド上のカードを全て持ち主のデッキに戻す。

フィールド 4→2

「なつ、攻撃力3000の融合モンスターだと!?」

「ですが私はこのターンにソウル・チャージを発動した為、貴方に攻撃する事は出来ません。」

だが、フィールドに2体のHEROが居る時点で勝負は決まった後はターンを終了するだけだ。

「へつ、じゃあ俺は首の皮一枚で助かつたって事か。」

「それは、どうでしょうか。私は何も伏せずにターンを終了します。」

「何？ どういう事だよ・・・」

「そして、この瞬間E・HERO レディ・オブ・ファイアの効果が発動します。」

フィールドのレディ・オブ・ファイアの隣に佇んでいる炎で形づくられたネオスが一段と激しく炎を燃え上がらせる

「フィールドに表側表示で存在するE・HEROと名のついたモンスターの数×200ポイントダメージを相手ライフに与えます。私のフィールドにはE・HEROが2体存在します、よつて貴方に400ポイントのダメージを与えます。」

「なつ！ まじかよ！」

そして、炎で出来たネオスが相手へと目掛け動き出すその体の炎を燃え上がらせ炎の拳を振りかぶり、渾身の力を込めクロウを殴り付ける

炎のネオスの拳の威力と灼熱の炎による攻撃がクロウのライフをゼロへと削りきる

「くつ、そ、うううう・・・すまねえ、遊星・・・」

LP 400→0

ここでクロウは倒せたか、俺のするべき事は終わつたな後は残り500のライフを遊星が0にすればジャックの番に回す事が出切る。

そして、数十秒程だろう時間が過ぎ後ろから新にコースを切り裂くようにD・ホイールを疾走させ不動 遊星が現れた。

「来たか、不動 遊星・・・」

不動 遊星には聞えない様に咳く、そう言えば一昔前の俺は不動 遊星を倒そと躍起になつていたな其が今は逆に倒される事を望むとはな・・・

「ジャック、クロウ、俺は必ず勝つて見せる。お前達の今までの戦いを無駄には絶対にしない！」

不動 遊星の意気込みは十分の様だな。だが勝つのは俺達だ。

「では、早速ですが遊星様デュエルを再開致しましようか。」

「ああ、そうだなシド。デュエルを始めようお互いに悔いが残らない様なデュエルを！」

「そうですね遊星様、私も悔いの残らないデュエルをするつもりです……エンドフェイズ時E・HERO ストーム・ネオスの効果が発動、このカードはエクストラデッキに戻します、そしてこの効果によつてこのカードがエクストラデッキに戻つた時、フィールド上のカードを全て持ち主のデッキに戻します」

フィールドのE・HERO ストーム・ネオスが秘められたその力の一端が解放される。

フィールド全土に暴風が吹き荒れ、豪雨が降り注ぐその荒れ狂う自然の力の前にフィールド上に存在する全ては抗う事は出来ず吹き飛ばされる。

シド（アポリア）

フィールド 2→1

遊星

フィールド 1→0

「なつ!? カードを全てデツキに戻す効果だと!」

「さあ、遊星様これで私のターンは終わりました貴方のターンです。」

「シド・・・やはりお前達は——」

ちつ、感付かれたかだが此はお前がとやかく言うことでは無い。まあ、真剣に闘うお前達には失礼な話しかも知れないが。

「俺達は全力で闘つた悔いなど無い。お前はお前のするべき事をしろ俺達がそうで有るようにな、済まないとは思う——」 だが、不動 遊星 俺達にも恩がある、だからこそ! 俺達は最高の舞台を用意するただそれだけだ!」

最早、言葉などいらない全力でぶつかって来い不動 遊星 目の前のチャンスを掴みとつて見せろよ

「：分かった、なら俺は何も言う事は無い——行くぞ、シド! 俺のターン、ドロー」

遊星

手札 5→6

「手札から調律を発動、デツキからクイック・シンクロンを手札に加える、そして調律の

効果によりデツキの1番上のカードを1枚墓地へ送る。」

調律 魔

【通常】

デツキから「シンクロン」チユーナー1体を手札に加えてデツキをシャツフルする。
その後、自分のデツキの一番上のカードを墓地へ送る。

調律からのクイック・シンクロンか一体 さて 一体何を出して来る

「手札のボルト・ヘッジホッグを墓地へ送り、クイック・シンクロンを攻撃表示で特殊召喚。」

カウボーイハットを被り赤いマントを纏つた機械仕掛けのガンマンがピストルを構えフィールドに現れた。

手札 6↓4

フィールド 0↓1

「更に手札から」

チューニング・サポーター 光

☆1

【機械族・効果】

攻 100
守 300

フィールドのこのカードをS素材とする場合、このカードはレベル2モンスターとして扱う事ができる。

このカードがS素材として墓地へ送られた場合に発動する。
自分はデッキから1枚ドローする。

頭にスツボリと大きなライパンを被せ黄色いマフラーを首に巻き付けた2頭身の機械のモンスターがフィールドに現れた。

手札 4↓3

フィールド 1↓2

チューニング・サポーターかシンクロ素材にすれば1枚ドロー出切る、しかもこいつは任意にレベルを1↓2に変更出来る。

ボルト・ヘッジホッグは今は使わないで温存か、1枚ドローに1枚確実に使えるカードを墓地へ送つたか。

「そして、チューニング・サポーターの効果を発動自身のレベルを2に変更しレベル2となつたチューニング・サポーターにレベル5クイック・シンクロンをチューニング！」

クイック・シンクロンがその姿を5つの列なつた緑のリングへと変わりフィールドの上空へと舞う

「集いし思いがここに新たなる力となる。光さす道となれ！」

上空を飛ぶ5つのリングをチューニング・サポーターが大地を蹴り飛び上がり、5つのリングを潜り抜けるとリングを貫く様に光の柱が発生する

「シンクロ召喚！燃え上がれ、ニトロ・ウォリアー！」

そして光の柱が消えると、そこにはウォリアー特有の面影が余り存在しない緑を基調とし腰に大型のブースターをつけたモンスターが現れた。

ニトロ・ウォリアー 炎

☆7

【戦士族・シンクロ／効果】

攻2800

守1800

「ニトロ・シンクロ」十チューナー以外のモンスター1体以上

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分のターンに自分が魔法カードを発動した場合、このカードの攻撃力はそのターンのダメージ計算時のみ1度だけ1000ポイントアップする。

また、このカードの攻撃によつて相手モンスターを破壊したダメージ計算後に発動で
きる。

相手フィールド上に表側守備表示で存在するモンスター1体を選択して攻撃表示に
し、そのモンスターにもう一度だけ続けて攻撃できる。

フィールド 2→1

「チューニング・サポートーがシンクロ素材として墓地へ送られた事によりデッキから
カードを1枚ドローする。」

手札 3→4

シンクロ召喚したのはニトロ・ウォリアーか打点が高い上に魔法カードを使えば更に
攻撃力を上げられる、其ぐらいで無ければジャックとはまともには闘えない
まあ悪くは無いモンスターだな。

「行くぞ、シド。ニトロ・ウォリアーでプレイヤーにダイレクト・アタック！ ダイナ
マイト・ナックル！」

ニトロ・ウォリアーの腰の大型のブースターが勢いよく噴射し、相手への距離を一氣
に縮め拳を振りかぶる拳を打ち出す瞬間、肘部分の噴射口の様な物から腰のースター同

様勢噴射し拳が更なる加速が加わり

超高速の拳が、相手のライフを一気にゼロへと削りきる。

シド

LP 500→0

「カードを2枚伏せターンエンド。」

手札 4↓2

魔法・罠 0↓2

これで俺の役目は終了か・・・まあこう言う負けは悪くない物だな。

第三十話

コナミに続きシドも負けたか……しかし、奴等めこんな強引な事を決勝で仕出かすとはな。

「全く、貴様等は……」

「はは……すみませんジャック様、負けてしました。」

負けてしましたか、その割には貴様の表情や声には余り悲壮感が感じられないがな、むしろ何処かやりきった感を感じるぞ。

「色々と言いたい事は有るが、まあ、今言えるの事は、俺は良い仲間を持った物だな。」「ジャック様——」

WRGP決勝、最後の闘い 不動 遊星との決戦の舞台を用意してくれたのだ、感謝しなければな。

「今度こそ見せてやろう、俺のデュエルをな。 その目にしかと見届けろよシド。」「分かりました、ジャック様の勝利をこの目にしかと。」

シドのその言葉を聞き俺はD・ホイールを走らせる、これ以上の会話は不要だ俺達には

コナミ、シド、その目に焼き付けろ俺のデュエルを　お前達が俺の為に用意したこのデュエルを勝利する姿をな！



コースの先を走る不動　遊星に追い付くまでは其ほど時間などからないだが、俺の中では今まで過ごしてきた出来事が幾つも思い浮ぶ

だが、思い出に浸るのはまだ早いこの闘いを勝利する全てはそれからだ。

だからこそ―――

「不動　遊星！　このデュエル俺が勝つ！」

仲間達の期待に答える為に、俺がキングで有ることを証明する為に勝つ！

「俺は決して負けない！　俺達の夢を必ず叶えてみせる！」

お互に負けられない理由がある、お互に自信の勝利を信じこのデュエルを闘う
だからこそ！　俺の魂が燃え上がる！　互いに死力を尽くす全力のデュエル——
此れこそ！　俺の求めるデュエルだ！

「俺のターン！　ドロー！」

手札 5→6

「行くぞ！　自分フィールドにモンスターが存在せず相手フィールドにモンスターが存
在する時、手札のこのカードを特殊召喚出来る！　俺は手札のバイス・ドラゴンを攻撃
表示で特殊召喚！」

紫色の皮膚に緑色の翼膜を持つ凶悪な顔のドラゴンが咆哮と共にフィールドに現れ
た

バイス・ドラゴン 閻

☆5

【ドラゴン族・効果】

攻2000

守2400

相手フィールドにモンスターが存在し、自分フィールドにモンスターが存在しない場合、このカードは手札から特殊召喚できる。

この方法で特殊召喚したこのカードの元々の攻撃力・守備力は半分になる。

手札 6→5

フィールド 0→1

「更に手札から、ダーク・リゾネーターを攻撃表示で召喚！」

背中に金色の丸い装飾を身につけ黒い衣装を着た小さな悪魔が両手に持った音叉を鳴らしフィールドに現れた

ダーク・リゾネーター 閻

☆3

【悪魔族・チューナー／効果】

攻1300

守 300このカードは1ターンに1度だけ、戦闘では破壊されない。

手札 5→4

フィールド 1→2

「レベル合計は8—— 来るか！」

見せてやろう、俺のエースモンスターを！　その目にその身に刻み込むがいい！
「俺はレベル5バイス・ドラゴンにレベル3ダーク・リゾネーターをチューニング！」

ダーク・リゾネーターが両手に持った音叉を打ち鳴らすと、その姿が3つの列なつた
緑のリングへと変わりフィールドの上空へと舞い上がる

「魔神を束ねし蟻の王よ!!　その大いなる力で全てを蹂躪せよ!!。」

バイス・ドラゴンが咆哮をあげフィールドの空中を飛ぶ3つのリングへと飛び立ち、
3つのリングの中へと入るとリングを黒い光の柱が貫く様に発生する

「シンクロ召喚！　魔王龍ベエルゼ！」

通常とは違うシンクロ召喚時の黒い光のが消えるとそこには、黒い人の形をした上半
身が蠅の顔を思わせる胴体の上にあり背中からは2つの黒い龍の首が伸び下半身は黒
く長い尻尾を生やした

魔王の名を関するドラゴンが漆黒のオーラを纏いフィールドを揺るがす咆哮と共に
降臨する。

魔王龍　ベエルゼ　闇

☆8

【ドラゴン族・シンクロ／効果】

攻3000

守3000

闇属性チユーナー+チユーナー以外のモンスター1体以上

このカードは戦闘及びカードの効果では破壊されない。

また、このカードの戦闘または相手のカードの効果によって自分がダメージを受けた時に発動する。

このカードの攻撃力は、そのダメージの数値分アップする。

フィールド 2→1

「魔王龍 ベエルゼ——— つ!?（何だ、赤き龍の癌が疼く此は一体!?)」

「このままバトルだ！ 魔王龍 ベエルゼでニトロ・ウォリアーに攻撃！ 『魔王の赦肉祭』ベエルズ・カーニバル！」

背中から伸びた2つの龍の顔から漆黒の黒炎がニトロ・ウォリアー目掛け吐き出される。

当たれば灰さえも残さず全てを燃やし尽くされる炎が、ニトロ・ウォリアーの眼前へと迫り来る

「やらせはしない！　トラップ発動！　くず鉄のかかし、相手モンスターの攻撃を無効にする。」

くず鉄のかかし 罠

【通常】

相手モンスターの攻撃宣言時に、その攻撃モンスター1体を対象として発動できる。その攻撃を無効にする。

発動後このカードは墓地へ送らず、そのままセットする。

ニトロ・ウォリアーを燃やそうと迫っていた黒炎が、トラップ発動と共に現れた様々な道具で構成された案山子により攻撃は防がれる

「発動したくず鉄のかかし墓地へは行かず、再び魔法・罠ゾーンにセットされる。」

「攻撃力が高くとも防がれては意味がないか、俺はカードを1枚伏せターンエンドだ。」

手札 4→3

魔法・罠 0→1

さあ、不動 遊星 貴様はどうベエルゼを攻略する、生半可な事では俺のこいつは倒せはしないぞ。

「俺のターン、ドロー！」

手札 2↓3

「俺は手札からジヤンク・シンクロンを攻撃表示で召喚。」

背中は大きなエンジンを背負いオレンジ色の装甲の3頭身程の体に装甲と同じ色の帽子を被り首には白いマフラーを巻いた小さな戦士がファイルドに現れた。

ジヤンク・シンクロン 間

☆3

【戦士族・チューナー／効果】

攻1300

守 500

このカードが召喚に成功した時、自分の墓地のレベル2以下のモンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを守備表示で特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化される。

手札 3↓2

ファイルド 1↓2

ジヤンク・シンクロンか墓地からレベル2以下のモンスターをファイルドに効果無効に特殊召喚するレベル4、5のシンクロを出すには便利なカードだ、さて何が出てくる

!

「ジャンク・シンクロンの召喚時効果を発動、墓地からチューニング・サポートーを効果を無効にし守備表示で特殊召喚。」

ジャンク・シンクロンの力により墓地にいるチューニング・サポートーがフィールドへと蘇る、だが効果を無効にされているからだろうかその体は灰色になっていた

フィールド 2→3

「さらに自分フィールド上にジャンクと名のつくモンスターが存在する時、手札からこのカードを特殊召喚出来る現れるジャンク・サーバント。」

フィールドのジャンク・シンクロンの横に遣える様に茶色い装甲を貴重とした使人を思わせる戦士がフィールドに現れた

ジャンク・サーバント 地

☆4

【戦士族・効果】

攻1500

守1000

自分フィールド上に「ジャンク」と名のついたモンスターが表側表示で存在する場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。

手札 2→1

フィールド 3→4

チューニング・サポーター、ジャンク・サーバント、ジャンク・シンクロン、合計レベルは8と言う事は来るか

「レベル1チューニング・サポーターとレベル4ジャンク・サーバントにレベル3ジャンク・をチューニング！」

ジャンク・シンクロンが背中のエンジンに火を入れると轟音をあげ動き出す。

そして、その姿を自身のレベルと同じ数の緑のリングへと変わり空中へと列なり舞い上がる

「集いし闘志が怒号の魔神を呼び覚ます。光さず道となれ！」

チューニング・サポーター、ジャンク・サーバントがそれぞれ空中を飛ぶリングの中を通過すると3つのリングを貫く光の柱が発生する

「シンクロ召喚！粉碎せよ、ジャンク・デストロイヤー！」

光の柱が消え去るとそこには、金色の装飾と黒い装甲の屈強な体に頑強な4本の腕を持ち背中にX字の翼の様に展開した装甲を持つ破壊者の名に相応しい風貌の戦士がフィールドに現れた

ジャンク・デストロイヤー 地

☆8

【戦士族・シンクロ／効果】

攻2600

守2500

「ジャンク・シンクロ」+チューナー以外のモンスター1体以上

このカードがシンクロ召喚に成功した時、このカードのシンクロ素材としたチューナー以外のモンスターの数までフィールド上のカードを選択して破壊できる。

フィールド 4→2

「ほう、ジャンク・デストロイヤーか」

「チューニング・サポーターがシンクロ素材にされた事によりカードを1枚ドローする。」

手札 1→2

「更にジャンク・デストロイヤーはシンクロ召喚に成功した時シンクロ素材にしたチューナー以外の数フィールドのカードを破壊する！」

2枚の破壊か、俺のカードを全て破壊と言う訳か——だが
「ジャンク・デストロイヤーのチューナー以外のシンクロ素材はチューニング・サポー

ターチ・ジヤンク・サーバントよつて2枚カードを破壊出来る。俺は魔王龍ベエルゼと伏せカードを破壊する！ タイダル・エナジー」。

ジヤンク・デストロイヤーより放たれる破壊のエネルギーが相手のフィールドを破壊し尽くすべく放出され、魔王龍ベエルゼと伏せカードを直撃する

「貴様が破壊した伏せカードはミラクルシンクロフュージョン、よつて効果により俺はカードを1枚ドローする。」

ミラクルシンクロフュージョン 魔

【通常魔法】

自分のフィールド上・墓地から、融合モンスターカードによつて決められた融合素材モンスターをゲームから除外し、シンクロモンスターを融合素材とするその融合モンスター1体を

融合召喚扱いとしてエクストラデッキから特殊召喚する。

また、セットされたこのカードが相手のカードの効果によつて破壊され墓地へ送られた時、自分はデッキからカードを1枚ドローする。

手札 3→4

本来ならシドの戦士族のカードと俺のカードを融合に使うところだが、このデュエル俺は俺自らの力で闘う決めた

故に墓地のコナミとシドお前達のカードは使わない、すまないなこの様な舞台を用意をしてくれたと言うのに。

「一枚ドロー去れたか・・・ だが、お前のフィールドは此れで無くなつた。」「それはどうかな不動 遊星 俺のフィールドを見てみる。」

ジヤンク・デストロイヤーから放たれた破壊のエネルギーによりフィールドのカードは破壊されたはず――だが、魔王龍 ベエルゼは破壊される事無くそこにいた

「何つ!?

「魔王龍ベエルゼは効果、戦闘では破壊去れない。 だが安心しろ攻撃力を越えていれば戦闘ダメージは通る。」

「くつ、ならば! 手札から増援を発動デッキからラツシユ・ウォリアーを手札に加える。」

ラツシユ・ウォリアー 風

☆2

【戦士族・効果】

攻 300

守 1200

「ラツシユ・ウォリアー」の(1)(2)の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用でき

ない。

自分の「ウォリアー」Sモンスターが相手モンスターと戦闘を行うダメージ計算時、このカードを手札から墓地へ送つて発動できる。

その戦闘を行う自分のモンスターの攻撃力は、そのダメージ計算時のみ倍になる。

墓地のこのカードを除外し、自分の墓地の「シンクロ」モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを手札に加える。

手札 2→1→2

「なるほど、マジックカードが発動した事によりこのターン、ニトロ・ウォリアーは戦闘計算時攻撃力が3800になり、更にラツシュ・ウォリアーのを捨て攻撃力は倍になれば俺のライフはゼロか。」

早々にけりをつけに来たか、だがまだこのデュエル終わらせたくは無いものだな。

「バトル、ニトロ・ウォリアーで魔王龍 ベエルゼを攻撃！」

「ニトロ・ウォリアーの攻撃宣言時、手札の虹クリボ一の効果を発動！ このカードを手札から装備カード扱いとしニトロ・ウォリアーに装備、この効果でこのカードを装備しているモンスターは攻撃することは出来ない。」

ニトロ・ウォリアーが攻撃体制へと入ろうとした時、目の前に額に虹色のひし形のとさか?を持つ丸く可愛らしいモンスターが現れた。

虹クリボ一 光

☆1

【悪魔族・効果】

| | |
|---|-----|
| 攻 | 100 |
| 守 | 100 |

「虹クリボ一」の以下の効果はそれぞれ1ターンに1度ずつ発動できる。

相手モンスターの攻撃宣言時に発動できる。

このカードを手札から装備カード扱いとしてそのモンスターに装備する。

この効果でこのカードを装備しているモンスターは攻撃できない。

相手モンスターの直接攻撃宣言時に発動できる。

このカードを墓地から特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したこのカードは、フィールド上から離れた場合ゲームから除外される。

手札 4→3

魔法・罠 0 ↓ 1

「攻撃が出来ない、だと。」

「まだデュエルは終わらせはしないぞ、

不動 遊星。」

「・・・ターンエンドだ。」

第三十一話

奴のフィールドには、ニトロ・ウォリアーとジャンク・デストロイヤーそのどちらもベエルゼの攻撃力には届きはしないが、奴の手札にはラッシュ・ウォリアーがある。くず鉄のかかしを破壊し攻撃が通せたとしても奴のモンスターを破壊は出来ない、むしろこちらの方がダメージを食らか・・・

「俺のターン！ ドロー！」

手札 3→4

「俺は手札から速攻魔法 サイクロンを発動！ 貴様のくず鉄のかかしを破壊する！」

フィールドに強力な回転の小型の竜巻が発生すると相手フィールド目掛け動きだし、その強力な回転に巻き込まれ伏せカードは破壊された。

偽ジャック

手札 4→3

遊星

魔法・罠 2→1

「更に俺は手札からジエスター・コンフイを攻撃表示で特殊召喚！」

小さなボールの上に器用に片足で立つ小太りのピエロのモンスターがフィールドに現れた。

ジエスター・コンフィ闇

☆1

【魔法使い族・効果】

| | |
|---|---|
| 攻 | 0 |
| 守 | 0 |

このカードは手札から表側攻撃表示で特殊召喚できる。

この方法で特殊召喚した場合、次の相手のエンドフェイズ時に相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択し、そのモンスターと表側表示のこのカードを持ち主の手札に戻す。

「ジエスター・コンフィ」は自分フィールド上に1体しか表側表示で存在できない。

手札 3→2

フィールド 1→2

「そして、ダーク・スプロケッターを攻撃表示で通常召喚！」

体に自動車のチエーンをぐるぐると巻き付け歯車の様な物を首に付け丸いた丸い顔のその見た目がみのむしの様なモンスターが現れた。

ダーク・スプロケッター 閻

☆1

【悪魔族・効果／チューナー】

攻 400

守 0

このカードが闇属性のシンクロモンスターのシンクロ召喚に使用され墓地へ送られた場合、フィールド上に表側表示で存在する魔法または罠カード1枚を破壊する事ができる。

手札 2↓1

フィールド 2↓3

「カードは揃つた、不動 遊星！ 見せてやろうベエルゼの更なる姿をを！ 抗えぬ力を！」

「ベエルゼの更なる姿だと！」

「行くぞ！ 僕はレベル8魔王龍ベエルゼとレベル1ジエスター・コンフィにレベル1
ダーク・スプロケッターをチューニング！」

ダーク・スプロケッターがフィールドの空へと飛び上るとその姿を、黒い1つのリングへと変わる

「地を這いし億万の蛆虫よ！　その身をやつし天を埋めよ!!　全ての世界は我が掌中にあり!!」

2体のモンスターがファイールドの空を飛ぶ黒いリングを目指し飛び立ちそれぞれがリングを通過すると黒い光の柱がリングを貫く

「君臨せよ!!魔王超龍　ベエルゼウス！」

黒い光が消えファイールドに新たなモンスターが現れた。

その姿は魔王龍ベエルゼと余り変わりはしない、だが同じと言うには余りにも禍々しくも神々しい凶悪な龍がそこにはいた。

禍々しいオーラをその体から発し周囲を黒く蝕み、自信の誕生をうち震えるかの如く歓喜の咆哮がファイールドを振るわせる。

魔王超龍　ベエルゼウス　闇

☆10

【ドラゴン族・シンクロ／効果】

攻4000

守4000

闇属性チューナー+チューナー以外のモンスター2体以上

このカードは戦闘・効果では破壊されない。

このカードがモンスターゾーンに存在する限り、このカード以外の自分のモンスターは攻撃できない。

1ターンに1度、相手フィールドのモンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターの攻撃力を0にし、その元々の攻撃力分だけ自分はLPを回復する。

また、このターンこのカードの戦闘によつて発生する相手プレイヤーへの戦闘ダメージは半分になる。

「此が、ベエルゼの更なる姿……くつ、ただそこにに要在るだけだと言うのに何でプレッシャーだ（それに、赤き龍の癌がまた反応している……一体何なんだ……）

「ダーク・スプロケツターが闇属性シンクロモンスターの素材とし墓地へ送られた事により効果が発動！フィールド上の表側表示の魔法・罠を1枚破壊する！俺は装備カードとなつた虹クリボーを破壊する！」

フィールドの地面から幾つものチエーンが装備カードとして存在していた虹クリボーに巻き付き、その体をチエーンが切断し破壊する

魔法・罠 1→0

「なつ！ 自分のカードを破壊しただと。」

虹クリボー、お前の破壊は無駄にはしないぞ

「不動遊星！見るがいい！魔王超龍ベエルゼウスの力を！1ターンに一度、相手フィールドのモンスター1体を対象として発動する、そのモンスターの攻撃力を0にし、その元々の攻撃力分だけ自分のLPを回復する！蠅王霸權《ベエルゼウス・サプラマシー》！」

魔王と神の名を関する邪悪なる龍の理不尽で絶対なる力が、ニトロ・ウォリアーからその力の全てを強制的に永続的に奪い去っていく・・・

ニトロ・ウォリアー

攻撃力 2800→0

偽・ジャック

LP 4000→6800

「モンスターの攻撃力をゼロにし、ライフポイントを回復させるだと!?」

「驚いている暇はないぞ、魔王超龍ベエルゼウスでニトロ・ウォリアーに攻撃！蠅王殲滅霸軍《ベエルゼウス・ジエノサイダー》！」

「なつ、不味い!?」

解放される神の力の前には抗う事など不可能、防ぐ事も逃げる事も出来ず魔王超龍ベエルゼウスよりその力が放たれる。

その絶大なる神の力によりニトロ・ウォリアーはフィールドからその存在を跡形もなく消し去られた

「ぐわあああああああつ！」

LP 4000 → 2000

フィールド 2 → 1

「魔王超龍ベエルゼウスは自信の効果により相手モンスターの攻撃力を0にしライフを回復したとき、相手に与える戦闘ダメージは半分になる。よって貴様に発生する戦闘ダメージは2000、俺はターンエンドだ。」

さあ、不動 遊星 僕のベエルゼウスどう攻略する！

「（・・・相手のフィールドには攻撃力4000のベエルゼウス、ジャンク・デストロイヤーでは勝てない・・・例え攻撃力が上回ったとしてもベエルゼの様に破壊耐性がある可能性がある・・・だが、奴の効果を無効にしてしまえば勝機はある、このターンでのカードを引けば）俺のターン、ドロー！」

手札 2 → 3

「・・・来たか 手札からシンクロ・キャンセルを発動。」

シンクロキヤンセル 魔

【通常】

フィールド上に表側表示で存在するシンクロモンスター1体を選択してエクストラデッキに戻す。

さらに、エクストラデッキに戻したそのモンスターのシンクロ召喚に使用したシンクロ素材モンスター一組が自分の墓地に揃つていれば、その一組を自分フィールド上に特殊召喚できる。

「ジャンク・デストロイヤーを選択し、シンクロ素材とした、チューニング・サポート、ジャンク・サーバント、ジャンク・シンクロロンを墓地から特殊召喚！」

フィールドのジャンク・デストロイヤーが空中へと飛び上がり、その体の周りにシンクロ召喚時の様に3つのリングのエフェクトが発生すると、ジャンク・デストロイヤーを中心に光の柱が発生し光がやむと

フィールドには、シンクロ素材とした3体のモンスターが新に現れた

手札 3↓2

フィールド 1↓3

シンクロキヤンセルか、ジャンク・デストロイヤーではこの局面を凌ぎきれないと判断したか。

だが、ベエルゼウスは破壊耐性があるウォリアー系のシンクロモンスターを出しラッシュ・ウォリアーで攻撃力を2倍にしようとも俺のライフを削り切ることは出来ない、此方のライフが残れば俺のターンにまたベエルゼウスの効果を発動させる・・・不動遊星この局面どう乗り越える――――

「行くぞ、レベル1チューニング・サポーター、レベル4ジャンク・サーバントにレベル3ジャンク・シンクロロンをチューニング！」

フィールドのジャンク・シンクロロンが背中に背負つているエンジンを作動させ空中へと飛び上がりその姿を、緑色の3つの列なつたリングへと変わる
「集いし願いが新たに輝く星となる。」

フィールドの2体のモンスターそれぞれ空中に飛び3つのリングへと目掛け飛び立つ

「光さす道となれ！ シンクロ召喚！」

2体のモンスターがリングをくぐり抜けるとリングを縦に貫く様に光の柱が発生する――――

「飛翔せよ！　スターダスト・ドラゴン！」

その言葉と共にフィールドに発生した光の柱が弾けとび、其の所には純白の体と翼を持つあらゆる破壊の力を無効にする不動　遊星のエースモンスターのドラゴンがたちに咆哮を上げる。

スターダスト・ドラゴン　風

☆8

【ドラゴン族・効果／シンクロ】

攻2500

守2000

チューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上

フィールドのカードを破壊する魔法・罠・モンスターの効果が発動した時、このカードをリリースして発動できる。

その発動を無効にし破壊する。

このカードの効果を適用したターンのエンドフェイズに発動できる。

その効果を発動するためにリリースしたこのカードを墓地から特殊召喚する。

「チューニング・サポートーがシンクロ素材として墓地へ送られた事によりカードを一枚ドローする———（スターダスト・ドラゴンは召喚できた…残るはあのカーボン

ドをドロー出来るかどうかだ・・・」

この瞬間デッキトップのカードが微かにだが光だしていた

「（全員の力を合わせ此所まで来た、だからこそ必ずドローしてみせる！）　このドローで勝利を切り開いて見せる！　ドロー！」

手札　2→3

フィールド　3→1

「！！（来た、此でカードは揃つた。）」

「ほう、この場面でスターダストを召喚するか――――だが、スターダストでは俺のベエルゼウスを倒す事は出来んぞ！」

「ああ、確かにスターダストではベエルゼウスの攻撃力には届かない……だが！　スター
ダスト・ドラゴンがシンクロ召喚に成功した事により墓地のスターダスト・シャオロン
の効果が発動する、墓地より蘇れスターダスト・シャオロン。」

フィールドに鉄仮面を着けた小さな東洋龍が現れた。

スターダスト・シャオロン

光

☆1

【ドラゴン族・効果】

攻 100
守 100

自分が「スター・ダスト・ドラゴン」のシンクロ召喚に成功した時、墓地のこのカードを表側攻撃表示で特殊召喚できる。

このカードは1ターンに1度だけ、戦闘では破壊されない。

フィールド 1→2

「何つ!? 墓地からスター・ダスト・シャオロンを特殊召喚だと! 一体何時の間に……いや、そうか調律の時に効果でデッキトップから墓地へ送られたカードがスター・ダスト・シャオロンだつたのか!」

「そうだ、その時に墓地へ送られたカードがスター・ダスト・シャオロン……そして、仲間達との絆のこのカードがベエルゼウスを打ち碎く力となる! 現れろ、救世竜セイヴァー・ドラゴン!」

フィールドに丸い頭部を持ち小さな白い翼を持つピンク色の小さなドラゴンが現れた

救世竜 セイヴァー・ドラゴン 光

☆1

【ドラゴン族・効果／チューナー】

攻 0
守 0

このカードをシンクロ素材とする場合、「セイヴアー」と名のついたモンスターのシンクロ召喚にしか使用できない。

手札 3↓2

フィールド 2↓3

「救世竜セイヴアー・ドラゴン・・・ふつ、ならば次に出るのはあのカードか――」
 「行くぞ！ レベル8 スターダスト・ドラゴンとレベル1 スターダスト・シャオロン
 にレベル1 救世竜セイヴアー・ドラゴンをチューニング！」

3体のドラゴンがフィールドの上空へと向かいその翼を力強く羽ばたかせ飛翔して

いく

「集いし星の輝きが、新たな奇跡を照らし出す。」

上空を飛ぶセイヴアードラゴンが半透明になりその体を十数倍にまで巨大化すると
 2体のドラゴンを包み込むと、その体が光輝き辺り一面を照らし出す

「光さす道となれ！ シンクロ召喚！ 光来せよ、セイヴアー・スター・ドラゴン！」

輝く光の中より、その体を蒼白に煌めかせ白く輝く四枚の翼を持つ赤き龍の力を得た、新たなるスターダスト・ドラゴンがフィールドに現れる。

セイヴアー・スター・ドラゴン 風

☆10

【ドラゴン族・シンクロ／効果】

攻3800

守3000

「救世竜 セイヴアー・ドラゴン」+「スターダスト・ドラゴン」+チューナー以外のモンスター1体

相手が魔法・罠・効果モンスターの効果を発動した時、このカードをリリースする事でその発動を無効にし、相手フィールド上のカードを全て破壊する。

1ターンに1度、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択し、その効果をエンドフェイズ時まで無効にできる。

また、この効果で無効にしたモンスターに記された効果を、このターンこのカードの効果として1度だけ発動できる。

エンドフェイズ時、このカードをエクストラデッキに戻し、自分の墓地の「スター・ドラゴン」1体を選択して特殊召喚する。

フィールド 3→1

「セイヴアー・スタードラゴンの効果を発動！ 1ターンに1度、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択し、その効果をエンドフェイズ時まで無効する！ 魔王超龍ベエルゼウスを選択しその効果を無効にする！ 《サブリメーション・ドレイン》！」

セイヴアー・スタードラゴンの力が発動すると、対峙していた魔王超龍ベエルゼウスの全身からベエルゼウスの持つ力が抜け出しセイヴアー・スタードラゴンへと集まつて行く

「更にこの効果で無効にしたモンスター効果を、このターンこのカードの効果として1度だけ発動できる。俺は、魔王超龍ベエルゼウスの効果をセイヴアー・スタードラゴンの効果として発動する！ 魔王超龍ベエルゼウスを選択しその攻撃力を0にし、その元々の攻撃力4000をライフポイントを回復する！」

本来自信が持つその凶悪無比なその力が、セイヴアー・スタードラゴンより発せられベエルゼウス自信に襲いかかりその力を奪い去っていく

魔王超龍ベエルゼウス

攻 4000→0

遊星

LP 20000→6000

「俺のベエルゼウスを此所まで無力化するとはさすがだな……だが、その効果を発動したと言うことはこのターン俺が受けるダメージは半減するぞ。」

「ああ、だが構わない攻撃力3800の半分の1900ダメージは与えられる！ 行け、サイヴァー・スタードラゴン！ 魔王超龍ベエルゼウスに攻撃、シユーティング・ブランスター・ソニック！」

全身に光輝く聖なるエネルギーを放ちながら、眼前の敵へと光速を越えた一撃が放たれ魔王超龍ベエルゼウスはその一撃を防ぐことは出来ず光速の一撃に貫かれ破壊される

偽ジャック

LP 6800→4900

フィールド 1→0

「ふつ、フィールドががら空きになつてしまつたな。 だが、貴様はこれ以上攻撃はできまい。」

「…此で、俺はバトルフェイズを終了する——だが、俺のターンはまだ終わってはいない！　トラップ発動、リミット・リバース！」

リミット・リバース 罷

【永続】

自分の墓地の攻撃力1000以下のモンスター1体を選択し、表側攻撃表示で特殊召喚する。

そのモンスターが守備表示になった時、そのモンスターとこのカードを破壊する。

このカードがフィールド上から離れた時、そのモンスターを破壊する。

そのモンスターが破壊された時、このカードを破壊する。

「攻撃力1000以下のモンスターをただ壁モンスターとして出す訳では有るまい、次のターンに備えての事かセイヴアー・スタードラゴンはこのターンでエクストラデッキに戻るからな」

「墓地よりクイック・シンクロンを攻撃表示で特殊召喚！　更にフィールドにチューナー・モンスターが存在する場合、このカードを墓地から特殊召喚する事が出来る。　墓地よりボルト・ヘッジホッジを特殊召喚。」

フィールドに、赤いマントを纏かせカウボーイハットを身に付けた青い機械のガンマ

ンと背中に幾つものネジが生えている茶色いネズミのモンスターが現れる

ボルト・ヘッジホッグ 地☆2【機械族・効果】

攻 800

守 800

自分メインフェイズに発動できる。

このカードを墓地から特殊召喚する。

この効果は自分フィールドにチューナーが存在する場合に発動と処理ができる。

この効果で特殊召喚したこのカードは、フィールドから離れた場合に除外される。

フィールド 1↓3

「最初のクイック・シンクロンの特殊召喚のコストとして墓地へ送ったボルト・ヘッジホッグを此処で特殊召喚するか。（シンクロ召喚をするならばレベル7、ジャンク・アーチャー、バーサーカー、ニトロ・ウォリアーか・・・だが、本当にこいつらを出すために今墓地から2体を蘇生させたのか・・・）」

「更に手札から、マジックカード二重波紋を発動！」

二重波紋 魔

【通常】

自分フィールド上に表側表示で存在する、チューナー1体とチューナー以外のモンス

ター1体をレベルの合計が7になるように墓地へ送り、エクストラデッキから「パワー・ツール・ドラゴン」と「エンシエント・フェアリー・ドラゴン」を1体ずつ表側守備表示で特殊召喚する。

「つ、二重波紋だと！」

「レベル2のボルト・ヘッジホッグとレベル5クイック・シンクロンを墓地へ送り、エクストラデッキより「パワー・ツール・ドラゴン」と「エンシエント・フェアリー・ドラゴン」を1体ずつ表側守備表示で特殊召喚する。龍可、龍亞、お前達のカード使わせて貰うぞ。」

フィールドの2体のモンスターが光に包まれ新たにフィールドに2体のドラゴンが現れる。

1体は、右手に青いバケットのアームをつく左手には巨大なドライバーを装着した黃色い装甲の機械のドラゴンに

1体は、妖精の様な翼を持ち頭や体などに金の装飾品を身に付けた細身の水色のドラゴンが現れる。

パワー・ツール・ドラゴン 地

☆7

【機械族・シンクロ／効果】

攻2300

守2500

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に発動できる。

デッキから装備魔法カードを3枚選んで相手に見せ、相手はその中からランダムに1枚選ぶ。

相手が選んだカード1枚を自分の手札に加え、残りのカードをデッキに戻す。

また、装備魔法カードを装備したこのカードが破壊される場合、代わりにこのカードに装備された装備魔法カード1枚を墓地へ送る事ができる。

エンシエント・フェアリー・ドラゴン 光

☆7

【ドラゴン族・シンクロ／効果】

攻2100

守3000

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

1ターンに1度、手札からレベル4以下のモンスター1体を特殊召喚できる。
この効果を発動するターン、自分はバトルフェイズを行えない。

また、1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に発動できる。

フィールド上のフィールド魔法カードを全て破壊し、自分は1000ライフポイント回復する。

その後、デッキからフィールド魔法カード1枚を手札に加える事ができる。

フィールド 3→3

手札 2→1

「まさか、二重波紋を手札に持っていたとはな。 次のターンの備えは万全と言うわけか。」

「まだだ！ パワー・ツール・ドラゴン効果を発動、1ターンに1度、デッキから装備魔法カードを3枚選ぶ、そしてその中からランダムに相手は1枚選びそのカードを手札加える。」

フィールドに三枚のカードのソリッドビジョンが浮かび上がる

「三枚の中から1枚を選擇か、ならば俺は真ん中のカードを選ぶ。」

手札 1→2

「残りの2枚は、デッキへと戻す。そして、手札に加えた装備魔法ファインティング・スピリットをパワー・ツール・ドラゴンに装備。」

装備カードを装着したパワー・ツール・ドラゴンの体から激しくオーラが吹き出す
ファイティング・スピリット 魔

【装備】

装備モンスターの攻撃力は相手フィールド上に存在する。モンスター1体につき300ポイントアップする。

装備モンスターが戦闘によつて破壊される場合、代わりにこのカードを破壊する事ができる。

手札 2→1

魔・罠 1→2

「これで、俺はターンを終了する。そして、エンドフェイズ時セイヴアー・スタードラゴンをエクストラデッキに戻すことで墓地のスターダスト・ドラゴンをフィールドに特殊召喚する！ 現れろスターダスト・ドラゴン！」

蒼白に煌めくドラゴンがその輝きを増し一瞬目が眩むほどの光を放つ、光が晴れたそこには純白の翼を持つ白きドラゴンが変わりに其所にはいた。